99-170

エーヴベリー卿即チラボック博士自筆の書簡

8 January 900

Dear Sir

I am happy to give you my friend Mr Nakagawa permission to translate one of my books into Japanese.

Will you please

let me know which he selects.

I shall be glad if he will send me six copies when it is published.

I am

yours truly

John Lubbock

S. Joshii Esq

譯文

小生は拙著の一を日本文に譯せんと、貴友中島君に許るせば、何れの書を選ばるべきか通知ありたし、又譯書出板の上六部寄贈ありたし。

千九百年一月八日

吉居君 貴下

ジョン、ラボック 拝具

99-170

エーヴベリー卿即チラボック博士自筆の書簡

8 January 900

Dear Sir

I am happy to give you and Mr Nakajima permission to translate one of my books into Japanese.

Will you kindly let me know which be selected.

I shall be glad if be earlier sent me several copies when it is published.

I am

yours truly

John Lubbock

I. Yoshii Esq

譯文

小生は拙著の一を日本文に譯するとき、何れの書を選ばるるか通知せられ、又譯書出板の上、六部寄贈を乞ふ、

千九百年一月八日

吉居君 貴下

「ジョン、ラボック」拜具

99-170

序

原著は英國近世の碩學「エーヴベリー」卿の筆に成り其文古潔、其言千古不易、皆平常人の言はんと欲して言ふ能はざる所讀て樂むべくして又誠むべし、友人法學士中島滋太郎君、曾に其友吉居氏に介して著者より之を邦文に飜譯するの許諾を得たれども、故ありて未だ果たさず、今茲盛夏、偶ま之を予に詢る、予一讀、其世道人心に裨益すること少小ならざるものあるを思ひ、不學を顧みず代りて之を譯す、予原と常務あり、且つ極めて忙劇、日落ちて漸く家に歸り燭を剪りて復た之に從事す夜熱未だ散せず、初めは心の悶々たるを覺たりと雖も、讀むと益精く、味ふと愈深く、筆を着くるに當りては氣澄み神清く、風何れの處よりか颼々、水何れの處よりか潺々、坐ろに熱を深山

明治
38 10 6
交内

幽谷の間に避け、超然として造化を樂む想あり、更に勞の至らんとするを知らさらしむ、良書の人心を慰む何ぞ其れ大なるや、斯の如きと數十夕にして業卒る、爾來自ら校正を重ぬる數回、茲に之を鉛槧に付す、文字圓熟ならず、瓦石を以て金玉に換ゆるが如きは、顧みて私に耻づる所なりと雖も、幸に予が此消夏の餘業、人の攪眠の資となるを得ば、庶くは原著者の素志に負くなきに幾からん歟、壬寅十月、正木照藏識

例言

一男爵「エーヴベリー」Avebury は即ち「ラボック」博士 Sir John Lubbock. のことにして、千八百三十四年を以て龍動に生まれ、「イートン」の公立學校に學び、十四歳にして父の業を助け銀行家となる、長ずるに及びて教育事業並に經濟界に盡くす所、少なからず、千八百七十年「メイドストン」より選ばれて衆議院に列し、同八十年復龍動大學より選ばれて、衆議院に列し引續き今尚ほ之を代表す、其盡力に依りて通過せし法案、十數あり、就中銀行休日條例、爲替手形條例、工場時間條例の如き其著るしきものたり、之より先、「チクスフチード」「ケヤムブリッヂ」「エヂンバラ」「ダブリン」「ワーヅバルグ」の諸大學は贈るに名

譽博士の稱號を以てし、女皇亦授くるに準男爵を以てし一兩年前、更に男爵に昇叙せらる、龍動大學の副總理、英國協會の總理、龍動商業會議所頭取、龍動州會議長、是れ其歴任の諸公職なり、著はす所「歴史前の時代」「文明の起源」「蟲類の起源及び物化」「英國の野花と蟲類との關係」「蟻と蜂類」「動物の感覺及び性行」「生涯の樂」「造化の美」「瑞西の風景」等あり、何れも大に世に行はる、本書原名「ヂ、ユース、ヲフ、ライフ」The Use of Life. と稱して千八百九十四年の著に係り以來數十版に及び、男爵の著書中に在りても出色の小品たり

一書中古今諸大家の格言、警句等を引用すること、極めて多し明かに其名を掲げざるものと雖も括弧中にあるは皆、出所

來歴のある語言と知るべし

一原書中詩歌を引用することと亦頗る多し、詩歌は原來、神韻を主とするものにして、之を他國の言語に飜譯すること甚だ難し、然れども之を省くときは往々文理を害する虞ある所少なからず、又神韻は姑らく措き、其主旨にして尚ほ大に味ふに足るべきもの少なからざるを以て、大抵は更に韻調に關せず、且らく其意を譯出して之を存することに勉めたり

一書中載する所の人名中、既に邦人の口に膾炙するものを除き、其他は概ね名下に括弧を用ゐ、何れの時世、何れの國の人なるかを簡單に記入し置けり、是れ譯者一片の婆心なり、尤も一たび前に掲げたるものは、後に之を省き其煩を避くる

ことせり

本書に關する法學士吉居豐治君の手簡

拜啓陳者小生滯英中、老兄より御送附の「人の一生」御申聞けに從ひ、原著者「エーヴベリー」男爵へ屆け置き候處、一日男爵より態人を以て、明朝九時迄に來りて朝餐を共にせずやとの案內あり、欣んで之を請け、當日指定の時刻に「セント、ジエームセス、スクエーア」なる男爵の邸へ參り候に、學士會院幹事「ラーモア」博士、「ヲクスフオード」大學の「アンソン」教授、有名なる書肆「マクミラン」氏、亞細亞協會長「サー、チヤールス、ライチール」氏を首め其外大審院の判事、貴族院の議員、銀行頭取、商業會議所々長等何れも知名の紳士、彼是十六七名同じく招待を請けて來邸し居り、小生も大に面目を高め候、軈て男爵夫人、令孃等への紹介も相濟み、階上の食堂に入りて朝餐の卓に就く、其獻立は頗る簡單にして、飲み物の如き、茶と珈琲のみに過ぎず、候へ共、「メニ

ユー」を總て男爵の自筆にて認められしなど、其間何となく奥床しき所有之、深く主人の好意に感じ候、後にて聞けは朝餐に人を招くは「チクスフオード」「ケムブリッジ」等の大學社會には珍らしきことならざる由に候、其以來今日迄十數回手紙を贈り候、其度毎に折返し返書に接せさることなく、而して其返書は一として男爵の自筆に係らざるもの無之候、男爵本年既に七十歳の高齢に達し候へとも、尚ほ三四才の令孃の膝下に戯むれ居るを見受け候、体軀は痩せたる方なれとも、丈け高く、相貌極めて柔和、何れの點より見るも好個の標本的英國縉士に御座候、毎日自家の經營に係る「ロハート、ラボック、エンド、コムパニー」と稱する銀行に出勤して業務を執り、其傍種々なる方面に活動し、或は樞密院顧問、或は貴族院議院、或は「ユニヲニストの首領株として政治界に重きをなし、或は英國聯合商業會議所長、或は銀行集會所長、或は銀行頭取として、實業界に雄飛し、或は學士會院の會員、或は倫敦大學の評議員、或は幾多の外國專門學術會の名譽會員として教育界に盡くす所あり、尚ほ動物學者、植物學者、地質學者、人類學者として數多の著作ありて學問社會に一頭地を抽づ、男爵の如き誠に善く生活し、善く働くく人と可申欺、曩きに英國政府に於て商務大臣を置くの議あるや、男爵を以て其侯補者に擬するもの最も多かりし由、以て其名望の高きを知るに足るべく候、男爵に面會の節「人の一生」が、我邦に於て既に三版に達せしことを話し候處、そは一に飜譯の宜しきに因るべし、譯者に其成功を祝し吳れよと申され候、但し卷首に我手紙を其儘掲げられたるは聊か閉口なり、若しそれと知らは今少しく念を入れて認めたりしものをと微笑を漏され候、先日も本書の將さに四版を重ねんとするに至

りし趣報知致置候處、出版の上は數部郵送ありたしと申來り居候間右御承知置被下度候、原書は廣く諸外國文に反譯せられて世上に傳播し、英國にては既に數十版を重ね候、今又本邦に於ても其譯文の斯くの如く多くの讀者を得候こと、男爵も非常に滿足の旨話し居られ候、右の次第御心得迄に申上げ置き度草々頓首

三十八年八月

吉居生

正木老兄
待史

本書に對する批評の一班

●報知新聞論說欄に掲載せる村井弦齋氏の「人の一生を讀む」の全文

今の世に最も缺乏せるは人の心性德操を修養すべき書籍なり、而して心性德操の修養今人に最も必要なるを見る、我友正木照藏君頃日英國エーブベリー氏の原著人の一生を飜譯して世に公にす、君は郵船會社に在りて實務に從事せらる、此の反譯の如き營利の爲めにもあらず娛樂より出てたるにあらず全く世道人心を裨益するの少々ならざるを思ひ忙裏の閑を倫て僅に成れるものなり、余や敢て批評を加ふると云はず、只書中佳處多し、獨り自ら悅ぶに堪ゑず、一二會心のものを取りて逸興を讀者に頒たむ、書中人の榮枯盛衰を論じて

「人の爲に破滅せらるゝよりも自ら零落する人多し、風雨又は地震の爲めに破壞せらるゝよりも人の手に亡滅する家屋市街多し」

と言ふ如き東西隨處に適例を覩る

人は其快樂の爲めに辛苦する如く其德性の爲めに辛苦したらんには如何に美はしかりけんものを

と、此語は今の世の富豪輩に呈し度く思ふ

人は突然惡人となるものにあらず已れ自らに背く爲めには多少の時日と苦痛とを要すべし

と說きしは穿ちたり、惡をなしたる者之を讀まば冷汗の出づるあらん

如何なる卑怯の愚物にても惡人たるを得べきに反して苟くも善人たらんと欲せば眞に男らしからざるべからず

と、又人が眼前一時の小事實を視て天道を是非するを戒め

玆に人あり高きより落ちて其足を傷つくとも是引力の原則の不都合なるにあらず

と言ふ如き、警語にあらずや、書中に言へる事あり

其材能よりも寧ろ其品性によりて勢力を得る人多し、古人或る德望家を評して曰く彼は其面上に十戒を印せり

と今の所謂る貴顯紳士中面上に十戒を印する人ありや否や、故西鄕隆盛の如き才能に於ても武略に於ても他の俊傑に劣りしに獨り德望の巍然として一世を空しうせしは多くその品性より得來りしにあらずや

別段言ふべき事は無けれども唯談話を好む故に話す人多し、多辯即ち話し度き計りの話し好きは殆ど事の成功に對しては致命傷たり

と、雄辯は少し、多辯は多し、致命傷の一語下し得て妙

富を得る爲に急ぐ勿れ、英國の大畫家ラスキン曰く若し價格をして圖畫を制せしめざれば圖畫價格を制するに至るべし

獨り圖畫のみにあらじ、深く吏ひなば何者が此掟に負く事あらん

貧富との語は長短と云ふ如し、何を程度として兩者を分つべきや書中巧みに釋て曰く

貧者とは持つ物の少き人を謂ふにあらず 要むる物の多き人を謂ふなり

と、又

酒は啻に人を獸類に化するのみならず又實に狂人たらしむ

とて頻に酒の害を擧げたり、修養の功を說て曰く

人は素より誰にても大詩人たり大音樂家たり大美術家たりと言ふを得ずと雖も誰にても亦た深切、重厚、耐忍、勤儉、慈愛、淡泊、雄大、謹嚴なる事能はずと言ふを得ず是等に對しては天性之に適せずと云ふ遁辭を許さず

と、品性德操に天賦無し何人か求めて禽獸行に陷るものぞ

人若し貧者に金を與へ、酒店に往て費すべし、賭博をも試むべし、又往て不用の玩具を求めよと言はんか、誰か之を聞て喫驚せざらん、人に之をせよと云へば笑はるゝ事を何故己れ自ら爲すに至るか

と、橫道曲に聞かせ度く思ふ、其他懇に人を誡め人を敎へ、取て以て箴となすべきもの甚だ多

し全篇十九章、人生の事擧げて此中に在り、靜坐之を讀めば氣澄み神清く端然として自から心身を正さしむ、余は自ら好書を得たるを悅び、又世人に推薦するの甚だ快なるを覺ゆ

●萬朝報批評　原著は英國近代の碩學エーブベリー博士の晩筆に成り其文古談簡潔其言千古不易皆平常人の言はんと欲して言ふ能はざる所讀んで樂むべくして又誡むべし譯文は原文に似たとは云はれぬが平易溫和の善き文字で人心を稗益する良書である

●東京日々新聞批評　英國法學博士エーブベリー男爵の著を正木照藏氏の譯述せるものにして一大事、心術、金錢上の事、保養、健康、國民敎育、獨學、圖書館、讀書、愛國心、公民社會的生活、勉強、信仰、希望、慈善、品性、平和と幸福、宗敎、等の各項に就て學說理論に徵し人間處世の要義を說明せる好著なり

目次

人の一生目次

第一章　一大事……一
第二章　心術……二四
第三章　金錢上の事……四三
第四章　保養……六五
第五章　健康……八一
第六章　國民敎育……九七
第七章　獨學……一一四
第八章　圖書館……一三一
第九章　讀書……一四三
第十章　愛國心……一五四
第十一章　公民……一七三
第十二章　社會的の生涯……一九四

第十三章　勉強……二一六～
第十四章　信仰……二三五
第十五章　希望……二四七
第十六章　慈善……二五九～
第十七章　品性……二七〇～
第十八章　平和と幸福……二八七
第十九章　宗教……三〇五

以上

人の一生

英國　男爵「エーヴベリー」著
日本　正木照藏譯

第十章　一大事

此生涯に於て最も大切なるは如何にして此生涯を過ごすべきやと云ふ事なり、人に取りて此生涯を過ごす程、心配なるはなしと雖も、サテ如何にして善く之を過ごすべきやと云ふに至りては是れ程、復た人の辛苦を費さゞるもの他にあるなし

併し是れは中々單純なるとにあらず「ヒポクラテス」紀元前四百年代に雅典に住みし大醫其醫學眞理の初めに陳べて曰く此生涯や短し、斯術や長し、機

會は過ぐると早く研究は確なり難く、判斷は困難なりと

此生涯に於ける幸福と成功とは人々の境遇如何に由るものならで、寧ろ却て人々自らの爲す所に繫る、「人の爲めに破滅せらるゝよりも自ら零落する人多し、風雨又は地震の爲めに破壞せらるゝよりも人の手にて亡滅する家や市街の方多し」凡そ零落に二種あり、一は即ち歳月の爲す所、他は即ち人の爲す所

數ある零落の中にて人の行ふ零落ほど悲しきものあらじ、而して人の最惡なる敵は、「セネカ」(羅馬の哲學者)が云へりし如く、胸中に住むもの是なり、「ラ、ブルエレ」千六百年代巴里に住みし碩學曰く人を窮境に處せしめんが爲めに其時の多くを費やすもの少なからすと、「痛苦する骨が老て悔ゆる事を壯年の時の激昂せる血が企る場合」甚だ多し實にや「既に過ぎ往き、既に爲し終りたる事は、「クロソ」も復た之を織り成す能はず、「アトロポス」(「クロッソ」は古昔の女神にして「生」を司どり、其紡錘より「生」の糸を引き出す、「アトロポス」は「死」を司

どり「生」の糸を斷つ)も復た之を喚び返す能ず」、觀來れば人の其身を愛するも濫りに己れの爲めにすると多くして、適當なる道に依ると少し」

予は折々樂天主義を懷くものなりと攻擊せらるれども、予と雖も決して此生涯の困難と悲哀とを知らざるものにあらず、又之れなしと云ふものにあらず、倘又曾て人は幸福なるものなりと斷言せしことなし唯、人は幸福なるを得べしと云ふのみ、人にして幸福ならざるなれば右は概して其身の過失に由ると云ふのみ、大抵の人は幸福を樂むよりも更に之を拋擲する方多しと云ふのみ、顧みれば人を憂愁の境に吟呻せしむるもの畢竟こゝに在り、「凡そ舌又は筆を以て顯はし得べき悲しき語の中に就て、最も悲しきものは「斯くあるべかりしものを」と云ふ語なり」

惡と云ふは多く善の適用を誤りたる場合、又は之を過度に行ふたる場合なり、一個の車輪、否な車輪ならざるも其輪齒一片にても外づるゝときは忽ち全機械をして其用を失はしむ、若し人にして天の大道と調子外づれの位地

に立たんか、其爲め必ず苦しむ所あるを期せさるべからず、勇も過ぐれば暴となり、愛も過ぐれば弱となる、儉も過ぐれば吝となる、諺に云ふあり、甲の美膳となるものにして乙の毒となるものありと、畢竟天地の原則は之を完全と見るの外なく、茲に人あり高きより落ちて其足を傷つくとも是れ引力の原則の不都合なるにあらず

比耳斯亞人は幸福を神意に歸し、不幸を惡魔の所爲に歸す、然れども實際、人は己れの過に由りて自ら處世の困難を招致するものぞかし、而して此過に二義あり、常に其惡しき事たるを知りながら之を犯すものと、偶然の過失に出るものとを云ふ、後者必ずしも前者より少なからず、今夫れ此第一義の過に關しては人は之に陷らざる爲め其心中に確かなる指導者を有し居るなり、即ち惡とは我眼を開き居りながら爲す所業なれども、故らに眼を閉ぢ居るものは別として通常、眼を開き居らずして行ふ場合の不正は罪とはならじ、第二義の過に關しては理解に信頼せさるべからず、即ち兩親、兄長、友朋

の理解に信頼せさるべからず、而して又己れの教育と己れ自らに信頼せさるべからず、尙に己れの教育は己れ自らの一部にして人は高かれ低かれ皆自ら薫陶教育すべき一書生(自身のことを云ふ)を有するものなり

自ら教ゆるものは人に習ふたるものよりも、更に多く己れの身に着くべし

凡そ教育は學校を去る時を以て終るものにあらず、否な其時より漸く始まるものにして一生、終る期限のなきものたり、「セネカ」曰く若し人にして其體軀を運動せしむる如く其腦を運動せしめ、又其快樂の爲めに辛苦する如く其德性の爲めに辛苦したらんには如何に美しかりけんものをと

或る種族は常に天命を信す、其說に依れば何事も定まりたるものにて人の爲すと爲さゝるに拘らず、起るべきは起るなりと、而して此種の人々は人を以て造化の玩具に過ぎざる自動機と爲す、此に於て歟、先づ第一に考慮すべき點は、果して處世の學問のあるものか、無きものかと云ふとなり、敢て問はん、吾等は「時」と稱する大洋上に吾等の船を程能く舵取りて進航せしめ得べ

きか、將た忽ちに潮に流され破れ終るべきか、其答や明白なり、「夫れ人は人なり、其運命の主人なり」、若し否らざれば其過は自家の門戸に横はるなり、「何にもあれ汝が爾かあらんと望む所は即ち汝の在る所なり、苟くも切實と誠思とを以てせば、汝の爾かあらんと欲する所に、あり得る事は造化に參する人の意思の力たり

果して人が其運命の上に右の如き力を有するものとせば、自ら顧みて如何なるものならんと其望なりやを定め、如何にして此生涯を最も富饒なる封土と爲し得べきかを考ふると最大の要務となるべし、人によりては此生涯に於て或る目的を有すと雖も人によりては又之を有せざるあり、先づ我第一の主眼は吾れ自らを無上最善のものたらしむるに在り「ハムボルドット」(普魯西の學者にして政治家たり、千八百三十五年に死す)曰く誰れしも人のめざす所は其の力を最も高く、又最も調子よく發達せしめて以て完全無缺に至らしむるに在りと、即ち是れ「シィン、ボール、リッチテル」(神學者にして文

學者「ベヴアリヤ」に生れ、千八百廿五年に死す)の所謂る「原質より製出せられ得るだけ多く、吾れ自らより作り出すべしとの意なり、左はいへ單に利己主義のみより之を企圖すべからず、企圖せば必ず失敗に終ると明かなり、「ベイコン」曰く私福は何れより見るも人の此世に存する目的にあらずと、「ブラット」と「アリストートル」釋加」と「セント、ポール」の如き最善最大の心を有する人は決して唯其一身だけを完全にするを以て足れりとするものにあらず此に於てか予は、人は他人の爲めに自ら最善の人ならんとするものなりと假定し、進て人は皆之に就き如何に趣味ある業務を有するものなるかを指定せんと欲す、誰れも知る彼の希臘の格言の「汝自らを知れ」とは即ち己れを知るの必要と困難とを人に示すものなり、又「モンテイン」(佛國の碩學、千五百九十三年に死す)は其美しき語を以て告げて曰く此世界に於て己れ自らよりも大なる妖怪と、不可思議とを見たることなしと、又恐らく他に類ひ稀なる程、無事靜穩の生を了せし「サア、チィ、ブラウン」(英國の醫學博士にして文學

者、千二百八十二年に死す)は其三十年間の神異は歴史として言ふべきものにあらず寧ろ詩の一片にして作り話の如くに覺えたりと確言せられぬ助言を呈するは、昔より今に至る迄、何となく人に有難たかられぬ樂たるを證せり、曾て新西蘭の酋長、其改宗者のことに就き宣教師に對し告げて曰く此者は餘り多く助言する故、遂に死に處せりと、洵に哀れなる最後ならずや去りながら誰にても「第一の手にて、相談」を安く買はぬ人は第二の手にて、後悔」を高く買ふものなり、左れば予の目的は其身と其生涯との大部分を用ゐて以て何事をか爲し、何ものにかならんと希ふ人々に對して其人々の利害の爲めに聊か糊言せんとするに在り」

悲かな、人は常に其機會を失ふと多し、凡そ天の恩惠を濫費し或は之を抛擲し去るものにして幸福を得る人果して幾許かある

然れども注意せよ、快樂とは眞なるものにして假なるものにあらず、人は快樂と言はれ得るが故に、若し他の名稱を以て喚ばるゝなれば嫌惡すべき事

をも行ふ、又多くの人は唯自ら何の要務をも爲し居らぬ故、樂みつゝあるなりと思考し、或は又快樂なる語は單に感情にのみ適用せらるゝものとせり焉んぞ知らん、心の快樂は之に反して更に完全にして且つ更に永續すべきものたるとを

人は唯一の身體を等閑にし又は不注意よりして之を毀害す、而して身體の健康如何は大に心神の健康上に影響するを知らざるなり、實際人は美術に依りて得らるべき樂みの半をも樂み居らず、試に看よ龍動に在住する人民にして國立美術館に往きしとあるもの幾部分あるか、吾等は又學術の趣味を玩味するに狎れず、英國博物館に往く者も常に寥々たり、況んや往て觀て之を玩味する積りの人に於てをや、約言すれば吾が住む地上の美も、吾が戴く天上の美も樂てゝ之を樂まざるなり、成る程音樂は稍や之を樂むと雖も、尚更に多く樂み得べきなり、普通の動物は唯性行を有するのみなるに反して人類は理解力を有する者なりとは、人の自ら誇る所なれども此人の自ら

誇る智能が、果して何程の幸福を人類の上に加へたるか、遂には「サイニック」ス」(雅典に在りし犬教徒)が問へるが如く、人の心は結局樂みの種よりも寧ろ苦みの種となる無用物にあらずやとの疑を起し來るに至る、即ち普通の動物は自ら苦境に陷るらされども人は自ら陷るるなり、又「人は無益に自ら苦み、無益に自ら憂慮し」疑惑と恐怖を懷て自ら煩悶するなり、素より不可思議の事物は四方八方より人を圍むと雖も之れが爲め短氣を出すに及ばず事に當りて心配するには及ばざれども常に用心が肝要なり、十が九迄も間違ひの起るべき憂なしと思ふ事にても氣を付けさるべからず「チエスタフヒルド」卿曰く悪德を防ぐよりも善性を適當に誘く爲めに、多く判談力の必要なるとを思ふ、悪德の眞相は醜穢にして一見人を震慴せしむるに足れば苟くも初めに或る善性の形を裝ひ來るにあらされば中々吾等を誘引すると能はざるものなりと、凡そ邪慳刻薄の境に誘はるゝ者にして多くの善根を有するもの尠からず「バルマルストン」卿は曾て、總ての兒童は善性を以て

生れ來れるなりと確信し以て自ら神學上の斷案を爲せしとあり、之を要するに兎も角、人の全然、悪人となり終る迄には多少手數のかゝるものなり此世界の悪道に於ても有難きとには、人は突然悪人となるものにあらず、己れ自らに背く爲めには多少の時日と苦痛とを要すべし、彼の「ヴチルカン」神の鍛冶)が一日にして天より落ちし如くに人は俄に其德性より惰落するものにあらず」

更に個人より轉して人間社會を一瞥せば、人の其利益を無視すると尙猶は驚くべきものあらさるか「ニュートン」の如き人も出たりと雖も人類は尙ほ未だ發見せられざる「眞理」の大洋を前に控ゑながら海濱に立ちて、通常よりも少し計り奇麗なる貝殼や海草を彼所此所より集め來りて遊ぶ一群の兒童に外ならず、天地間の物未だ一として其性質と利用の途の吾等に十分明白となれるものなし、素より吾等とても朝より晩に到る迄働き居るには相違なしと雖も若し吾等にして今少し天地間に有らゆる事物の天性と勢力

とを十分に利用するとを得しならんには一日の中僅か一二時間にして其身体上の所要と總て正當なる所要を充たすとを得て、心と愛との修養に多くの時間を作るとを得しものを、例して言へば蒸汽と雖も尚ほ未だ十分利用せられたりと謂ふべからず、電氣の利用は吾等の兒時には更に分らず、此比に至り漸く理解し初めたるに過ぎず、河の水勢は依然として中流を流れて無用に歸し居れり、又若し魔睡劑の發明にして今少し早かりしなれば如何程、人類の大苦痛を禁じ得し乎、一々之を擧げ來れば褒然として卷を爲さん、結局未だ數千の發明が我眼前に横はり居るとは誰れしも疑を容れさる所なり、然れば則ち世の自ら耶蘇教民と唱ふる國民が「其前に横はれる未發見の「眞理の太洋」を見ながら領土を得んと欲して互に相滅さんが爲め數百万の金錢を濫費し、猛獸の如く鬪爭するは實に驚くべきとにあらずや

前代に在りては吾等は尚ほ未だ多くの兒童に讀み書きを教えずして、生長せしむるを以て足れりとせり、今日に在りても尚ほ教育の過度を云々する

者あるを聞く、但し之を正當に言へば是等の人は多く、日々の生計如何を外にして教育するを難んずる施こす尤も中には無學の遂に教育費よりも高くつくを悟らずして其費途に就き不平を唱ふる人なきにあらずと雖も、夫は兎も角、今日に在りては先づ我兒童は殆んど全く多少の教育を受け居る者として可なり、就ては予は敢て今之を問題とする考にあらざるも、果して其教育の方法は最も適實なるものを採用し居れり否といふと、蓋し之より生する一疑點なるべし之に對して予は唯、言はんとす、我學校に於ては似合しからぬ程、德育の點を打捨て置くに似たりと、其結果の如何は殆んど說く迄もなし、人若し十戒中の或る者を破るならば取りも直さず是れ大惡を行ひ而して恐らく其爲めに人を困難せしむるに至るものなりと雖も己れ自らに取りては、少くとも現世に於ては其爲め幸福を增し、都合能き境遇になりゆくとと思ひ、嗜慾、吝嗇、暴飲、怠惰、其他の惡德は不正の行爲といへばいへ、又假令ひ之が爲めに人を害ふと雖も己が爲めには利ありと思ひ、逸樂偷安

の生涯は唯其身自らのとのみより言へば必ず誰しも自然と之を望むものなりと思ひ、又假令ひ善根と德行とは正くして且つ尊きものたらしむるも、無邪氣なる樂の上にも尙ほ幾多の制慾を施こすにあらざれば之を爲し難く、詮する所克己の生涯たらざるべからずと思ふに了らんのみ

眞理は裏面に在り、惡性の特權は放縱にして牽束を受けざる所に在るが如くなれども實際は全く然らず惡人は「自己の情慾」といふ最惡なる主人の奴隷たり

或る若き人達の中には、惡行は自ら男らしき所ありと誤解するもあれども其實如何なる卑怯の愚物にても惡人たるを得べきに反して、苟くも善人たらんと欲せば眞に男らしからざるべからず、又眞に自由の人たらざるべからす、畢竟惡人こそ事實に於ては奴隷たるべきものなれ、凡そ我行狀の進路は惡業の爲めに下るものにあらず、下るが故に惡業をなすに至るなり、若し德義の非常なる抗壓を蒙りて不正が正に變ずるとも尙且つ一身の幸福と

心の平和の爲めには致命傷たるを免れざるべし

罪と悲は不可分なりとの格言を證明する爲め、敢て神學者の所說を引用すまじ、寧ろ斯の如き點に付ては、此世界の最も完全なる人と稱せらるゝ「チエスタアフヒルド」卿の證言に待つ所あるべし、卿は其子に寄せたる一書に於て色々と貴き助言を爲したる後之を結びて曰く、斯の如きは即ち常に善に冠せしむる報酬なり、又斯の如き品性は即ち、若し汝にして大且つ善なる人たらんとせは之を摸すべき品性なり蓋し是れ幸福の人となるべき唯一の途なりと

デカアルト」(佛國の哲學者、千六百五十年に死す)は其の處世の方法を四箇の原則に籠めたり、一に曰く我が育て上げられし法律と宗敎に服從すべきと二に曰く總て爲すべき事の起りたる場合には我最良なる判斷に從て速に之を爲し、不平を起さずして其結果を俟つべきと、三に曰く常に己れが慾望を滿さんと企つるよりも寧ろ之を牽制して以て幸福を求むべきと、四に曰

く眞理の探究を以て生涯の事業となすべきと

「リリイ」(英國の星學者、千六百八十一年に死す)は曾て其著名なりし「ユーピュース」に於て助言を摘約して曰く、小羊と共に寢ね雲雀と共に起よ、愉快なるべし然れども度を過す勿れ、沈默せよ然れども餘り愁苦の狀を爲すべからず、勇氣なるべし、然れども餘り冒險する勿れ、衣服は端正に保つべし、食事は美を選ぶに及はす滋養あるを取れ、所謂る消閑の樂には正しきとを以て時を過こすべし、原因なくして濫りに人を疑ふ勿れ、證據なくして濫りに人を信する勿れ、容易く人の說に從ふ勿れ、頑固に自己の所思を主張する勿れ神に仕へよ、神を畏れよ、神を愛せよ、然るときは汝の心、之を望み、汝が友朋之を欲する通りに神は汝を惠むべしと

漫に自己の利益と想像する事物に熱狂して、遂に己れ自らと幷せて、他人迄を窮境に陷らしむるは單に考なき人、氣儘なる人、悍けき人のみに止らず、疑もなく其意思は善良なるも、多くの價値ある人と、多くの良好なる書に於て

も、亦同一の過に陷るを免れず、彼等は罪惡の生涯を愉樂の生涯の如くに說き示し、德性を克己と描がき、嚴格を宗敎と描がく、素より宗旨裁判所(羅馬敎に於て異敎者を吟味して罰に處する法廷、但し近代は既に其迹を絕つ)は極端の例なり、其判官は多く皆卓絕にして天性慈仁なる人なりと雖も唯耶蘇敎の眞意を全然誤解し居るのみ、吾等が日々相見る上流社會中にも「樂むと云ふとは全体惡しきとなり宗敎の眞意は酸辛幽鬱なるに在り、吾等を圍繞して光明赫々たる萬物は是れ神の惠みにあらずして一の弊惡なり、換言すれば「惡靈」の行へる誘導にして「善魂」の惜氣なく降り下す大喜悅にあらず」と思ふ人少なしとせず

クーパア(英國の詩人、千八百年に死す)は其數言の美辭を以て吾等に告げて「曰く

悲みの途、唯その途は、　人を悲なき境に導く、

生涯悲みなきに畢る能はずとは千古不變の格言なり、何れの所にか陰なき

の日光あらんや、此生限あり時到りて總て我が愛するものと別れざるべからざる其悲みは姑らく措くも、原來吾等、此世の生存は甚だ複雜を極め、世界も亦尚ほ未だ甚だ幼稚にして、吾等も亦未だ吾れ自らの生存と、吾れを圍繞する物と力との資質を、十分に了解する能ざるを以て自ら多くの苦みと悲みとを豫期せざるべからず、去りながら「クーパア」の如く、悲みの途、唯その途は天に導くと確保するは即ち現在に於ける幸福なる生涯は必ずや來世に於ける悲しき生涯を含有するものなりと謂ふに異ならず、斯の如き全然誤りたる意思は多くの心配深き人心に憂慮、困難、疑惑の念を生ぜしむると甚大なり、見よ快濶なる壯年の、唯己れ自らが幸福なる故よりして、己れを責めて自ら痛苦するもの少なからざるを、而して本體を云へば彼等の此幸福は宜しく天に向て其惠みを謝し、併せて不幸にも、同じ喜びと、日光とを受くべき源泉を失ひ悲痛、若くは不健康の境に呻吟する人の爲めに、其道筋を照らすべき無限の特權を付與せられたるとを感ずべき筈なり「クーパア」は清教

徒とは餐かに異れりと雖も其教旨「マッコレー」の所謂る、彼の熊に苦みを與ふる故に熊使ひを忌むにあらず、却て見物人に樂みを與ふるが故に之を忌む、と云ふ人々の精神に今少し上塗したるものにあらざるなき歟

世には己れが生存の不可思議に付、自ら苦み自ら實むる人多し、然れども「善人と賢者も時ありて世を憤り、時ありて世を慨く、獨り苟くも此世に於ける其勉めをなす人にして始終此世界を以て不滿足なるものなりと思惟する人は確かに之れあるなし」「此世界の疑問は唯、神は善良なりと感ずる其人に依りて了解せらる」

「セネカ」曰く凡そ之を行ふて吾等を幸福ならしめざる勉めあるなく、又之を治療するの途なき誘惑あるなし」と「ミルトン」曰く造化を咎むる勿れ造化は其爲すべきを爲せり、汝は唯、汝の爲すべきを爲せと

若し吾等にして十分之を樂む心あらざりしなれば、造化は蓋し總てのものを眼に美麗に、耳に微妙には造らざりしならん、「人が己れの行狀を正しく持

するにより、他人に與ふる平和と、自ら承くる喜びとは、殆んど計算し難き程なり」

予が種々の點より思惟するに違はず、若し果して今日が此世界の創造ありて以來、最も驚くべき、最も趣味深き、最も光輝ある時なりせば、右は全く吾等の好運と謂ふべきなり決して吾等自らの行爲に因りて此に至れりと謂ふべからず、即ち是れ誇るべきとにあらず、謝すべきとなり

吾等は此世に於ける無數の神惠を感謝して十分之を樂むべしと雖も一面に於て悲痛又は憂愁は決して無きものなりと期する能はず、「ワアボール」は此世を解釋して「考ゑる人には喜劇にして感する人には悲劇なり」と云へり、寔に此世は時折悲劇にして又屢々喜劇たりと雖も、要するに何れたりとも吾等の選ぶに任すなり「ソクラテス」曰く惡は生前にも、死後にも善人の上には起り來らざるべしと「希望の豫言」は「惡業の豫言」よりも確に多く當るを見る左れども、吾等は常に幸福には數年も氣付かずして打過ぎ、悲痛は瞬時

をも數ゑ立てする傾あるを如何にせん

吾等は始終成功すべきものなりと期するを得ず、時によりては造物も失敗するとあり、唯、汝の健康と好望とに對する空想に任せて高く標置する勿れ、然れども又如何なる逆境に在りても善根なしと失望する勿れ」

聖書中の著名なる一節は吾等に告げて曰く破滅の境に導く道や廣く、門や大なり、而して又之に向て入らんとするもの多し、命に導く道や狹く門や小にして之を見出し得るもの僅なりと

然れども予は思ふ、此語や屢々其適用を誤るとありと、蓋し其主意は敢て、正道は險惡にして苦み多しと謂ふにあらず、唯其狹小にして之を發見すると容易ならずと謂ふにあるのみ、疑ひもなく世には一條の正道なるものありて其周圍には處々に向ふ岐路あり、船の海上に於ける眞成の航路は唯、一あるのみ、羅針盤の指示する他の方針は總て其の「行かんとする天」より外かの處ゑ船を導くべし、されば迚、之に依りて正しき航路は他の航路より荒くし

て且つ浪高しと謂ふを得ざるなり

不正又は不良なる事にても暫しの間は甚だ愉快らしく、又時によりては甚だ麗はしく見ゆるとあり是れ素より否認する能はざる所、但し其皮相に迷ふは慎むべきことにして斯の如き場合には宜しく所謂る「誘惑」の有無を究むべきなり、之に就き予が今指示せんと欲するは、右の如き感情に任すことは即ち將來の悲痛を賭して目前の快樂を買ひつゝあるものなると、比較的僅少なる獲物の爲めに、多くのものを投ちつゝあるものなると、曾て「エンゲルス」がなせし如く汁一杯の爲めに我が相續權を賣りつゝあるものなると、未來永遠の悔悟を以て瞬間の狂快を買ひつゝあるものなると是なり、之を要するに予は單に現世のみに就て說くものなるが故に、吾等にして幸福ならんと欲せば善人たるとに勉めざるべからずと云ふも敢て過言にあらざるべし、蓋し最大なる幸福は放縱よりも克己に依りて得らるべきなり

繁榮と幸福とは必ず常に全行する者にあらず、己れを幸福たらしむるに足

るべく見ゆる事物を有しながら、尙且窮境に在る人尠からず「運命は多くを與ふ、然れども其多くを更に十分ならしむるは我心ならざるべからず」「心の吾れに於ける、一王國に異ならず、吾れは此に於て我現在の樂地を發見す」

「ヴヲヴェナルガス」(千七百年代、巴里に住みし大家)曰く誰れとても皆富貴と名譽を占取するの力を有するにあらず、然れども誰れにても皆善人たり、仁者たり、賢人たるを得べしと凡そ眞成の富なるものは今我所有する物の如何に由らず、唯我身の世に立つと如何に屬す、而して又吾等が享くる利益なるものは之に對する責任を含有するを常とす、「セント、クリソストム」(孔士坦の僧正、紀元四百七年に死す)曰く現生は唯一場の劇の如し、人類の爲す働きは所謂る其「世界」にして富といひ、貧といひ、治者といひ、被治者といふも畢竟皆此劇場に出演する俳優のみ、然れども此日や終らん乎、劇も亦閉鎖し、假面も亦外づし去らるるなり、此に於て各自技藝の優劣を檢定せらる尤も其檢定たるや各人の富にあらず、職務にあらず、威嚴にあらず、權勢にあらず、唯

其技藝の上に在るなりと、吾等の技藝も能く其試驗に耐ゑんとこそ望ましけれ

且つ問はん其檢定法は如何、蓋しドレ程吾等が爲たりしやを驗するにあらず、ドレ程試みたりしやを驗するなり、此世に於て所謂る成功と稱すべきものたりしかを問ふにあらず、唯成功と言はるべきに價せしや如何を問ふなり

要する所、悍惡放縱ならずして賢良有德なる生涯は眞に幸福なる生涯にして非惡は實際自暴自棄なり

「ソロモン」曰く我子よ、我法則を忘却するなく汝の心をして我訓戒を保たしめよ、長き日、永き生涯と平和は必ず汝の上に加ふる所あるべしと

第二章　心術

此世に於ける成功の爲めには心術は才能よりも必要なれども天賦なき人は容易に之を得難し、唯多少は、人が何を望み居るかといふことを考ふるに依りて會得し能ふべし

人に樂みを與ふるの機を失ふ勿れ、誰れにても丁寧なるべし「モンテイグ」夫人(英の「キングストン」公の長女「ウォトレイ、モンテイグ」の妻、千七百六十二年に死す)曰く禮讓は、爲めに費す所なくして如何なる物をも購ひ得べしと、寔に禮讓は金錢の求むることを得ざる多くの物を購ふ、誰にても我逢ふ人の心を得ることに勉めよ「バルレイ」大政治家曾て「エリサベス」女皇に告げて曰く彼等の心を得玉へ、然るときは陛下は庶民の心と財寶とを有し玉へるものなりと

心術は屢、强力の失敗する所に成功するとあり「リリイ」日と風との昔話を引て曰く風と日との爭に何れか勝つべきやといふは面白きことなり、一紳士の屋外に歩するあり風以謂らく其外套を吹き飛さんと、即ち非常に吹き荒さみ以て之を脱せしめんとす、然るに風の加はれば加はる程、紳士は離さじも

のと、益其外套を締めて身体に引付たるが故、外套は却て紳士の身に固着するとなれり、此に於て日は徐ろに其温かなる光輝を放ちて紳士の身体を温ため始めたれば、紳士は忽ち此の好天氣の爲め汗ばみ來り啻に其外套のみならず上衣迄もぬぎ去れり、風之を見て遂に勝を日に讓れりと

人は驅逐するよりも誘導する方の容易なるとを忘るゝ勿れ、又何れの場合にても、強ゆるよりも導くの優れるを記憶せよ、「セクスピヤ」曰く汝が欲する所は劍を以て之に臨まんより寧ろ微笑を以て之に迫るべしと

政略上に於ては、干渉せざるが最良の原則なり、

共に交る人の心を得、信用を博するとに勉むべし其材能よりも寧ろ多く其品性によりて勢力を得る人多し、「シドニヤ、スミス」常に、彼の何等高等なる官職をも帶ぶるとなきに衆議院に於て著るしき一身上の勢力を實行せし「フランシス、ボーナア」(蘇人、千八百十七年に死す)を言ふて曰く彼は其面上に十戒を印せりと

正義を踏んで適當に爲し得べき限りは勉めて人の望みに應すべし、然れども又決して「否」といふを恐るゝ勿れ、

誰にても「然」りと云ふとは容易なれども愉快らしく「然り」と云ふは困難なるとなり、夫れよりも尙ほ「否」と云ふは更に困難なり、「否」と云ふ能はざりし爲め零落に陷ゐる人、其例世に尠からず、「プルータアチ」(紀元四十六年頃に生る、雅典の文學者)告げて曰く小亞細亞の住民は唯「否」といふ一語を發し得ざりし爲め、遂に屬隷となり終れりと、若し果して處世の途に於て「否」と云ふとが必要なれば、愉快らしく之を言ふ樣になると更に必要なるべし、凡そ我取引する人は常に吾れと取引するとを樂しく思ひ、復た來るとを望む樣感せしむるとに勉むべし、事業は多くの人が思ひ居るよりも一層感情的にして誰しも深切に且つ禮讓を以て取扱はるゝとを好まぬものなければ淡泊にして愛嬌ある取りなしは賣買を定むる上に於て屢五分の割引よりも更に効多きを見る、

殆んと何人にても心次第にて愛嬌を作るとを得べし、愛嬌ある樣にと思ふ其心こそ即ち少くとも愛嬌を作る術の一半なれ、之に反して誰にもあれ心中より人を喜ばしめんとを欲せずして人を喜ばしめ得るものなし、人若し壯年なる間に此の大なる賜物を手に入れざれば、後になる程之を得ると益困難となるべし、世には其生涯に於ける外面の成功を或る堅實なる技能よりも、寧ろ其擧止の優雅なる上に歸する人樂しとせず、又其反對に善心眞意を有する人にして唯其擧止の野樸なるが故に敵を作るもの多し、人を喜ばしむるといふは既に夫れ自ら大なる樂みなれば須らく常に之を試むべし、屹度之が爲め失望するとなかるべし

油斷すべからず又心を冷かにすべし、冷かなる頭は温かなる心ほどに必要なり、イッにても談判の場合には不屈と冷淡は計るべからざる價値あり、加之ならず此二者は危險と困難の時に當りて屢、人を安全の境に導くべし

己れよりも恐なる人に接する場合に在りても之を見下すと宜しからず、天

賦の才能は猶ほ大身代の如く別に誇るべきにあらず、唯双方とも能く之を用ゐて始めて其信用の生じ來るものぞかし、殊に人は多く見掛けよりも更に賢しきものなり

書を讀むと、人を讀むよりも更に易し、人の性狀を窺ふに就て眼は最も大なる案内者なり、若し眼が一語を顯はし、舌が他の語を言ふときに當りては、經驗ある人は常に眼の語に信頼す、己れに向て非常の好意を表するものに對して餘り多く信を置く勿れ、凡そ男と男と、女と女とは初見に於て相戀想するものにあらず、若し比較的、心安からざる人が餘り多く吾れを保護し、吾れに約束するとあるとも其言ふ所に眞實の信を置く勿れ、縱し其人は不深切者ならざるも、恐らく其意中よりも多くを語り居るか、又恐らく吾れより何事かを要めんとするものなるべし、左れば人が唯、吾れに對して朋友なりと云ふ故を以て誰にても朋友なりと思ふ勿れ、されども亦一方に於て輕々しく誰にても敵なりと假定する勿れ

人は皆、自ら理を解し、才を有する動物なりとて誇る所あれども、常に道理の爲めに導かれ居ると假想するは大なる誤なり、人は一種奇態なる不定の動物にして大抵は常に偏見又は情熱の動かす所となる、其結果たるや汝の共に提携する人は、恐らく其道理を說破したるが爲めにあらずして、其感情を籠絡したるが爲めなると多きに居るべし、而して此狀は個人の上に於てよりも却て更に人間社會の上に多く適用せらる

議論は常に若干の危險あり、屢人を冷淡と誤解の境に導く、若し議論に勝ちて友を失はんか、是れ恐らく損なる交易なるべし、若し議論する必要に際せば、出來得る限り先方の言を容れ、然る上未だ斯く〳〵の點を脫し居れりと言明する樣に勉むべし、縱令ひ己れの方の議論惡しき場合と雖も自ら之を知るもの甚だ稀れなり、偶ま之を知るものあるも自ら惡しかりしと言ふもの稀れなり、攻撃せられたるとを知る場合と雖も、必しも說破せられたりと思ひ居るものにあらず、要するに議論に依つて人を說破せんと試むる必要

は甚だ少なしと言ふも不可あるなし、唯出來得るだけ明瞭に我所思を說明せよ、若し之によりて先方の所信を枉げしむるとを得ば寔に望外の儲けにて勝利の第一着歩なり

對話は一の術なりと雖も强ち多く話す人が上手と謂ふべきにあらず、好聽衆となるは、好話者となる程に困難なりとも言はざれども、實際好聽衆となるも容易ならざるとにて其要用なる點に至りては双方殆んど相選ぶ所なし、先づ第一、何事にもあれ先方の言ふとを批評者若くは判斷者として聽くとなく我判斷力は之を中止して勉めて話者の感情に投ずる樣試むべし若し吾れ深切にして且つ同情に深ければ助言を求むるもの常に多く吾れも亦多くの人に對して其心配、困難の時に當り助力と慰諭を與へたりとの感情の滿足を有するに至るべし

未だ年若き時には人より深く注意せらるゝとを期するなく唯默座、傾聽、注視せよ、餘に所謂る岡目八目の譬に漏れず、己れが人より注目せられさる時

こそ己れ自らに取りては却て人よりも其進行しつゝある事物を一層能く注意するとを得る時なれ

人は誰しも大抵考ふるが面倒なる故、此方の價値通りに此方を認了すると少なからず「ラブルウエレ」曰く此世界に於ては、人は我心の望み通りに己れが品性を作ると

自ら敵を作る勿れ、凡そ作るものゝ中、之より惡しきものあらじ、諺に曰く馬鹿を馬鹿として之に答ふる勿れ、然るときは汝も亦馬鹿として答へられんと、柔和なる返答は能く怒を轉せしめ得るとを記臆せよ、尤も怒氣を帶びたる答にても尚且つ嘲弄するほどは愚ならず、十人中の九人迄は嘲弄せらるゝ時は笑はるゝよりも更に不快を感じ、己れを侵害せられたりと思ひ、忽ち殆んど何事をも打ち忘れ劇怒するに至るべし

「欺かれざるよりも寧ろ欺かるゝ方、樂しかるべし」雅典人なる「ツラシロース」曾て發狂し「ピリヤス」海上の船舶を皆、己れに屬するものなりと思ひ居りし

に「クリト」の爲めに病を治せられて後、賊難に罹れりとて深く悔みたりと云ふ話あり「チエスタアフヒールド」卿曰く一場の戲謔の爲めに友を失ふと素より愚なり然れども予は思ふ、餘り御世辭に過ぎて不偏中立の人を敵たらしむるとの愚は其程度に於て前者に劣るなしと

餘り速に僅かの事を疑ふ勿れ、又自ら人に笑はれ居ると思ふ勿れ、若し果して笑はれ居るなれば、之に上越す樣に勉むべし、即ち眞心より其仲間に加はるとを得ば忽ち局面を轉じ之が爲め失ふよりも寧ろ得る所あるに至らん

凡そ誰にても人は他人に迷惑をかけず自ら樂んで笑ふものを愛す、是れ其筈のとにて笑は好心胸と好感情を顯すものなればなり、汝且つ自ら笑へ然るときは人は決して汝を笑はざるべし

自說に就ては勇なるべし、素より時折は笑はるゝとを覺悟せざるべからず

と雖も笑はれたればとて別に害になるにあらず、總じて人のありの儘を見るは何も可笑きとなけれども之に反して有らぬとを、ありとする其樣を見

るは殊に可笑きものぞかし、人は全く想像上の苦勞の爲めに自ら暴毀し、或は憤怒し又は他人と冷淡になると少からず

淡泊なるべしと雖も又實に深沈ならさるべからず、我身の事、我身の爲め、又は我身に反する事に付、多く話すとなく却て先方をして思ふ通り多く其身のことを話さしめよ、先方のシカするは即ちシカするを好むが故なれば之に傾聽する吾れを以て此上なきものと思ふべし、如何なる時、所にもあれ、職務ならざる限りは、我恐なり頑なりと思惟する人を指示する勿れ、之を指示するときは其人の爲めに苦情を言はるゝも致方なし、我判斷は間違なき能はず、彼も亦全樣の判斷を以て吾れに對して全じ說を爲すに至るべし

「バアク」曾て云へり、彼は或る國民に對して論告書を起草する能はず、又或る階級や或る職業を攻擊するとは甚だ不得策にして且つ甚だ不正當なりと、概して個人は屢容赦し又忘却すと雖も社會は否らず尙又、個人と雖も損害の方は侮辱よりも速に之を容赦すべし、蓋し人の爲めに不道理ものと見らるゝ程、不愉快極まるものあらじ苟くも人の心を不快ならしめ置き、又人を嘲笑を受けしむる場合に置きながら或る目的を達せんとするも到底、得らるべきにあらず

「ギヨテ」曾て其「エツケルマン」との對話に於て我英國人を稱して曰く彼等の社會に伍し而して之に耐ゆるや常に自信と靜肅とを以てし到る處、自ら主人公となり世界を擧げて己れに屬するものと思ふが如くなりと、「エツケルマン」之に答て、確かに若き英國人は若き日耳曼人よりも勝れて怜悧ならず勝れて敎育せられ居らず、又勝れたる心を有し居らずと云ひしに「ギヨテ」の云ふには、否とよ夫れは我言ふ意にあらず、彼等の勝れたる所は斯の如き點に屬せず、又其生れと資產に屬せず、唯彼等の勝れたる所は、明かに造化が斯くあるべしと彼等を作りたる其樣にならんとの勇氣を有する上に在り、彼等には半分と云ふとなく皆完全なる人なり、素より完全なる愚物もあるとは予も十分知了する所なれども夫さえも尙ほ何かにして又夫れ相應の重

さを有すと

事業或は談判をなすに就ては常に耐忍すべし、多くの人は其依頼を聽くよりも寧ろ其話を傾聽するを喜び、又多くの反對者は其中には倦み去るべし」

特に慎むべきは怒を發せざる樣にすると是なり、若し怒を發するとあるも少くとも我舌を控を勉めて之を顯す勿れ

決して求められざる所に入る勿れ、外に多くの室あるべし、「ゼームス」王曾て蛔に語りて曰く朕は三王國を有するにあらずや、然るも汝は尙ほ朕が目前に飛ざるべからざるかと

人によりては悲しき記憶を喚び起し又は異說を惹起すべき問題を何心なく言ふとあり慎むべきなり

凡そ學術の流派中に於て「人」の學問より要用なるものあらじ、啻に誰を信じ誰を信ずべからざるかを知るのみならず併せてドレ程に迄、又ドノ事迄、之を信じて然るべきかを知て、賢斷を下し得る樣になると最も必要なり、是れ

中々容易なるとにあらず、又其共に働くべき人と、我下に働くべき人とを選定すると甚だ重要なり、要するに角なる穴に角なる人を嵌め、丸き穴に丸き人を嵌むべきなり

「若し人を疑ふなれば之を用ゆる勿れ、既に之を用ゆる上は疑ふ勿れ」

己れが信じたる人は常に信ぜざる人よりも正直なるものぞかし

信認は完全ならざるべからずと雖も盲目なるべからず「マルリン」は賢なりしと雖も「ヴヰヴヒエン」が「何事にても一切信用するか、將た一切信用せぬか」と云ふ訊に對し濫りに歩を任げたる爲め遂に其命を失へり「デニッシン」の詩にあり)

常に注意周到なるべし、又自ら己れの心と商量せよ、若し自ら之を心に保つと能はざるなれば人の己れに對して之を保つべきとを期する勿れ「賢者の口は其心に在り、愚人の心は其口に在り、何となれば其の思ひ且つ知る事は直に之を口外するが故なり」

汝が頭腦を用ゐよ、汝が道理に諮詢せよ、是とても尙ほ過なきを期し難しと雖もシカする時は過に陷ること少かるべし

談話は銀の如くなるを得べしと雖も沈默は金の如きなり

別段、言ふべき事なけれども唯、談話を好む故に話す人多し、話は舌端の働よりも寧ろ腦の働ならざるべからず多辯、即ち話したき爲め計りの話し好きは殆んど事の成功に對しては致命傷たり、「話の熱する時は初め思ふたる事と全く違ひたる事や、又は後にて言はざれば宜しかりしにと思ふ事や、又は唯、舌を動かすのみにて、何の目的もなき無稽なる事を饒舌り出すに至るべし、……而して此の如き放談欺辯は之に依りて無數の弊惡と、此生に於ける苦痛を喚起すると多し、先づ其目的となりし人を怒らしめ、他人の間に爭論の種子を蒔き、又其儘に打棄置けば自ら消滅し去るべき小事故を煽動すべし、」

「ラブルウェル」曰く話して然るべき時と默して然るべき時とを判斷する力

なきほど不愨なるはなしと

「プルータアチ」曾て「デマラタス」の事に付話して曰く或る集會の席に於て彼の沈默する所以は恐呆なる故か、將た言語を知らざる故なるかと問はれし時、彼は「恐呆は其舌を控ゆる能はじ」と答へたりと、「ソロモン」曰く彼の多辯なる人を見し乎、恐らく是れ愚人たらざるなきを得んやと

已れが勝れたるとを顯はさゝる樣に勉むべし、人に自ら小なりと感ぜしむるほど其氣を惡くせしむるものあらじ

餘り我所說を確執する勿れ、屹度相違なしと思ふとも惡しきとあるべし、記臆は奇態なる手品をなすものにて耳も目も時折、欺かるゝとあり我偏見は縱令ひ勢よしと雖も確かなる基礎を有せざるとあり、又我の正しき場合なれば縱令ひ之に過度の確信を置かざるとも別に失ふ所なかるべし

尙ほ行爲に於ても餘り確かにする勿れ、且つ機會を等閑に付し去る勿れ、「盃子と唇の間に尙ほ多くの小徑あり」言ふは事常に間際に至りて違ひ易しと

の意なり）

何事にもあれ待つことを知る人に到來すれば機會の來るを見て之を占領すべしと云ふ諺あり「セクスピヤ」曰く出來る時にせぬ人は、せんとする時に出來ぬものなりと

若し一たび機會をして去らしめんか、再び之を捕ふると難し「ベイコン」の詩に曰く人事には潮時あり、其滿潮の時に於てせば幸福の境に導かる、若し之を外づさん乎、汝が生涯の航海は淺瀨に向ひ且つ困難の境に向ふ、吾等は今斯る漫々たる海上に浮むものなり、若し好潮の來る時、之に乘するにあらずんば忽ち我企圖を失ふべしと

用心は必要なれども餘り過度の用心は宜しからず、總して餘り過を爲すとを恐るゝ勿れ、絶えて過をせぬ人は何事をも爲し得ざるべし」

常に服裝を端正にすべし、夫れ既に服裝を要す、之を善くすべきと無論なり尤も餘り善くし過ぎるも亦宜しからず、其爲め時と金とを非常に多く費や

すは不可なれども常に好材料を選ぶことに注意すべし、人が如何に先づ其服裝を見て判斷を下すかは驚くべきほどなり、吾れも第一、重もに外見に依りて人を見、人も亦重もに外見に依りて吾れを見る、耳目の觸るゝに從ひ吾れを見るもの百千ありと雖も吾れを知るものは其中の一二に過ぎざるべし

尙又若し自ら我身に付不注意にして且つ率束する所なからんか、幷せて他のものに付ても不注意なるべしと思はるゝは當然（全然とは言はず）の結果なるべし

若し社會に出る時には最も善く又最も愛嬌なる擧動を爲す人を學ぶべし少し誇大の嫌はあれども眞理に背かざる一古諺に曰く擧動は人を作る而して愛嬌ある容姿は長へに推薦狀の用を爲すと、洵に好動作は何人にも缺くべからずして、何よりも大切なり「チエスタアフヒールド」卿曰く才能智識は以て人心を得るに足らず、唯之を得たるとき保持するのみ、我名乘り矩合、我顏色幷に擧止を以て人の目を惹き、我演述の優美と好調を以て

人の耳を靜めよ、然るときは確かに(寧ろ恐らく)人の心も之に從はんと、人は誰にても耳目を有すと雖も其有効なる判斷力あるもの稀れなり、此世界は猶ほ劇場の如く、吾等は皆俳優同然にして演劇の當ると當らざるは技藝の如何に因ると何れも知る所なり

「チエスタアフロールド」卿又其子のとに付言て曰く彼等は予に告ぐるに、何處にても知らるゝ所にては愛せらるゝと、是れ予の甚だ喜ぶ所なりと雖も予は尚ほ其知らるゝ前に人に好まれ、知られたる後にて愛せられんとを望む云々と

端正なる容貌の人に於けるは、猶ほ美術文學心の人に於けるが如く其益する所甚だ大なり、甲の優然として爲し得るとにして乙の其歩をも躊む能はざるものあり畢竟、甲の快潤らしく之を爲すに反して、乙の人に嫌はれる樣に之を爲すが故のみ「ホーレス」(羅馬の詩人)語りて曰く雄辯も美術も端正を缺けば力なしと

第三章　金錢上の事

英國に於ては恐らく經濟といふとを十分重んぜざるに似たり、我英國人は劇しく働きて好き收入を得ると雖も節儉の點に至りては吾れに優さる他國人多し、「クエイカア」宗の賢しき一老人云へるあり、我子よ汝の富みを作ると否とは汝の儲けの多少に因らずして汝の費す多少に因りて定まるなり と、節儉と云ふ語は即ち「富むべし」と云ふ語より來り、自ら其意義を明かにし居れり、何物にても之を買ふ前に先づ無くてはならぬか否やを吟味するとは然るべし

富人となるか、ならぬの問題は姑らく措き、將來の必要に備ふる爲め貯蓄するとは當然にして正しき業なり「貧乏神が戸内に入來れば愛神は窓外に遁れ去る」とは卑劣なる諺なれども、今眼前に妻子が衣食に窮し、醫療を缺き、休息や轉地する能はざる狀を見、顧みて若し己れにして相當に働きしならん

には、又若し己れにして不必要なる嗜慾を禁じたりしならんには、彼等に斯るゝ苦痛や心配は懸けざらまじきものをと思ひ至る、其悲み果して如何許りなるべき歟、單に金錢上の爲めのみより經濟を宗とするは疑ひもなく卑劣の至なれども獨立の爲めの節儉は寧ろ正當にして男らしき所爲たり常に勘定を作り置き而して之を作るにも亦意を用ゐ置くべし、尤も予は敢て何から何迄、明細に記帳する價値ありと云ふものにあらず唯、如何に金錢が出てゆき、何の品が如何程につくかを明にするに足る樣、勘定を爲し置くことを必要なりといふなり、凡そ入るを計りて出つるを制するときは決して奢侈の域に達するものにあらず、濫費家は先づ我所業に對して我眼を閉づるより始まる、誰にもあれ、眼を明けて居ながら己れが零落の斷岸に立つとは出來ざるものぞかし

然れば何事を爲すにもせよ我收入以内にて生計を立、少々にても毎年貯蓄することにすべし、何よりも蚊よりも負債は禁すべし、「リッケンス」(假令ひ「シ

コーペア」氏の言に托したりといへ、其爲め其言の價値を減すべきにあらず)曰く若し二十磅の人にして毎年の費額十九磅或は十九磅六片ならしめば其結果や幸福なり、之に反して毎年の收入二十磅、費額二十磅或は二十磅六片なるときは其結果や不幸なりと、而して此兩者の差は僅に一志のみ

負債は奴隷なりと云ふと過言にあらず「借るは悲む」なり此世には隨分耐え難きと多し然れども彼の米國の大經驗家たる「ホーレイス、グリーリィ」奇みちくも言はれたるとあり曰く饑、寒、濫、疑、苦役、輕蔑、不當の非難、是れ皆耐え難き事なれども負債は是等を一括したるよりも更に不可なり、故に決して負債に陷る勿れ、若し汝唯五十仙を有し毎週夫より上得ると能はざれば人に一片を借らんより寧ろ玉蜀黍小半斤を求め來りて之を燒て生活すべし

と

「コブデン」曰く此世は常に二階級に分る、貯へたる人と費したる人、即ち節儉家と濫費家是なり、見よ總て家、製造所、橋、船、其他人類に文明と幸福とを與へ

し大事業の仕上げは何れも皆、貯蓄家即ち節儉家の爲す所にして、己れが財産を濫費したる者共は常に皆彼等の奴隷たり、斯くあるべきは誠に天の法則なり、左れば若し今予が或る人に對して、汝等謹愼せず、熟慮せず而して怠惰なるときは自ら身の上を上げ得べしと約束することあらん乎、予は正さに僞言者たるを免れざるべしと

「デルウタアチ」曰く「エフエサス」に於ける「アーテミス」の殿堂は負債者が遁れて此に隱くるゝ時は債權者に對して屈强なる隱れ場所となる由なれども夫れよりも「節約」といふ隱れ場所は、何れの所にても眞面目なる人に公開せられ容易く之に樂しき、名譽ある、廣き場所を與ふべしと、商賣上の必要より來るものは素より此限りにあらずと雖ども其他に於ては決して金錢の貸借を爲す勿れ、凡そ負債者はいつも自ら害せられたりと思ひ居る故、貸したれば金も再び手に入り難く又、禮も言はれざるものなり寧ろ出來るだけの

とは心大きく之を寄與し決して其返濟を望む勿れ

初め金錢の入り來ると遲々たるも決して之れに落膽する勿れ、是れ即ち轉折するとなき長き道路なり、若し又初めより金錢の容易に入り來る場合ありとも皆之を費さず、好き道も惡しき道全樣に轉折のあるものと心得、其幾分を雨降る日の爲めに積み置くべし、其中には必ずや我財囊に向て數々の要求を引起し來るものぞかし、商賣上に於ても初め餘り好運なりし人は零落に陷るもの多し

富を得る爲めには急ぐ勿れ、「ラスキン」(英國近世の大畫家)曰く若し價格をして圖畫を制せしめざれば其中には圖畫、價格を制するに至るべしと

金錢の事に付心配する勿れ、大身代を造るとは素より誰にても期し難きとなれども苟くも勤儉を以てするときは誰も生活には差支なきものなり、富は正直にては來るものにあらずとは屢耳にする話なれども、事實は貧も亦正直なれば來ると稀れなり、蓋し貧者といふは持つ物の少なき人を謂ふにあらず、要むる物の多き人を謂ふなり

「サア、ゼームス、ベゼット」曾て其面白き演說の一に於て、自ら取調べたる其門弟の行末に關する統計を示せり、之に依れば千人中の二百人は或は業を罷め、或は仕合を得、又は早く逝き、殘八百人の中、六百人は相當に成功し、中には頗る見るべきものもあり、全數中僅に五十六人だけ失敗せりと雖も、其の中の十五人は原と試驗に及第せざりしもの、十人は又不品行若くは放蕩の爲め墮落したるものにして、眞に已れの力の及ばざる原因よりして失敗せしものは千人中僅に廿五人に過ぎずと云ふ、此世に於ける各般の職業は、苟くも雜種類の如くに自ら効能ある樣にさへなし置けば必ず用ゐらるゝものなり、宜しく安心して可なり

實際に於ては何人たりとも、生活上の眞の必要に就て多くの苦心を要するものならず、造物は要むると少くして與ふると多し、之に反して驕奢は甚だ費多し、「フランクリン」曾て曰く一人の惡行を爲すの費は以て兩兒を育成するに足ると

「ウエリントン」侯の賢しこくも云はれし「高き利は即ち惡しき抵當の謂なり」との言を記憶せよ

一つの籠に餘り多くの卵子を容るゝ勿れ、如何に申付け置くも、又如何に能く注意するとも必ず何か總ての目論見を轉覆するが如きこと出來すべし

最も賢き商人や銀行家にても過つことあり、鋭敏なる商人の期する所は唯概して間違はざると云ふに在り、吾等の若き時には二と二との四となることを習へり、然れども二と二とは又二十二ともなるなり、數學上の說明としては二に二を加ふれば四となると明白なる眞理なりと雖も、處世の上に於ては夫れも全く當てにならす科業の適用を過りたる爲め有望なる前途を破壞し終れるもの多し

事物を靜に取扱ふべし、「ブルーハム」卿と云ふは撮影する間も靜かに坐し居ると能はさりし人にして夫故イツも其寫眞には汚點を印せりとの話あり」

一室內に靜坐すると能はさりし故に零落せし商人少からず、是れ「パセヲッ

ト」(英國經濟學者、千八百七十七年に死す)の常に口にせし語なり

誰にても自ら望むと否とに係らず或る意味に於ては一種の事務家なり、即ち誰にても爲すべき勉あり、家は整へざるべからず、失費は理めさるべからず小事と雖も亦時としては大事ほど六つかしく且つ面倒なる場合あるなり」業務上に於ける成功は幸にも天才よりも常識と注意に因る場合多し、古るき隱れなき諺に曰く汝の店を保て、然るときは汝の店は汝を保つべしと

「ゼノフオン」(希臘の史家、紀元前三百五十四年に死す)も亦仝じ樣なるとを告げて曰く比耳斯亞王、曾て出來るだけ速に其名馬を肥さんと欲し、最も之に經驗ある人に向ひ、何が一番早く馬を肥やすならんと尋ねしに、其主人の眼なり」と答へしとなん

事務的の習慣を養成すると甚だ必要なり予が一畏友、先般予に話すに、熟ら其知れる人の中にて才智も優れ、性質も善良なるに係らず、此世に於て不成功なりし多くの實例を考察するに失敗の大原因は、常に事を爲すに敏速な

らず、約束を守らず、人と事を共にするを得ず、少事に執拗なるの致す所、即ち約言すれば事務的ならざる故に在りとのとを以てしぬ

小事に於ても大事に於けるが如く順序と方法、最も重要なり、正しき場所に正しき事行はるとは眞に金言なり、何物にても使用したる後、之を理め置くは少しの面倒にて濟むとなれども再び之れを要するときには大に手數の省けるものなり

「ゼノフヲン」曰く不順序とは猶ほ宛も農民が其大麥も小麥も豆も別々に之を積み置かずして皆打ち混ぜて一藏に納れ置き、他日大麥の麭、小麥の麭、又は豆の汁を要するに當り一粒宛選り分けるが如き有樣に似たるなりと

仝氏は其例として船に於ける場合を引用して曰く風波一たび海上に起れば又必要なるものを搜がし、或は使用方に困難なるものを彼是する時間なし、神は原來怠惰なるものを脅かし且つ罰するなり、左れば若し平生何の惡事をも爲さゞる僥倖を容るして破壞するとなくんば吾等は大に之に滿足

せざるべからず、尙又平生注意して諸事を整頓する資靈を助けらるゝなれば更に大滿足を表せざるべからずと、寔に何物にても其適當なる所に保ち置くと肝要なり

素より誰れも彼れもと云ふにあらざれども哲學者は上「アリストートル」より下「カアライル」に至る迄、多く貿易と商業に從事する者を輕侮せり、否な寧ろ貿易と商業そのものを卑劣にして下等なる業なりと賤みたり、「プラットヲ」は其「共和政治」に於て總て商人を公民の外に置けり、而して斯の如き下等なる業務は、望みに任せて總て外國人の手に委せて可なりとせり、原來貿易と商業とは多數の職業として最も要用なることなれば、果して其爲め之に從事するものゝ性質上に、開智發明の習熟に害ありて相容れざる感化を及すなれば是れ悲むべきの至なりと雖も幸にして然らず、概して實業に從事するものは唯其餘暇を他の研究に費やし得るのみに過きざれども試みに之を古今に例せんに、科學と文學のみに於ても先づ「ナスミス」は天文學者に

して製造家、「グロッテ」は銀行者にして歷史家、「サア、ゼイ、エヴアンス」は製紙者にして古學協會の會頭、幷に學士會院の會計、「デレスウヰッチ」は商業者なれども後には「ヲクッスフヲルド」の地質學講師、「ロッヂャース」は銀行者にして詩人、「プレイド」も亦銀行者にして詩人、我父の如きも銀行者にして數學家たり又多年の間、學士會院の會計幷に副長たりき、其他斯の如き例乏しからず

カアライル」は、最も安き市場に於て買入れ、又最も高き市場に於て賣捌く原則に對して熱心に反對を唱ゑ、其方法は說明せざれども吾等は須らく「我綿花の最低價格を定めさるべからず」と勸言せり、蓋し他の物品に就ても同樣にせんとする意なるべし、又「差當り吾等は更に綿花を引下ぐる爲め苦心せず」又吾等は他の國民よりも安賣するものにあらずと言ふべき筈なりと勸言せり、若し吾等にして「同胞よ吾等は安賣するとは止めにすべし、唯同價格にて賣るを以て足れりとす」と謂はんとするも是れ曾に實行し難きとなる

のみならず、又實に不理なり、若し吾等が綿製品を賣ると僅少ならんか、買ふ所の食料品も亦僅少ならざるべからず、「カアライル」の原則に從ふときは、衣服を要するも約束の代價を拂ひ得ぬ人類、生じ來るべし、縱し吾等は少しの代價にて品物を渡すことを得るにしても、「カアライル」の原則は之を實行せしめざる筈故、結局夫れだけ他の人よりは其衣服を奪ひ、我國人よりは其食料を奪ふと同一の結果に終るべし、凡そ商業の土臺は我廉直に產出し得るものを、我產出する能はざるものに代ゑて人に付與するに在り、即ち最も安き市場に於て購入し、又最も高き市場に於て賣却することは商業上必要なる原則にして之れに上越す方法あるなきなり、斯くありてこそ最も其產物を賣らんとを欲する人より之を買ひ、又最も其品物を必要とする人に之を賣るを得へければなり、其他の手段に至りては猶ほ「ニューカッスル」(石炭の產地)に石炭を持ちゆくが如き無用の所爲に近かるべし

最も大なる、最も幸福なる、最も善良なる人の中にも甚だ貧窮せしもの少なからず、「ワーヅウオース」と其妹は多年の間、一週間三十志にて生活せり、然れども是時は其生涯の中の最も幸福なる時の一たりしに相違なし

縱令ひ運好く富人たるを得さるも協力と愛情とを以てせば掌地陋屋と二三愛嬌ある好顏も猶ほ無限の大世界の如くなるべし

「マホメット」が云ひし如く、「豫言者は總て牧羊者より出づ」といふ迄にも至らされども如何に多くの偉人が貧窮なりしか、數ゑ來れば寔に驚くべきものあり

金錢が人に與へ得べきものを過大に認むるは一般の過なり

試みに食物に就て之を言はん乎

「若し富人にして健康ならんとを望めば貧者の如くに生活せさるべからず」

茶或は架非、麵と乾酪、其外一鷄卵或は鰯、又は少し計りの蜂蜜を除きて、外に如何なる朝餐を作り得べき歟、午食としては麵と乾酪と麥酒一盃の外、如何なる好料理あるべき歟、淡泊なる晩食にても調理をよくし之に加ふるに空

服を以てせば龍動市長の饗應よりも更に多くの樂みあるべし、滋養あり最良なる食品にても季節には比較的安く購ひ得べし、然れとも季節外となれば香氣自ら少くして價却て不廉なり、一個の鷄卵は通常、一塲の饗應ほど善きとあり時としては尙ほ之にも勝さるとあり

又書籍に就て之を言はん乎、若し眞に讀み得るだけの書籍を購ひ能はぬとならば、それは極貧の人ならざるべからず、聖書「セクスピヤ」「ミルトン」等の如き良書は今や僅かの代にて求め得らるゝなり

金錢は以て健康、天才、友朋、眞美、若くは幸なる家庭を求め得べき乎」

孔子曰く「チュ」侯巨万の富を有す而して人の之を愛するものなし、「ベイケ」伯夷か)餓て死す而して今に至る迄人皆之を傷むと

「ヤング」歌ふて曰く

富は幸福を與ふべき歟、環視せよ、彼の快濶らしき困難と彼の雄大らしき窮境を、われは其虛飾と外見を妬むまじ、われは其悲哀に鍍金したる狀を

妬むまじ

「ベイコン」曰く大身代の人は却て己れ自らには外人も仝樣なり其業務の複雜するに當りてや己れの健康、即ち其の心神と形體と双ながら顧る暇なしと、古き羅甸の諺に曰く小家屋にして大靜穩と

總て鏈鎖は黃金にて作りたりとも好ましからず、金錢は疑ひもなく大心配の源にして、貧窮と仝樣に世話の掛るものたり、左れば富人の多くは、實際金錢の主人公たらずして其奴隷たるなり、「ウヰルソン」僧正曰く富は、之を有すものゝ面倒となるのみならず實に苦みとなる塲合多しと

多くの人は疑ひもなく金錢の爲めに零落せり、所詮富人は金錢上のことに付、貧者よりも心配多し、賢者を除く外は、富は人に幸福を齎らし來るものにあらず、餘りに富まんと熱心なる人は常に貧者たるに同じ、「ラスキン」曰く陋屋に住みながら「ワーウキツク」城(英國にて最も壯麗なるもの)を驚かす方、「ワーウヰツク」城に住みて何も驚かすものなきよりも恐らく更に幸福多かる

べしと

富を樂まんと欲せば之に心を奪はるゝ勿れ(サアディ)(比耳斯亞の詩人「ゼイク、マスリイ、アリン」の假名千二百九十二年に死す)曰く足るを知るべし、足るを知らざれば遂に自ら苦むべしと、又其詩に曰く

われは駱駝に乘る身にあらず、左れども亦何の重荷も負はず、何の束縛も受けず、われは誰の爲めにも君たる身にあらず、左れども亦帝王の語をも恐るゝものならず、われは明日の事をも考へず、過去りたる悲みをも追念せず、斯くて爭鬪の外に呼吸し、わが靜穩なる生を送る

ベイコン曰く僅かのものを求めて多く恐るゝは斯心の爲めには憐むべき次第なりと、「セックスピヤ」曰く

汝富むと雖も猶ほ貧きに同じ、譬へば金塊を負ふたる驢馬の如し、重き富を負ふと雖も畢竟行旅のみ、死は唯、汝の重荷を卸すなり

左れば何故に來生の富を積まんとして辛苦其生命を失ふべきか、病んで苦

む時、此富は能く患者の心を慰め、快き氣分を購ひ得べき歟、死の至らんとする時、此富は能く一呼吸を延長し又斷末魔の苦みを靜め得べき歟、富は各爵の大誘導者なり、昔し學校にて敎えられたる格言に曰く金が溜まれば溜まるほど、小錢にてもホシクなると

又「ヨリヴァ、ウェンデル、ホルムス」(米國人、醫にして詩を善くす、千八百九十四年に死す)が可笑しくも歌ふたる如く、「われは黃金に就ても田畆に就ても餘り心配する所なし、そこゝの債券や、若干の好銀行株や若干の手形や、又は少し許りの鐵道株を與へよ、われは唯我費すよりも少し多く與られんことを我運命に所望するのみ」

セネカ曰く貧者は物を多く要すれども吝者は何物にても要せざるものなしと

若し二片と油とが入用ならざりしをば(負傷者を助けし時の費用を云ふ、事聖書に在り)更に多くの善き「サマリタン」人がありしならんとは冷評の口調

を以て觀察せらるゝ世態なり

「ベイコン」曰く身代を造らんと孜々休むとなき人は之れが爲め其時の多くを費し而して世には更に貴重なる注意すべきものあるを知らずと、畢竟富も生命に益する程度に在れば善けれども生命を以て富に益するに到りては言語全斷なり

吾等は常に人の金を造りつゝあると、金を造りたると、又は金を運轉することを聞けども未だ曾て金を樂むことを聞かず、實際金を造る人にして其身自らの爲めにするは稀れなり、「彼は富を積む、而して其利を享くるものゝ誰なるかを知る能はず」

「ゼノフヲン」の「パンクエット」中に「チャルマイヅ」が、貧は富に勝さることを主張し其理由として語りて曰く安心して居るは恐怖の体に在るに優さり、奴隷たらんより自由たると優さり、國の爲めに信ぜらるは、信ぜられぬに優さる、是等は既に公認せらるゝ所なり、まりながら予の曾て此市中に於ける一

富人たりしや、第一誰れか來りて我家屋を破りて闖入し我金錢を掠め、或は又我身に毀害を加ふることなきやを恐れたり……今や予は安心して眠るを得、寺領に勤務する爲め喚び出さるゝ必要もなく、政府の疑を受くる程の富をも有せず、此市中を去るも自由、樂んで之に留まるも亦自由なり、予が富みたりし時には人は「ソクラテス」や其他下級の哲學者の爲すに倣ふて予を非難せしも、今は予も我友朋を選ぶことを得べし、是も畢竟予の日々貧に赴くを以て最早誰も予に注目するものなきに至りし故なり、予が多く持ちたりし時には、イツも何か失ひつゝありし故に常に不幸を感ぜしも今や貧者となり、失ふべきものなければ失ふ心配なく、之に反して何かを得んとする希望を以て常に面白く且つ自ら慰めつゝあるなりと

右「チャアマイヅ」の語中には大なる眞理ありと雖も未だ之を全然たる眞理と爲すべからず、況んや「チャアマイヅ」の此語を發せし時は彼尚ほ樂聲劉曉たる間に在りて好晩餐に飽きつゝありし時なるに於てをや

若し上手に之を用ゆるなれば、金錢は以て多くのことを爲し得べし、黄金は勢力なり、戯謔に富みたる一佛蘭西人曰く金錢は帝王中の帝王なりと、實に金錢は吾等の欲する所を得べき手段を吾等に與ふるものなり、即ち若し吾等にして新鮮なる空氣や、善良なる家屋や、書籍や、音樂等を得まほしく思ふなれば金錢は以て之を購ひ得べく、若し又閑暇が身に取りての利となるならば金錢は吾等をして之を得せしむべく、若し世界を見るとが吾等の爲め樂しければ金錢は我行旅の費を支拂ふべく、若し吾等我友朋を扶助し、窮境に在るものを助けんとせば金錢は即ち此の如き大恩惠を吾等に與ふるの特權を有するものなり

「スヰフト」曰く左れば之を手に保て、之を心に保つ勿れと

守錢奴とは己れ自らの爲めに金錢を愛し、過度の經濟を行ひ、單に吝嗇の機械たる人なり、抑も此生に於て習得すべき一科業は、卑劣にして細まゝしき心配を避くるに在り、而して金錢を愛するは最も卑劣なる所業の一たり」

富を上手に使用するとは一大事件なり「ソロモン」曰く常に散すれども尚ほ「增すものあり、入用より更に多く有しながら遂に貧窮に陷るものあり」と

「デヴヲンセヤ」侯「エドワート、ロヲナイ」の著名なる碑銘に曰く我與へしものは我持つもの、我費やせしものは我持ちしもの、我殘せしものは吾れ之を失へりと

又全意味を反倒したる語あり曰く我貯へしものは吾れ之れを失へり、我費せしものは吾れ之を有せり、我與へしものは吾れ之を有すと

蕩費すべからず然れども心は裕かなるべし、諺に曰く富みながら何物をも有せざるあり、貧きながら大なる富を有するあり、貧者を憫むは神に貸すに同じく、神は其與へたるものを返し玉ふべし

耶蘇が富みたる若き人に與へたる助言(財産を擧けて慈善を爲すべしとの數)は恐らく之を離れに適用しても差支なかるべし、何となれば吾等は我子と共に貧者を記憶せざるべからざればなり、汝の收入は素より汝に屬すと

雖も汝が祖先より讓られたるものは獨り汝のみに屬すべきにあらず

金持は彼の聖書にある、其主より金を托せられたる奴僕の如きものにして自ら其勘定を遂ぐべき責あり、原と委托せられたるものなればなり、要するに金錢は敢て誇るべきものにあらず

「此世界に於ける富人に命せよ、驕ることなく又不確かなる富を信ぜず、吾等に樂むべき總てのものを與ふる生たる神を信ぜよ」、

「善をなし、善良なる働きに富み常に之れを散じ喜んで之れを人とともにせよ」

無窮の世に安んぜんが爲め、末に對する好基礎を已れの爲めに蓄ゑよ」

聖書に於て萬惡の根源と說くは金錢に非らず、金錢を愛するとなり、「縱令ひ富の、增し來るとも汝の心を其上に置く勿れ、彼の峯上に於ける說敎にも同じ道理を說かれたり

「汝自らの爲めに地上に財寶を蓄積する勿れ、蟲、銹、之を腐蝕し、盜賊も亦破りて之を盜まん」

「唯汝自らの爲めに天上に財寶を蓄積すべし、蟲も銹も之を腐蝕する憂なく又盜賊も破りて盜むとなし、何となれば汝の財寶の在る所には汝の心在ればなり」

第四章　保養

働くのみにて遊ぶとなからしむれば遂に兒童を愚物たらしむべしとは能く諺に言ふ所なり、若し又其業務が戶內に於てするものたれば併せて彼を、かよわき小供、怯弱の人たらしむべし、左れば遊戲は敢て時を無益に費やすものと謂ふべきにあらず、人の躰軀を發達せしむる爲め、特には其上部を發達せしむる爲め最も必要なり、通常吾等の業務は腕や胸を擴張せしむるよりも寧ろ收縮せしむるもの多ければなり

遊戲は啻に人を健康に保つのみならず、又其業務に對して精神を與ふ、先づ

第一如何にして人に勝つべきかを教ゑ、又少しの事は讓歩し、公平に遊び、利益を極端に追はしめざるとを教ゆ

遊戯は、又形躰上の健康同様、人に道德上の健康を與ふ、即ち書籍に於ても見る能はず、學びても得る能はざる勇敢、耐忍、自立、愛嬌の諸性行を與ふ「ウエリントン」侯が瓦土樓の戰は實に「イートン」の運動場に於て勝ちしなりとの語は大に味あり、小學校に於ける兒童等の最上最要の科業は其運動場に於て得るもの是なり、然れども遊戯は唯之を保養の爲めならしめ、決して之を畢生の業務となす勿れ

遊戯の健康上に必要なるとに就き茲に我動植物學の二大家の說を引用すべし「サア、ゼームス、バゼット」曰く遊戯は總て保養の爲めには屈强の具として愛すべきと無論なり併し夫れ計りならず、業務上、又は何に限らず日々の仕事上に價値ある道德的の大勢力を涵養する者なり、別に金錢に關する共通利害を引起すとなく又之が爲め何等の面倒を來すとなく兒童と成人と

を一所に働くに至らしめ、又常に公平に働き、且つ平生相善き者共を以て善き方の事に組合を爲さしむる例を教ゑ、又人と共に働く其力は此生涯に於ける何事に就けても最も良き成功力の中に數ゑらるゝとを教ゆるなり、尙又習慣上よりと謂ふべきか、又其性質上よりと謂ふべきか、遊戯は自ら公平と云ふ觀念を教ゆるなり、即ち如何に競爭の激烈なる場合と雖も、卑劣なる遊び方は皆一齊に之を卑み、而して又常に公平に遊ぶとに慣れたる人は物事に付自づと公平なる取扱を爲すに躊躇せざればなり、要するに其保養上に於ける正直なる高標準は、人をして事の、法則の範圍外に逸出するを蔑視せしむる上に、大なる助けを與ふるとあるべし、……サテ善良活潑なる保養方法中に含有する性質にして、此方法が世に行はるゝも即ち主として右の性質あるが爲めなるものを吟味するときは必ず左の三件中の一二を發見すべし、曰く定まらざると、奇驚なると、及び成規の業務に異りたる或種の巧妙を行ひ得る機會、是なり、而して此等三者の適用は別けて、多數の事業社

會の通常職業とは大反對なる樂しき變化を與ゑ、又日々の業務上には之を用ゆると少なきが故に自ら縮少し、其極遂に消滅し去らんとする力と其性に、働べき機會を與ふるとなるが如しと

學士會院の書記たる博士「ミッチェル、プホスタァ」近ごろ「リイド」の講演に於て述べて曰く筋力の働に於ても倦憊は尚且つ主として腦より來る、又腦の倦憊にして其原因の殆んど全く筋力と關係なきもの少なからざるは皆人の知る所たり、腦の働きも亦筋力の働き同樣、化學的の變化の之に伴ふとは既に吾等の智識、之を證せり而して其の化學的の變化は、微細なる點に於ては兎も角、大體に於ては筋力も腦も同順序たると亦既に之を證する所なり

○若し果して清鮮なる血液、即ち下等機關の有効なる協力に依りて清鮮になりたる血液の十分なる流通が、速に活動の原力を更新し、速に有害なる排出物を洗除する爲め筋力の生存に必要なりとせば其腦の生存に於ても亦必要なるとは同じく疑ひなき所進て言へば前者よりも更に疑ひなき所な

るべし、且つ「生存競爭」の然らしむる所、腦は何時にても吾れより以下の合同機關に先ち得べき樣其位置、前に在り、蓋し最も能く整理したる經濟法に於ても、複雜なる諸機械が各、其所を得たる時と、其倦憊が將に兆さんとする時の間に於ける健動の時期は概して甚だ短少なり、若し予が此言をして眞理に適するものならしめん乎、此時期を擴張する良策は、彼の下等の合同機關を鞭撻して以て倦憊の侵入を防止せしむるに足る樣、更に之が協力を有効ならしめ、斯くして更に腦を活動せしむるの外なからんと

狩獵と、射擊と、通常所謂る漁釣とは、「遊獵」なる語を專占せり、獵犬や銃砲や釣竿を運動と保養の具に供せざる人と雖も尚且つ之を喜ぶ傾あり、畢竟右は吾等の祖先より傳來する習慣なり

去りながら文明の進むに從ひ人自ら樂みの爲めに殺生するを避け、動物は殺してよりも生かし置きたる時の方、樂み多きことを會得し、他の適當なる方法を以て新鮮なる空氣と運動を得る樣にならんとせり

清水の人生に益するとに就ては色々と書きたるものあり、新鮮なる空氣の必要、亦敢て之に劣るなく、觀を來れば窓に驚くべき者あり、先づ第一我躰軀を貫通し、又吾れ自ら其の來るを覺ざる程柔かに我皮膚を撫蕩し、花や菓の芳臭を我室内に送り、我船を海上に舷らしめ、山や海の清風を我市中に輸送す、又音響の傳車となりて我愛する聲と、總て造化の巧妙なる音樂を吾等の耳朶に齎らし來る、又地に灑く雨の貯水塲となりて日中の暑つさと夜間の冷かさを調和し、青き綠門を以て我頭上を覆ひ、朝と晩の空に火を點ず、之を要するに其此上もなく柔かにして且つ清く、穩にして且つ要用なると、「大氣の神」こそ總て造化の神祕中にありて最も妙麗愛すべくして、人心を迷はすものなれと謂ふも別に驚くに足らざる程なり

「ゼフユリイス」曰く何は兎もあれ新鮮なる空氣ほど芳ばしきものあらじ、假令ば猶ほ「アフヲロダイト」(希臘の愛神)の腕の如くに覆ひつ抱きつ、投げかけたる一大花に似たり、尙又蒼空は釣鐘艸の吾等の上に垂れ來るが如く馥郁

たる香氣を以て隈なく大地を埋むるなり而して中にも最も芳ばしきは野花爛漫たる時の大氣なり、種々の花艸が思ひ〳〵の素振にて、取園む雜草の中より抽てゝ岸上に蔓延する其のさま實に面白く、何事もなき路筋も其の表示する多くの意思にて麗はしくなれるを覺ゆ、われは毎朝この星の如く輝く岸上に來りて留るを樂みとせり、年久しく經ぬる迄何故、われは常に同じ所を徘徊して變化を望まざりしかと云ふとに思ひ到らざりき、われは何とて變化を望むべき、唯同じ古るき愛すべきものや、同じ野花や、同じ樹木や桑皮や、班鳩や、黑鳥や、金翅鳥の歌ふを好む、而して此等の鳥の歌ふは日時計の上に落つる光線のあらん限りを其程度となすものぞかし、われは同じ所に於て彼等を欲するなり……即ち一段々々「夏」といふ大樓上に昇りゆく「春」といふ生きたる段梯子を欲するものなり、希くは、われをして年々歲々、同じ移り換りを觀るとを得せしめよと

我國の野は瑞西の如く花艸の種類に富まずと雖も時折には、「パッタア、カッ

ア」(貢名)の咲き出づるを見る、其外「銀色燦然たる「レディスモック」(草名)の麗はしく牧場を彩どる」あり、森林に至りては一段秀美にして一段、人を醉はしめ左ながら、夢路をたどる如き風光を備ふ、驚くにも餘りある程なり」

天氣わるしとは屢聞く語なれども、實際わるき天氣とては之れある筈なく其有樣こそ異なれ、イツも樂しきものなり、尤も或る天候は農夫や其收納の爲め、あしきこともありぬべしと雖も人にとりては、如何なる天氣も皆好き天氣なり、晴れたる時は殊に樂しく、雨れば生氣を回復し、風吹けば身を引締め雪ふれば面白し、彼の「ラスキン」が云へりし如く「まことは惡しき天氣と云ふものなし、唯好き天氣に種類のある計りのみ」

休息は必ずしも怠惰にあらず、折々夏の日に、木の下に草を敷て横はり、水の潺々たるを聽き、空に行きかふ雲を眺むるとは敢て無益に時を費やすものなりと謂ふべきにあらず、且夫れ空氣と運動とは常に相伴ふものなれば双方の利益は宜しく之を一括して算すべきなり、馬に騎りて出あるく程、人の

心神に佳なるもの他にあらず、誰にても毎日、少くとも二時間は戸外の空氣に呼吸するを第一神聖なる勉となすべし

新鮮なる空氣は人の身体に於けると同じく又其心神の爲めにも大に適するなり、造物者は常に何か大秘密の話を懷抱して吾等に知らせんと試みつゝあるに似たり、然り實際彼は之を懷抱するなり

地と天、森林と原野、湖水と河川、山と海、是等は何れも皆吾等の爲めには得難き良師にして書籍に就て習得するよりも吾等に教示する所更に多し、去りながら是よりも尙ほ田舍に出ゆき、舟に河水に棹し、花を林中に求め、前世の遺物を古穴に探り、貝殼や海艸を沙濱に集め、又は友を招て球戲をなす等、色々と新鮮なる空氣を吸ひて運動を試むるなれば啻に我健康を養ひ得るのみならず又我心中の糾紛憂慮は自ら消滅し去るを覺ゆならん、否らざるも少くとも其大に輕減するを覺ゆならん、造化は吾等を靜かならしめ、冷かならしめ、又活潑ならしめ、而して更に我心を平穩清淨ならしめ、愉快安逸なら

しむ

快樂や保養のみを事とするは素より氣儘の沙汰にて遂には無趣味に終るべし、左れば遊戯は決して終生の仕事となすべきものに非されども、併し適宜の度を過さゞる限りは此樂みを以て怠惰と稱すべきにあらず

偖て保養の眞味は何れに在るか、樂みにも眞の樂みと虚の樂みとあり、昔し「プラツトー」が「プロタアチエス」をして「ソクラテス」に向て「眞の樂みとは如何なるとなるや」と質問せしめしに「ソクラテス」の云ひけるには「先づ所謂る美しき色と形より來るもの、別しては臭と響とより來るもの、其外之を缺くも別に何とも感せず又何等の痛痒もなけれども、あれば愉快を感ぜしむるものより來る」と

感觸は人に眞の樂みを與ふるに相違なしと雖も未だ之を以て無上となすべからず「ソクラテス」語を續て曰く「プロルベス」は快樂其外之と相近き諸感情は、生ある者は何れも皆好む所なりと主張すと雖も、予は之に滿足せずし

て更に言はんとす、才智、強記其外、之に類似するもの及び正議公論は苟くも之を採取するとを得るに足るべき人に在りては快樂よりも更に一層望ましかるべく又此種の人に取りては是等こそ何よりも最も利益あるものなれと

眞の樂みを數ゑ來れば殆んど限なし、曰く親戚と朋友、對話、書籍、音樂、詩歌、美術、運動と休息、造化の美と變化、夏と冬、朝と晩、晝と夜、晴天と雨日、森林と原野河川、湖水、海洋、動物と植物、木と花、葉と菓、是等は唯其萬一のみ

「吾等が之を樂まん爲めに此地上の深切なる菓實」を下し玉はれと神に祈るは中々の大願なり、況んや「新しき樂みにして未だ人には知られず、唯之より文明の眞道に沿ふて人の見出すべきもの」必すや澤山之れあるべきに於てをや

若し人にして此生涯を樂む能はざらん乎、是れ其過なり「ラスキン」曰く人は總て此生涯を樂むとを得るなり、然れども其樂みを成就するもの甚だ稀れ

なりと

「アラビヤン、ナイト」中の最大なる奇術の一は、彼の人が之に坐するときは何處なりとも我思ふ所に運送せらるゝことを得ると云ふ「幻蓆」是なり、今や鐵道は吾等の爲めに此用をなす、「凡そ人は眼界の廣がるだけ其想像界の富を增すものなり」

予は又、好談話を以て今ある樂みの中の最上部に置かんとするなり、既に愛すべき音調をなし又、神心と形體と双方の裨ひとなる「ヲヨッソン」が曾て或る樂しき晩のことを說かんとせし時、述て曰く君よ、吾れ等は好談話をなせりと、予は又「ダアウヰン」や「ライエル」「キングスレイ」や「ラスキン」「フーカア」「ハクスレイ」や「チンダル」と共に坐する少時間は、左ながら新鮮なる空氣の注入に依りて精神の爽快を覺ゆるが如き感を爲すと屢々なりき

凡そ談話の術ほど人の天稟に依りて巧拙あるもの他に稀なり、隨分怜悧の性を備ふ趣味あるべき人にして尙ほ全然絞り出す樣にせざれば何事をも

其人より期し得べからざるものあるを見る、總して談話家は常に歡迎せらる、此術も亦他の術全樣、習熟の法あり雖にても實驗を積まざれば上手に話す樣にはなれぬものなり

「ウヰリヤム、テムプル」曰く好談話の第一の成分は眞實なるとなり、其次は好感情、第三は愛嬌、第四は滑稽なりと、而して此最初の三者は多少の差こそあれ、誰にても出來るなり

會談に依りて知り得たるとの爲め學問する人多し「ベイコン」曰く多く尋ぬる人は多く知り且つ多く滿足す、若し其問ふ題目を、話す人の得手とする所に依むるなれば殊に利益多かるべし、是れ其人に喜んで話す機會を與ゑ、由りて以て絕ゑず其智識を享受し得べきが故なりと

兒童は論なく、吾等自らにも「美」の觀念を十分に養成すると甚だ難きを覺ゆ併しながら斯の如く純潔、低廉、近より易くして斷ゆるとなき樂みは外にあるとなし、人によりては風景木や葉、菓や花、碧空、卷雲、滄海、湖上の漣波、河中の

金波、草上の蔭、夜間の星月を以て無比の樂みとなすと雖も、人によりては又總て此等のものには何の頓着もなく月の輝くも、星の光るも更に顧みるなく、鳥や蟲も、木や花も、川や湖や、海や、日も月も星も何の快樂をも覺ぞざるあり

人造の色は「劣等なる虚飾には十分なりと雖も、消ぶなんとする雲の一片、又鴨の翼の一毛にも比すべきにあらず」

「ラスキン」曰く眞に美しく感じ何物を捨てゝも之を見んと欲する光あり、傾かんとする日の光と、昇らんとする日の光と、地平線上の碧空に於て戍火の如く燃ゆる赤雲の斑々たると是なりと、空の色は宛も地上を照らすが如くに見る、遙かなる西の山の端に掛る橙大の點子ころ正さに千万年の落日を回想せしむるものなれ、實に落日は美くしきものにて之を眺むるときは左ながら天門を通觀するの想なり

「タルマソック、コムメンテイトア」「猶太の傳說に對する」「ペピロン」の批評家は

吾等に告ぐるに「マンナ」「イスラアル」人の家屋」に於ては誰にても其最も好む嗜好物の得らるべきを以てせり、造化に於けるも亦何ぞ之れに異ならん、誰れにても求めさゑすれば其最も樂しと思ふものを得らるなり

然れども予は敢て悉く眞の樂みの長き目錄を繰返さんとする積にあらず夫は偖て置き、斯く無邪氣なる多くの樂みあるに、人は何とて悪しき樂みや或は又其疑ある樂みを故らに選むべき歟、先づ兎も角も出來るなれば其善良なるものを悉くし其上にて次きを考ふるも充分時間あるべし

所謂る浮世を閲みし世の中を知ると云ふ人に多くの誤解あるものなり此等の人は却て、彼の己れが田畝の外に出でず常に扶かりなく之に注目する多くの農夫よりも世の眞相に就て知る所少なきなり

放縱なる生涯を過ちて「派手なる生活」と云ふものあれども其實斯る生涯は惘然なる幸福の假想なり、一たび之に陷りたる僧侶は自ら顧みて己れを實むる外なきに、却て漫りに世を詫つ「ヴォヴェナアグス」(佛人、千七百四十七年

に死す)曰く娯樂の盡きたる時とは即是れ人の娯樂を盡くしたるときなりと、「ダムーセ」佛人、醫學、法學、等に通じ又詩を善くす、千八百五十七年に死す)曰く吾れは春秋に富む、吾れは唯我半生を閲みしたるのみ、而して既に倦み去り、面を背けて過去を顧むとは、何たる悲哀なる自白ぞや、若し彼にして適當に世を過ごせしなれば須らく正さに感謝して過去を顧み、而して希望を抱て前進すべきものなりと、

生涯の價値は其德義の價を以て之を計算すべきなり、更に之を言へば、若し「魂」「賢しく命令を下し、愛らしく支配し、利ある樣に注意し、十分なる樣に供給し慈みて導くときは「躰」は劣者の位置には在れども尚ほ其組合員にして共に完全なる人を作る、若し之に反して「体」「法律を作り「食慾」なる壓制を以て先づ「理解」を蔑視し、其上「意思」と「選擇」の最上部分を掌握するに於ては「躰」と「魂」とは適當なる組合員にあらず其結果、人は愚となり不幸となる、即ち「魂」にして若し支配する能はざらん乎、其同伴たる能はざるべし、之を要するに「魂」は支

配するか、否らざれば奴隷たるか二者、一あるのみ」

第五章　健康

「魂」は人の最も貴き部分なると言ふ迄もなき所なれども、今の吾等が存在の狀況に在りては兎も角、其働きは「體」に依るの外なし、著名なる我英國人「ファラデイ」(大化學者、千八百六十七年に死す)の初めての經驗ころ之に就ての面白き例證なれ、彼は原來或る化學家の店童より身を起こせし人なるが一日得意先へ使に行きたる所、幾度鈴を鳴らしても之に應じて出て來るものなし、此に於て柵の内に頭を差し入れ、内に人の居るや否やを伺はんとせし折柄、偶ま吾れは實に柵の何れの側に在りやとの奇問、彼自らの心中に起り來り、暫らくして自ら心に決して以謂らく、人は必ず其頭の在る方に居るものなりと、其時俄に戸の開きければ彼は之を避くる間なく遂に柵と扉とにて其足部を締められ痛を覺えたり、之に依りて彼は頭と他の部分とに關する

古るき戯話(聖書にあり)の眞理なるとを悟りて歸へり來れりと云ふ

吾等が生活の現狀は、今や健康に關する研究を殊に重要たらしめたり、先人に在りては、吾等よりも更に多く田舍に住み流通よき空氣を呼吸し、又多く農業に從事せり吾等は之に反して市中に麕集し多く家屋、店舗又は製造場内に於て働き其業務も亦、座して之を執り、身を屈めて之を爲す者多く、自ら腦と神系とを費す種類に屬すれば、我大都會の市民は之を其先人に比し活潑の度を減じたると疑なし、試みに龍動の貧民窟又は他の大製造場の所在地近邊に車を驅らん歟、忽ち生氣乏くして色蒼白、胸膈太だ狹小なる數多の男女の徘徊するを見ん、又我衛生上の改良進歩は勉めて、弱者と病者とをも生存せしめ置くを以て一面より見れば頗る危險なる所あり、蓋し病患は少し注意し且つ、健康に關する法則の初歩を心得居れば避け得らるべき原因より來るもの多し

史ありて以來、最も古き時代に在りてすら賢明なる政治家は大に健康問題

に意を注ぎたるを見る、彼等は即ち「健志は健體に次どる」と云ふとに重きを置けり

健康に注意するは一個神聖なる義務なり、人或は「モーゼス」が衛生上の法則は其宗教教育の要部を爲せりと言ふものあれども、予は敢て然ざりしならんと思はる尤も吾等が聖書中に見るものは一個の法典にして民事、社會幷に宗教に關す而して健康に關する法則は、縱令ひ之を宗教の一部と確言するを得ざるにもせよ、常に之れに近より來りつゝありしには相違なし、「セント、ポール」曰く嗚呼何事ぞ、汝の體軀は汝が神より享けて汝に藏する「神聖なる靈魂」の宮殿にして汝自身のものに非らざることを知らざる乎、埃及人の身體を貴重にせしこと中世紀の人が之れを輕視せしに比すれば大に勝れり、彼等は襤褸や蘆芥の中には先天の德性なきのみならず實際は全く之に反せりと爲す

希臘人は「形體上幷に智識上の教育を一個の學術即ち研究事業となせり、其

女子は温雅優美なる運動のみならず或る時は又體力上の運動をも試みなり、此に於て彼等は、この自由にして健全なる生活に依りて其躰軀を發達せしめ、人間眞美の無比永久の雛形として遺れり」

清潔は神々しきに亞ぐとは古諺に言ふ所、今日醫學上の發明は正に此古諺の過まらざるを確め、又明かに其理由を説明し、何故に然る乎を示す

疾病は多く我組織の不良なる狀態に起因するものならずして、他の有機物の侵害に係るものなるとは既に今日吾等の之を知了する所、即ち彼の虎列則、天然痘、其他數多の疾病は自ら發生するものにあらず皆我身體に黴菌の附着するに因りて起るものなり、此に於て乎、竟に吾れ自らのみならず我住む家屋、我着くる衣服、我飲む水、我呼吸する空氣を清潔にする大必要を見る」

抑も人の躰軀は實に奇妙不可思議なるものなり、且つ思へ、千種万樣の智識我腦裏に蓄積せられ居ることを、又思へ、筋力の意思に隨て動く其速さを、「サア、ゼームス、バゼット」の話に、上手なる音樂師は一秒間に二十四節の割合にて

「ピヤノ」を皷するを得ると云ふ、此一節毎に神系流線は腦より指に、又指より腦に呼應せさるべからす、而して又一節を爲すには指を伸ばし、少くとも又外に指の一動を要すが故に都合、指は三たび運動す、即ち一秒間に二十四節を皷するには七十二に下らざる運動を爲すなり、而して此運動毎に一々明白なる意思を要し或る速度と或る力とを以て過りなく之を或る所に指示する必要あり

皮膚は微細巧妙なる機關にして數百万の細肪より成り其中に脈管、毫髮管及び神系線數哩を含有す而して常に自ら新陳代謝を行ひ居る者にして其職務を適當に遂行する爲には相當の注意と多くの水分を要す、刷毛の此皮膚に對して必要なると猶ほ其毛髮に對して必要なるが如くなれば此驚くべき機關を健康に保たんとするには常に其部分を使用すると肝要なり

實にも「ホプソン」の「ミルトン」が云へる如く多くの病人は「安逸は其の重もなる病氣なりき」

雪も「アルプス」も之を滅す能はざりし流石の「ハンニバル」も「カムパニヤ」に於ける驕奢の爲めに弱れり、干戈を執りて勝利を得し彼は快樂の爲めに敗北せり

感觸は斯かく無邪氣なる快樂を以て充滿すと雖も、若し之に任するときは必ずや昔しの「サイレンス」(嬌歌を以て船員を迷はしめ其船舶を破りし魔女)の如く、此生の巖礁や盤渦の中に吾等を難破せしめ終るべし、吾等は常に飲食上の過誤より自ら疾病を招くと多し、飲むと云ふ語は風、北部國民に取りて一大禍根たる「アルコール」と云ふ語と同一意味に使用せらるゝを見る此物は或る場合に於て貴重なる良藥たりと雖も畢竟は此上なき誘惑物なり恐らく我國民の罪惡、不幸、苦痛の原因は過半、此にあらん、純潔なる水は決して人を罪人となすとなし、之に反して罪惡は殆んど皆「アルコール」に集中すと謂ふも不可なきなり、古るき猶太の諺に云ふあり「惡魔の自ら往く能はざる所には酒を遣はす」と「一たび惡魔の入り來るや、戸内に立ちて去らず、そこには復た平和や希望や喜悅は決じて住むと能はじ」

「プリニイ」(羅馬の著述家、紀元五六十年頃の人)曰く酒は手を戰かし、眼を濕るめ、夜を不安に、夢を不穩に、朝の呼吸を汚穢に、何事をも忘れ勝ちにならしむと、「サア、ダブリュ、ラレイ」(千五百年代)此句を引て之に附言して曰く離れとても酒を好む者は秘密を保つ能ざる故に人に信ぜられざるべし、酒は啻に人を獸類に化するのみならず又實に狂人たらしむ、故に若し汝にして之を愛せんか、汝が妻も子も友朋も皆、汝を輕侮すべしと

「セクスピヤ」には酒を賤みたる數多の秀句あり、曰く

ヲヽ、あの人は其身の腦漿を盜み去るべき敵を己れが口に注ぎ居りぬ、喜び、樂み、タワイもなく打ち興じつゝ、遂には其身を獸畜に化し去るとよ

「今こそ智覺ある人なれ、遂々馬鹿となり、遂には獸畜となるべし」と云ふ語あれども實に斯く云ふは獸畜にも氣の毒なり

之に反して禁酒の酬の如何に大なる乎「吾れは斯く老ては見ゆれども强健

にして且つ勇氣あり、是を畢竟若き時、決して强烈なる飲料を我血に注がざるに因る……左れば我歳は勇ましき冬の日の如くにて凍りたりとも尙ほ凜然たり」

聖書の中に飲酒の害に就き說きたる點、少なきは驚くべきに似たりと雖も記臆せよ、聖書は始め熱帶國に於て書かれたるものにして飲酒の害は殊に寒帶地方に於て甚しきものたるを、去れども「ソロモン」は尙ほ云ふあり曰く

敵を持つものは孰れぞや、悲みを懷くものは孰れぞや、爭鬪するものは孰れぞや、費辯を皷するものは孰れぞや、敵なくして傷つけらるゝものは孰れぞや、眼の赤きものは孰れぞや、酒に沈酩する人是なり、混合酒を求るもの是なり、酒の色の赤くして美なるとも、其杯中にあらはるゝ色の麗はしく見ゆるとも酒に迷はさらるゝなかれ、……遂には蛇の如くに嚙み、蝮の如くに螫すものぞかし

今や飲酒の害は漸く減じ來らんとする望あり決して理由なきにあらず、智

力を要する職業を得る機會の多きと、音樂繪畫幷に書籍を樂むことの容易になり來れると其外、我國民の大に敬すべき、大に慰むべき家庭の樂みは以て漸く禁酒を奬勵せんとする勢ある故なり

「アルコール」の害は更に著大なりと雖も暴食の害も亦一般に涉れり、恐らく十人中の九人迄は必要よりも多く喰ひ、適宜よりも多く喰ふ、時折の饗應は左迄にもあらざれども、日々斷えず過食するは大に害ありて、大なる苦みとなる、哀れ過食は寔に容易なり、心配する勿れ喰ひ足らぬ恐れは決してなきものぞかし

適度と云ふことには終身注意せざるべからず「實にや智識と勇氣の黃金は之を磨けば双ながら其價を倍蓰すべし、又强力に和するに溫厚を以てし、熱心に和するに禁酒を以てすると恐らく是れ事業成功の大秘訣なるべし」

適度とは、決して弱きとにあらず、寧ろ力あるの謂なり即ち其中には健志と克己とを包含す

食するに當りて遲々たること勿れ、然れども餘り早く喰ふべからず、イッも今少し喰ひ得ると思ふ程にて食卓を去るこそよけれとは人の常に言ふ所なり、胃か膨脹すれば腦は働くことを得ぬが常なり、「食事の後には暫らく休め」とは金言なれども餘りに澤山喰ひ、食事より食事に到る迄、始終休むことを必要とするに至れば夫は誠に哀れなる話なり、畢竟は生て居る爲めに喰ふものにて、喰ふ爲めに生て居るにあらず、長き食事は此生を短からしむるものと知るべし

野蕃人が魔法使ひとならんとするに當り、之れが準備の第一は長き間の斷食なり、其結果は神系組織の活動を增す彼等は直に之を認めて神來となす、なり、素より彼等の所爲たる過度の咎は免れざれども、誰れにても試驗して見るべし、食物を減する時は必ず腦の働きを增すことを發見せん

且つ夫れ胃の輕き時は自ら心を輕快ならしむるものなり、之に反して濃厚の食物は常に精神を劣下せしむ、見すや不消化に苦む人は、諸疾病を合したるよりも其數常に多きに居るを

「マイコッ」曰く食事の重要なる部分を餓に變更するは謹むべきとなり、若し之を實行する必要あるときは宜しく他の部分をも之に適せしむべし、凡そ食事の時間、睡眠の時間、並に運動の時間を穩かに且つ喜ばしく樂むとは長生に就ての最上なる原則なりと

「アベアネシイ」曰く若し汝にして健康ならんことを望めば一日六片にて生活し而して其金は自ら之を得る樣にせざるべからずと、此格言は數語の中に食事と運動に就ての要點を包含す、彼れの時代の如き物價の廉なる日には六片にて十分に慈養になる良き食物を購ひ得べきも、左ればとて之にては飲酒するの餘裕なく、又決して過食するの憂あるなし、而して自ら之を得んとするには自然と運動の必要を勵ますなり

吾等が今の如き狀態にては屋外にて費す時間は之を空費と謂ふべからず

當に其時間は此生涯の中に勘定すべきものなるのみならず又實に其時間

は此生涯の上に增加すべき時なるなり、即ち其時間は以て吾等の地上に在る日を長からしむるに至るべければなり、羅馬の古諺に曰く清鮮なる空氣に呼吸すべしと、中々長く戶外には居られぬものなり

清水は新鮮の空氣同樣に必要なり、若し之に耐え得るなれば、冷水を飲み冷水に浴すべし、齒に注意するが如き眞に些々たるとなれども生涯の苦樂上には少なからざる相違を生すべし

健康は藥に由るよりも寧ろ人の習慣と食事の如何とに由るものなり、我先人は疾を退くる爲め常に藥種を用ゐ、醫學校は素より「ベイコン」さえも亦、常に之を勸めたれども是れ大なる過なり、而して初めて此過誤を發見したるは「ロック」英國の醫學者、千七百四年に死す、其人なるに似たり、醫學といへば畢竟藥の用法を指示するものに似たりと雖も、實は人若し自ら注意を加えて暮すなれば藥に需つ所甚だ少くして濟むべし

何事も自然に任せて之に逆ふと勿れ、奈破翁曰く生存の原則に抵抗ずるとなく、之に自家防衛の自由を與ふべし、然るときは百千の藥種にも優る効あらんと

十分なる空氣と、十分なる水と適度の食事とを以てせば大抵の人は健康と強力の光輝ある感覺を樂み得て、齡傾く後迄も壯時の春を保ち得べし

然れども健康は單に躰軀のみのことにあらず憤怒、嫌惡、悲哀、恐怖は生氣を損傷するものゝ中にて最も勢力あるものなり、之に反して、喜悅、愛嬌、靜穩は健康の有力なる原素なり

「ライカアガス」が「スパアタ」の各飲食店に於て笑神の小像を作らしめしと云ふ話あり「ベッフヲン」(哲學家にして史家、佛人、千七百八十八年に死す)曰く大抵の人は今一段長生するを得べき筈なれども皆虛想と心痛とに苦められて其の壽を終らずして死すと、是れ其國人に就て歎じたる語なれども他の國人に就ても仝樣なり

人の不快なるときは物事、神系を刺傷し、實に些細なるとにても禍の種とな

らんとする傾を生す、即ち是れ休養と新鮮なる空氣とを要する確證たり

兒童に就ては、過度の壓抑、大人に就ては死に到る迄、働きしと云ふ語を屢耳にす、然れども實際斯る例は稀れなるべし、大抵の場合に於ては其の働きなるもの正實なる働にあらず、激昂、倦憊、憂慮の類なるを以て遂に身體を毀すに至るなり、怠惰、沈酣、放縱は善良なる苦役よりも更に人を殺すこと多し、腦は猶ほ筋力の如く運動を必要とす、若し早起禁酒其他の如き良習慣に身を慣らすときは、働きは縱令ひ困難たりと雖も過度ならざる限りは、害を及すとなく寧ろ身體の爲めに佳なるべし

誰にても何時かは不眠に苦む時期あり、是れ眞にツラキことにて其時は宛も何か一大不運の、頭上に落ち來らんとする想あり、平生なれば何の苦ともならざる些事にても此時には如何ともする能はざるが如き感を起し來り、心は左ながら萬づの快樂より飛び去りて痛恨の跡を追ふて徘徊するに似たり、然れども敢て失望する勿れ、不眠の人を殺したることは未だ曾て聞かざる

所なり、其の時には何よりも先づ決して藥を用ゐる勿れ、是れ却て危險なり夫れよりも出來得る限り家内に居る時を少くし、戸外に居る時を多くし而して物事を成るたけ容易く思惟するとせば睡眠の恩慶は自ら復歸すべし、若し不眠にして餘り長く續かざりしなれば其爲め却て大に得る所あるべし、之にて依りて平生は其一半をも感得すると能はざる睡眠の恩慶を知るを得ければなり

躰軀上の病は心に因するもの多し、醫師の診察すべきは外形上の兆候のみに止まらず、屢、次の如き問題に出會するとを想ふべし曰く

汝は病み居る心を制馭し、悲根を記憶より抉去し、腦裏に印記したる妄想を消滅せしめ、而して心頭を壓抑する危險極まる物質にて充滿する胸膈を、或る香しき忘れよき消毒劑を用ゐて清掃する能はざる乎と

健康は即ち幸福の大原因にして又幷せて善良なる事業の要部たり、左れば之を等閑に付するは自毀の沙汰なるのみならず又氣儘の沙汰なり

自ら過度に其身を役する時は到底善き事業は爲し難かるべし、少くとも我最上の手際は示し難かるべし、尚又斯の如き鹽梅にて働くときは自ら後にて多くの靜養を要する故、却て得策にあらず、夫は姑く措くも斯の如くにして出來たる事業は到底高等の資質を有する能はず、自ら短氣と虛弱の痕迹を顯はし、其判斷力澄明ならず、若し其事業にして他人との共仝に係るものなれば必すや衝突又は不折合に終るべし、試みに誰れても斯るゝ有樣を以て繪を作らしめ見よ、忽ち其手腕の確かならずして思ふ通りに運ばざるを氣付かん、是れ筋力の憊れたる爲めのみにあらず、神系の消耗したるが故なり、凡そ勞働は樂て之に從事すると肝要なり、之を樂むには確實勇往に働くを要すと雖も間斷なく働くとは宜しからず、又爲めに食物と靜息、運動と休日とを等閑にすべからず

健康の衰弱しゆくは、殊に自ら之を招致したる時に、其著るしきを見る、之に反して世には己れの過失に屬せずして先天的に病患に苦む人あり、然れど

も斯の如き人には造物が宛も其體軀の弱きを埋め合すかの如く澄徹なる心神を與ふると多し、大なる病患を抱きたる人にして尚ほ其喜悅と愛嬌が好健康を樂むものゝ摸範となり又其人が蒲柳の質を享けたる爲め却て高尚に、却て神聖になりたるかの如くに見ゆる人あるは屢、之を實證する所なり

第六章　國民教育

史紀ありて以來、賢者は常に教育の必要を主張せり(然れども近年に至る迄明かに兒童の爲めに書れたる書籍のあらざりしは寧ろ驚くべき程なり)ヒトバデサ曰く有らゆる寶の中に智識ほど貴きものなし、盗まるゝ憂も、取り去らるゝ憂も、消費せらるゝ憂もなければなりと、「プラット」曰く教育は最良なる人の何時にても有するを得べき最も格好なるものなりと「モンテイン」は概括して「無學は害惡の母なり」と云へり、「フラア」曰く學問は凡

そ人の與ふるとを得べき最大なる施行なりと、又或る佛國の道德家曰く智識なくして權力を有せしむるは甚だ危險なりと、無學なる生涯は常に比較的、緩慢なる生涯たらざるべからず、人は啻に生活の爲めに智識を要するのみならず、又此生涯の手段として之を要すとは能く言はれたる語なり

[ペトラアチ]は、其最も意を用ゐしは修學に在りきと吾等に告げたり、[セクスピヤ]も亦語を[セイ]公の口に藉りて其自說を述ぶるものに似たり、其語に曰く

無學は神の非難する所、智識は之に乘じて天に飛び上る翼なり

[ソロモン]は其麗はしき語調を以て吾等に告げて曰く

幸福とは才智を有する人と理解力を得たる人のとなり、若し之を寶品ならしむれば銀製の品よりも貴く、之を得るときは煌々たる黃金にも勝れり、其の貴重なるや紅寶石も及ぶ所にあらず、凡そ人の望む總てのものを以てするとも之れと比較にはならざるべし、其右手には歲月あり、其左手には富貴と名譽あり、其道や愉快なる道にして、其過る所や平穩なり

又曰く

才智は最も肝心なるものなれば、宜しく之を得べし、而して又精一杯の力を以て理解力を得よ

去りながら時論は長らく反對の方面に向ひ居れり、殊に女子に關して然りとす、日耳曼の諺に、女子は化裝室を以て其の書籍室となすと云へるあり、又佛蘭西の諺に、女子は僅かに數部の聖典を有す、否らざるものは空く屋內に蟄するのみと云へるあり、一面に於ては貧民も、一面に於ては紳士も、共に敎育に無頓着なりしは餘り久しき昔のことならず、其時世には敎育は畢竟僧侶の爲すとなりと想ひ居たりしなり、即ち今用ゆる「クラーク」(書記)なる言語が原と僧侶といふ意義なりしに由るも之を知るに足る

[ドクトル、ジョンソン]の如き賢者に在りても尙ほ、誰れも彼れも讀書するとを習ふときは此世界に於て躰役に從事するものを得難きに至らんと云ふ

主意を殆んど自明の格言として說きたるが如し「ションソン」は大文學者なり而して尙ほ勞働の眞價を知り得ざりしに似たり

右の如きを一時期となす、之に次くを、敎育を以て人生の業務に特殊の關係あるものと認めたる時期となす、即ち此時期に在りては兒童の敎育に意を用ゆるを必要なりとし、否らざれば之をして其身を立るとを得ざらしむと思惟し、只讀み書きと數學は貧民の兒童に肝要なり、讀み書きは業務の精細に缺くべからず、數學は又勘定を保つ爲めに缺くべからずと考へしなり

此說は實業界の各方面に蔓延せり「エルドン」卿は其銀行者(尤も今日の所謂る銀行員とは大に異なれり)を選ぶに當りて自ら語りて曰く彼等は龍動に於て最も愚なる銀行者なりし故、之を採用せり、若し更に愚なるものあれば吾れは其勘定方を交替せしむべしと、「ハズリット」は、苟くも實業に從事せしめんとする兒童は、何事も夫れ以外のとを敎ゆべからずとの意見を主張せり、彼れ曰く誰とても若し其腦頭中に金といふとの外、他の思想を有せざれば即ち金を作るに至るべしと

右の如きを第二の時期となす

今日吾等の敎育を重要視するは單に之に依りて人をして最良なる働き人たらしめんとするのみならず、働き人をして最良なる人たらしめんとするに在り、「ヴクトル、ヒユーゴ」いみじくも言はれたり、「學校を開く人は獄を閉づ」と

瑞西の一政治家曰く我兒童の大部分は貧者として生れたり、然れども吾等は之を無學の徒として成長せしめざる樣、注意せざるべからずと、吾等も亦我英國に於て現今、敎育の重要なるとを知得し始めたり

「マッシユ、アーノルド」其著啓蒙と無主國中に於て吾等に告げて、世には尙ほ啓蒙と、芳情と、光輝とを以て總て空妄と認むるもの多しと云へり、然れども此書は實に千八百六十九年に書かれたるものなり

敎育條例の通過せし千八百七十年は我國の社會史に於ける最も重要なる

一時期なり、其時に於て小學校に在りし兒童の數は百四十万人なりしが今日にては五百万に超えたり、其結果や如何、試みに罪人の統計を一瞥せしめよ、罪囚は千八百七十七年に至る迄は增加の傾あり、該年度の平均數二万八百人に及べり、然るに其以來は漸次減少、今日にては僅に壹万三千人に下れり、即ち總數に於て三分の一を減じたる割合なり、一方に於て人口は漸次增加し千八百七十年以來、三分の一を增したる故、若し罪囚をして同じ割合に增加せしむるときは其數今の壹万三千人の二倍よりも尙ほ多く增し約そ二万八千人たらざるべからず、然るときは我警察及び監獄の費途は今の年額四百万磅にては賄ひ切れず少くとも八百万磅に上らざるべからず、殊に少年の罪囚に至りては其減少の割合更に滿足すべきものあり、千八百五十六年に於て罪となるべき害惡を犯したる少年の數壹万四千人ありしが、千八百六十六年には壹万人に下り、千八百七十六年には七千人に下り、千八百八十一年には又六千人に下り、尙ほ予が得たる最近の數字に據れば遂に五

千百人に下れり、更に轉じて貧民救助の統計に徵するに、千八百七十年には貧民の數、人口千人に付四十七人以上に當り、五十二人にも及びたるとあり然るに其以來二十二人の割に下り居れり、殊に都會に於ては實際平均數以下に在るとは予の私かに顧みて誇る所なり、即ち其割合は從來の一半にも下れり、我貧民に對する救助費は年額八百万磅なれども若し貧民の數、昔の割合の如くなりせば此額は增して千六百万磅に上り今の額より更に八百万磅だけ多く要すべき筈なり、事實右の如くなれば若し吾等が二十年前と同一の割合にて費用を負擔するとせば監獄費は四百万磅、貧民救助費は八百万磅だけ今日より多くの支出を要する算用となるなり

尙又重罪の統計に至りては更に著るしく、更に滿足すべきものあり、千八百六十四年に終る五ヶ年間の平均は、一ヶ年間に苦役の宣告を受たるもの二千八百人ありしが、以來漸次其數を減じ去年は僅に七百二十九人、即ち人口の增加し居るにも拘らず前者の四分の一に下れり、此を以て我已決囚の八

樞は實際不用に歸し他の目的に使用せらるゝに至れり

罪惡と無學との密接なる關係を示さんが爲め最近の報告に基き之を檢するに、收樞せられたる罪人十五万七千人の内、讀み書きを能くするもの僅に五百人に過ぎず、又所謂る教育を受けたるものに至りては僅に六百五十人に過ぎざるとを知れり

次きに掲ぐる表は重罪の宣告を受けたるものゝ數の漸次減少したる事實を、驚くべき有樣を以て示すものなり、今一方に於て罪囚の數、斯の如く減少しつゝあると同時に、一方に於て人口の速に增加しつゝあるとを思へば此數字や更に驚くべき感あらん

苦役の宣告を受けたる罪囚平均數	英國（威士斯）	英國幷に威士斯平均人口
一八五九 十二月三十一日	二、五八九	一九、二五七、〇〇〇
一八六四 仝	二、八〇〇	二〇、三七〇、〇〇〇
一八六九 仝	一、九七八	二一、六八一、〇〇〇
一八七四 仝	一、六二二	二三、〇八八、〇〇〇
一八七九 仝	一、六三三	二四、七〇〇、〇〇〇
一八八四 仝	一、四二七	二六、三一三、二五一
一八八九 仝	九四五	二七、八三〇、一七九
一八九二 仝	七九一	二九、〇五五、五五〇

監獄と警察の費用は罪囚に關する費途の一部分に過ぎざるとは、殆んど此に指摘するの要を見ざるべし

然れ共予は此問題を唯、金錢上より考究する者と認められざらんとを希望す、予の說て之に及ぶは畢竟費用の點より反對する人に答へん爲めのみ

尤も他の事情も亦幷せ考へざるべからず又此等の數字とても學術上より見れば精確と謂ふべからず、從て種々の參酌を要すべきは予の知了する所

然れども全時に此等の數字は甚だ趣味あり幷て又滿足すべきものたるとは予の斷言するを憚からざる所

我國に於ける罪惡の僅か一部分のみが、故意の惡業及び抵抗するを得ざる誘惑に起因し、其大部分は飲酒と無學とに起因すると事實の證する所なり

凡そ人の享有するを得べき幸ひなる結果は、特り兒童が學校に於て習ひ得たる善事と、清潔の習慣と、又は習得したる順序とにのみ因るものならず、實に其道路に於て惡科業を習はざりしと罪人と怠惰者の弊習惡慣に遠かりたるとの致す所と謂はざるを得ず

吾等は此に至りて貧民と罪囚の減員、殊には少年罪囚の減員を明示する監獄の空虛と貧民救助費の減額とを見て益敎育の利益を感じぬ

（此に所謂る救助費は唯貧民の持續に關する費途のみを意味す、通常貧民救助費中には此他多くの費途をも含有するものと知るべし）

去りながら今吾等は果して最上なる敎育方法を適用せるや否に至りては

未だ大に疑なきを得ず、此生涯に於て吾等が再三再四、返答を要すべき三大疑問あり、曰く善か惡か、曰く眞か僞か、曰く美か醜か、是なり、而して吾等の敎育は此等の疑問に答ふる爲め吾等を助くべきものなり

抑も敎育の目的は單に人をして此生涯を樂しきものたらしむる樣なさしむるに止まらず、幷せて其樂しき生涯に於て何事かを爲し遂けしむるに在り

殆んど二世紀前に「ベイコン」は、書籍を賣りて靈を買はんとせし人のことを、是れ才智の神と快樂の神とを不產の婦として放逐し、却て火神に依賴せんとするものなりと云へり、吾等は才智の神と快樂の神とは放逐せさりしと雖も去迚又未だ我敎育の基礎を十分「造化の聖書」上に置くものにあらず

讀書や習字、數學や文典が「敎育」を織成するものならざるとは猶ほ宛も庖丁や、匕、肉叉が晩食を織成するものにあらざるが如し、「アブラハム」「アイザック」「ヤコッブ」は決して讀みも書きも出來たる人にあらず、又恐らく比例の原

則に就ても全然知る所なかりしならん

予は屢古學教育を攻擊するものなりとの非難を受けたれども實際、敢て然らず、古學も亦教育の必要なる部分にして之を下げしみ、之を等閑にするは不都合たり、然れども決して之を目して教育の全部と認むべきものにあらず、左れども我教育は、彼の「チャールス、バクストン」が論ぜし如く、徒らに二千年前に死したる紳士が用ゐたる言語を習修するのみより成ると多し、之れが爲め他の目的を次ぎにするは猶ほ「シセロ」が譬にある、右の方のみに注意し、左の方を顧みざる人に似たり、況んや我今日所謂る古學教育なるものゝ眞に古學にあらざるに於てをや、大体、原著者の眞意の消滅せんとする迄も其文法に對して數多の注意と時間とを費すが例にして遂には實際古學は變じて文法學と稱する學術の一派となり了れるが如き狀あり、而して是さえも亦常に學術的、即ち最も趣味ある方法を以て教授せられ居らず、尚又今日の方法にては我兒童に羅甸や希臘の言語を話すことを教えず、兒童は羅馬

人や希臘人とは大に異りたる言語の發音を以て慣らされたり、即ち其本國の人民に異りたる發音を教えられ居れり、蘇格蘭語に就てすら尚ほ然り、豈是れ不都合の極にして、教育を出來得る限り無用物たらしむるものならずや

此方法は遂に學者をして古學上の文字を愛する念を發せしむるを得ず、「サッカレー」が其「コーンヒル」より「カイロ」に到る旅の記中に於て、先づ希臘の女神が彼に近づき來り、雅典に遊ばるゝとは面白からずやと尋ねしものと想像し、之に對し、禮儀よりは寧ろ眞實を以て徐に答へて曰く嬢よ、若き時の御全行が今斯く年老て後も尚ほ御附合の出來ざる程に身に取りて痛らき重荷なりしと

古學は斯かく重要なりと雖も畢竟教育の一側面に過ぎず「人類の文學」と云ふ其語は如何に古き說に於て、教育は人類の同情に賴らざるべからざる乎人と人とを連結する廣き親類主義に賴らざるべからざる乎を示せり「セク

スピヤ」の如き羅甸を少し計りと、希臘を僅計りより知らざりしと聞けり、夫れ書籍は滿幅の考慮と理解を以てするも尙ほ未だ教育の一部分を供給するに過ぎず、書籍のみを勉强し造化に就ては何物をも知らず、我住む世界に就ても何物をも知らざる兒童は到底完全なる人たるを得ず、單に一部分より以上の人たると能はざるべし

我國の所謂る教育なるものは多く、樹木を生長せしめんと欲し、花床上に於て本草學に關する論文を讀むが如しとは眞に穿ち得たる說なり

以上の如き言を爲すと雖も予は決して學校教員を輕侮するものにあらず其職たるや最も骨の折れて氣根を費やすと甚しく而して又責任あるものたり、兒童と共に遊ぶほど樂きもの他にあるなしと雖も之を教ゆるは又別のとなり

文法や數學を教授するは恐らく餘り六つかしき業にあらず、然り是は容易なれども、少年の心魂を助け、之に勇氣を加へ、希望を與へ、以て石炭を吹て要

用なる火焰となすと、新き思想と確乎たる行動とを以て失敗を恢復せしむることは、容易にあらず寧ろ神の如き人の事業なり

教育は辯護士や僧侶、兵士や教員、農夫や技師を作る爲めに施すものにあらず、人を作る爲めに施すものなり、「ミルトン」曰く人をして公私と戰和とに拘らず總て其職務を正しく、巧みに、且つ雄大に仕遂ぐる樣に適せしむるもの即ち之を完全にして精神ある教育と謂ふべきなりと

哲學者は常に、事實の問題も舌端の考に依りて決定するを得べしと速了す「プラツタアチ」は牝鷄と卵と何れか先に來る乎、との問題に付面白き討議を爲し、人皆牝鷄の卵と言ふも、卵の牝鷄と言ふものなければ牝鷄こそ先に來るものなれとの考案を付したりと云ふ

「ゼフユリー」曰く誰にもあれ、若し多くの書籍に於て思想を發見し得べしと推想し居るときには大に失望すべし、思想は水の流れや、海洋や、丘陵や、林野や、日光や、佳氣の中に在りて存するものなりと、去りながら不幸にも、水の流

れや、海洋や、森林や、日光や、佳氣は我が望む程に十分近より難し、尙又書籍中にも必しも思想の存在せざるにあらず唯、判斷力を以て之を用ゆべきのみ抑も言語は思想を言明するには極めて不十分なる機械たり、又何れの兒童にても必ず皆、人となりて成長すべきにあらず、數學の眞理と雖も尙且つ注意して用ゆるを要するにあらずや

人多く學校を出でゝ後、規律ある獨學を爲す能はざるは蓋し予が宛も今論評せし我教育制度の決點に起因するとなるべし吾等の苟くも生あるの間は習ひつゝあるとは、猶ほ古諺に生ある中は習ふ」と云ふ通りなり、唯其問題は新聞や小說中に散在する片々たる智識を偶然に修得するか、將た兎も角も之を獨學自習と稱し得べき方法にて何事かを研究するかの點に在り人の正當に豫期するを得べきは如何なる事かと云ふことに付、予は曩きに他の著書中に於て或る識者の所說を引用せしが、此には又「ハクスレイ」博士の吐露せられたる同樣なる說を擧ぐべし、其說に曰く

斯の如き教育は平均十五歲或は十六歲の兒童をして其自國の語を容易に、且つ明白に讀み書きせしむるに足るのみならず、尙又其古學の勉强に依りて得たる秀麗なる文學上の趣味を以て、之を讀み之を書くことを得せしめ其自國の歷史と、社會存立の大法則に關する概要を知得せしめ、形體と心理に關する學術の端緖を得せしめ、數學と幾何學の初步に通ぜしむるに足るべく、而して又論理の如きも亦學說よりも寧ろ實驗に依りて之に通じ、音樂と畫學の原理の如きも仕事としてよりも寧ろ樂みとして之に通せしむるを得べし

此說大に味あり、彼の大解剖學者「ジョン、ハンタア」亦云へりしとあり曰く兒童たる時、予は雲や草のことや、又は何故木葉が秋になれば色を變ずるかを知らんと欲せり、又意を蟻、蜂、鳥、科斗並に「カアクス、ワアーム」(蟲名)に注き、又常に誰れも知ることを得ず、誰れも注意せざりし問題を以て人を困まらせたりと吾等の多數も亦深く此語に感ず

「ロック」其教育論の中に述ぶるあり曰く予の書籍に就て言はんと欲する唯一の事は、凡そ書に親むを以て勉強家となすと、世の常なれども、予は之を以て勉強の要部にあらずと認むると是なり、之に關連して他の二事なかるべからず即ち此二事は共に吾等の智識開發上に大功あるべきなり、二事とは何ぞ、熟慮と討究を云ふ、愚説にては讀書は畢竟、粗雜なる材料を集收するに過ぎず、其中には自ら不用として拋擲すべきもの多かるべし、熟慮は即ち其材料を選擇し、木を組み石を縱横にし而して屋舍を建て上げる行爲なり、朋友との討究(論爭は殆んど無用なり)は即ち室内を歩行して其組立を檢査し各部の釣衡と和合に注意し、其仕事の堅否を檢し、如何にして缺點を發見し且つ之を正し得べきかを知るの行爲なり、其外又屢、眞理の發見を助け之を我心中に定置するとありと

第七章　獨學

教育とは我一切の才能の調子よく發達するの謂なり、而して其始めや幼稚園に在り、次て學校に於て進歩するものなれども、此にて終るべきにあらず吾等の爲す、爲さるに拘らず終生連續するものなり、唯其問題は、吾等が成人の後習ふ所は自ら適當に撰擇したるものなるか、將た偶然拾收したるものなるかの點に在り「ギボン」曰く誰れにも二つの教育あり、人より受くるものと、自ら教ゆるものと是なり、而して後者最も重要なりと

寔に吾等が自ら教ゆるものは、常に人より習ふものに比し更に要用ならざるべからず「ロック」曰く何人たりとも教師の規律と節制に依りて智識高遠の境又は學術優絶の境に到るものにあらずと

此心を空虛にし、之を清掃し何事をも思ふなからんと欲するも是れ爲し難きことなり、要は唯、善に向て準備するか、將た惡に向て準備するかに在るのみ

學校に於て頭角を現はさゞりし人と雖も、其爲め敢て失望するに及ばず、凡

そ大器は晩成す、唯若し汝にして、辛苦せざりしならんには、予は之を見て其爲め敢て失望せよとは言はざるべけれども、耻ぢよとは言はんとするなり去りながら若し汝にして其最上力を盡くしたる上なれば唯耐忍するが肝要なり、學校に於て更に現はれざりし人にして後に大成功せし人敢て少しとせざればなり、「ウェリントン」も「ナポレヨン」も共に鈍き子供たりしとは曾て聞く所、又「アイザック、ニュートン」「クーン、スヰフト」「クライヴ」「ウオタア、スコット」「セリダシ」等の多くの傑士に就ても仝樣の話傳れり

左れば學校に於て現はるゝと少なかりし者が必すしも幸福を享有すると少なき者なりと定り居らざると明白なり

才能を認めて、辛苦によりて發達すべき無限の稟性なりと解說したる其語や眞理に近し、「リリイ」美しく語りて曰く若し造物にして其役を爲さざれば勞役も其効なかるべしと雖も、凡そ勉强を以てするにあらざれば造物も亦其効を奏するとなかるべしと

天性怜悧にして光彩ある兒童の、不健康、不勉强又は其性行に由りて、不幸にも猶ほ彼の「ギョテ」の言ひし、二重の花を持ちながら、菓實を結ばぬ樹木の如く、後に至りて或は失敗し、或は零落して駑者となり、又濠洲に於ける牧羊者となり、又糊口の爲めの筆者となるもの多きかと思へば、一面に於て天性は比較的遲鈍なれども常に勉强を怠らず、高尚なる意思を有する兒童の、漸々發達し自信力を以て名譽の位置を得、而して其國に利するものあるを見る「ドクトル、アーノルド」の云ひし如く、無學と、人の多く自ら辨解の辭となす無邪氣との間に於ける奇態なる混雜よりして、或る場合に於て教育の價値に關し疑を挿むものあり、左はいへ、人の智識を除却するも再び幼兒の狀態に復すべきにあらず、唯獸畜の狀態に變ずべきのみ、獸畜社會の最も獰猛毒惡なるものに變すべきのみ、何となれば、仝氏が外の所にて指示せし如く、若し人にして良心の指導に反ぐときは、情慾の奴隷となり、兒童時代の無學と成人時代の惡德と双方の弊惡を荷ふて立つべければなり

苟くも學校に於て都合よく教育を受け始めし人は、蓋し之を中止するとなかるべし教育は、單に生活上の便宜を得んが爲めのみに勉學し、彼の日耳曼人の所謂「バン」と「バタア」との勉強のみを指すものなりと思ふは最も劣等なる意見なり

適當なる教育の目的は「ソロモン」の語にある如く、「才と教育とを得んが爲めなり、理解の語を認めんが爲めなり、才と、正義と、判斷と、衡平の教を受けんが爲めなり、平凡の心に慧質を與ふんが爲めなり、少年に智識と判定とを與ふんが爲めなり

「トーロー」(「ワルデン」の隱者、千八百六十年に死す)曰く人は一弗の銀を拾はんが爲め甚しく路を迂するを難とせず、然るに此に古聖賢の吐かれし金言にして其價値は後世の諸賢が之を保證せしものありと

悲しむべき佛蘭西の諺に言ふあり、「青年には智識、老年には力」と、適當なる教育は吾等に付するに双方を以てす、即ち青年には智識を以てし、老年には力

を以てす、「フランクリン」曰く經驗は不廉なる學校なり、然れども愚者は此に於てするにあらざれば、他に於て習ふことを得ずと

都合よく身を起すことは、半ば戰の如し、「兒童をば其往かざる可らざる道に慣らせ、然るときは老たる後も之より離るゝことなからん」

始めを克くせば進み行く程益容易になりゆくべしと雖も、之に反して若し其起點を過まれば之を正道に復するは中々容易のことにあらず、習ふは素より難しと雖も、忘るゝは尚ほ更に之よりも難し

書に就て、人に就て、思想に就て、又展覽場等に就て最も可なりと認むるものをば心中に藏め置くべし、己れが知るより人が多く知れりとて、何にも耻るに及はず唯、習ひ得べきものを知り得ぬこそ耻づべけれ

教育は獨り語學を習修し、又多く事實の數を知るを以て備はれりと謂ふべきにあらず、單純なる修業とは大に其趣を異にし、負に之に優るものなり、即ち修業は將來の要用の爲め貯藏するに同じけれども、教育は或は三十、或は

六十、或は一百の菓實を結ぶべき種子を下すに同じ、餘に曰く才智は最要なり、故に才智を得よ、而して汝の最上力を以て理解力を得よと、學識の才智に劣るは明かなる所、去りながら時折學識を正義に乏しきものなりとするは餘りなり、例へば「クーパア」の如き學識は其多く習ふたるに誇り、才智は別に知る所なしと謙遜す」と歌ひしと雖も實は然らず最も多く知る人は、如何に己れの知るとの少なきやを自諒するに足る人なり

僧正「パットラア」さえも吾等に告げしとあり曰く深く究め、奇みじく探ぐる人は自ら注意して其爲しつゝある業を過まらさらんとを要す、若し其發明にして、考證を擧げ、實驗に動機又は助援を與え、以て德性と宗教の原因に益するあらんか、又以て此生の不幸を減じ、其滿足を進むるものならしめんか即ち是れ最も其業の有益に使用せらるゝものなれども、若し唯、其行爲にして事物に光明を與ふるに止り、事の其事物以外に及ぶなからしめんか、是れ猶ほ娯樂や饗應の如く、何の使用にもならぬものなりと

「學識は粗雜、沒利益なる堆塊にして、才智が用ゐて以て建築を爲す材料たるに過ぎず」と言ふは復た正しき語にあらず

左れども亦、材料の選擇に注意せざるものは庸工たるを免れず、誰れか「事物に光線を與ふる」其結果の那邊迄に達するかを知るものあらん、學識の進級にして當時は實際無益に見えしものも、後に至りて大に貴重となりしもの甚だ多し

夫れ學識は力なり、電信の學識は時を省き、字を書くの學識は人類の談話と移動を省き、家事經濟の學識は收入を助け、衛生學の學識は健康と生命とを助け、感能上の學識は腦の倦憊を省く、果して然れば精神上の法規に關する學識は何物を省き得べきか」

「ハアベアト、スペンサア」曰く直接の自衛、即ち健康及び生命の保存に對して最も重要なるものは、學術是なり、間接の自衛、即ち吾等が之を生活の方法と稱する上に付、最大なる價値を有するものは、學術是なり、父母たるの義務を

適當に遂行するに就き、適當なる指導は唯、之を學術中に發見するを得べし凡そ公民が、之れなくば、正しく其行狀を規定すると能はざる、過去現在の國家的生活の解釋に就て、缺くべからざる註解は學術是なり、有らゆる技術の十分なる生產と、之が最高なる翫味とに就て、最も要用なる準備は尙又學術是なり、感能上と、道德上と宗敎上とに拘らず規律の目的に就て、最も有効なる研究は又々學術是なりと

「ドクトル、フヰッチ」曰く熟ら、吾れ自らの生涯を顧み、過ぎし昔しの學校に在りし時を回想するに、我習修したる歷史上の一事實も、數學上の一方式も、文法上の一原則も、詩歌の一妙句も、學術上に於ける一眞理も、每々偶然に心中に浮び來り、己れが曾て思ひしよりも多くの用を爲さゞるとなし、先づ讀みし書籍を能く理解せしむる上に於て、吾を繞りて起る事件の歷史を諒知せしむる上に於て、又實に此全生涯を更に大ならしめ、更に趣味あらしむる上に於て、吾れを助くるを見ると

最後に予は「ヲイン、スタンレー」の一節を引用すべし、其語に曰く純粹に眞理を愛するものは何ぞ甚だ稀れなる、之に反して其惠や何ぞ甚だ大なる素より其効能は攸忽に之を見る能はざるべし、蓋し世の學者が、唯其眞理を愛する單純なる心よりして自ら感ずる所あり、專ら之を研究したる結果、發明したる其發明が、此世界に對して與ふる幸福の如何に廣大なるかは、恐らく此世紀は愚ろか、次の世紀に於ても未だ認め得られざるべしと

されば「ソロモン」は能くも言れたり、賢者は聽くを好む而して學識を增すと、凡そ要用の起り來らざる知見と云ふものは決して之れあるなく、又少くとも一度見る價値なきものは殆んど之れあらじ、實際は物に些細と云ふとなく唯、心に些細と云ふあるのみ

「學識は「パトリヤーチ」の夢中に於ける神秘の梯子の如く、其下端は大地に在れども其頂點は蒼天に入りて見るを得ず、而して古往今來、學術や、哲理や、詩歌や、博識の鏈鎖を握りし大作家は、天地間の交通を保持しつゝ此神聖なる

梯子を昇降する天使の如くなり」

去りながら記臆せよ、大發明者にして世に知られざるもの如何に多きかを是れ實に悲むべきの至りならずや、而して吾等の之を悲むは其人の爲めにあらず、却て吾等が感謝の意を寓して之を記臆すべき筈なるに、此に至るを得ざるを悲むのみ、凡そ大發明者にして自家の爲め、又は名譽の爲めに働きしものは極めて稀れなり「デクター」歌て曰く

倦むなき熱心を以て眞理の爲めに討究を遂げ、之が爲めには面白からざる路をもタドリ行き、身に降りかゝる毀譽をも問はず、其上は唯之を神の心に委てぬ、假令其名は不朽の歌詞を以て、詩人の傳ふる所とならざるも

其記錄は上天に在り、其花冠は寔に光輝ある冠なるぞかし

凡そ我修むる所に注意し、又之を適用するは此生を樂むが爲めに缺くべからざる要務なり、若し我爲す事に唯我心の一半を與ふるなれば其勞や必ず我爲めに一倍の價値を生ぜん

智能上の樂みの、未だ人の幸福を增加すると甚だ少なきは轉た悲しからずや、原と「學校」と云ふ言語は、希臘に於て「休息」又は「樂み」と云ふ意義を有する語なり「ゼイ、モーレイ」氏曰く常に賢しき思想と、正しき感覺とを以て生き長らへると、幸福の爲めにも、將た義務の爲めにも双つながら最も重要なりと人の腦は「思想の堂塔、心魂の宮殿」たらざるべからず

「ドーン」「英國の詩人、千六百三十一年に死す」曰く吾等は唯、自家の農夫たるに過ぎず、若し儉勤貯蓄に勉るときは他日、地租の高くなりたる時に備へん爲め、多くの實を積むとを得べしと

現實派の定論中に多く述ぶる所あり、予は之に贊同するものにあらざれども其中に貴重なる一格言あり、曰く主旨としては愛情、基礎としては順序、目的としては進歩と

エマーソン曰く世には唯、其父の命ずるがまゝに神を拜するも己れの義務に對する觀念を、未だ己れが總ての實質の使用上に迄擴張せざる無邪氣な

る人多しと(自ら爲すべき筈なりと知る事をなさぬ人多しと云ふ意なり)

人は何事をも其身に引合せて測量す、大山の高きも滄海の深きも之を計るに「フヒート」即ち足を以てし、又數學上の方則も、我指の數に基けり、左れども吾等は尚ほ如何に憐れむべき動物なるか、寔に憐れむべき動物なるに相違なし然れども亦如何なる所迄も大くなり得べきものぞかし、人とは何ぞや人にあらずとは何ぞや

「パスカル」(佛國の文學者、千六百廿三年に生る)曰く人は考ふるものなり、心の中に於て或は爭ひつゝ、或は確認しつゝ、或は反對を試みつゝ、或は僅に知りつゝ、或は望みつゝ、或は又望むとなしに、常に考へ居れりと

彼れ又他の書中に於て說て曰く人は唯其質最も脆弱なる小艸の如きのみ然れども考を有する小艸なり、造物は之を壓潰する爲め別に武具を着くるに及ばず、一片の蒸發氣、一滴の水も尚ほ之を破るに足れり、唯造物が之を壓潰するにもせよ、人は其死を知るが故に造物よりも更に貴とし、造物は人に

對して打ち勝つときにも尚ほ其力を知らずと

人類を完全にするには、如何なる資格を有効なりとするや、冷かなる頭、温かなる心、正當なる判斷、及び健康なる躰軀、是なり、冷かなる頭なかりせば、吾等は乾度急卒なる論結をなすに至るべし、温かなる心なかりせば吾等は必ず氣儘に陷るべし、屈强なる躰軀なかりせば吾等は僅かの事より爲すとを得ざるべく、又其目的は最良たりとも正當なる判斷なければ、其結果は善よりも寧ろ害となること多かるべし

吾等が友人を稱揚せんとするに當り、常に彼は完全なる紳士なりと云ふ語を以てす「サッカレイ」問ふて曰く抑も紳士とは何を云ふ、正直に、温厚に、勇敢に、賢良にして、且つ最も敬重すべき態度を以て此等の天資を實行すべき性格を有する人を云ふ乎と、又附記して曰く紳士は或る人々が豫想し居る程多きものならずと、帝王は人に爵位を附與するを得然れども人をして紳士たらしむる能はず、唯夫れ吾等は皆、心次第にて貴人たるを得べきなり

「アーチリイコン、プアラア」曰く其身は禁酒と、嚴格と、品行の方正なるに依りて屈强の健康を保ち、其心は己れの經驗と、諸同人が吐露せし貴重なる思想とに依りて、習得したる才智の富裕なる貯藏場たり、其想像は總て純潔にして美麗なる物を集めたる繪畫館たり、其良心は己れ自らに對し又神や、總ての世界に對し、雍々たる和氣を持ち、其精神中には、神の心の住むに適したる殿堂を發見し得べきが如き人は、蓋し此人生に於て求め得べき所謂る完全なる域に殆んど近きたるものなるべしと

「ヨハン、スチユアート、ミル」曰く獨學の眞の方法は、一切の事物に就て疑問を發するに在り、決して何等の困難をも避けざるに在り、先づ否認的の批評眼を以て十分なる研究を遂ぐるにあらざれば、吾等自らよりも、又他の人よりも、或る宗義を受くるとなきに在り、思想上に起る假相、不合一、若くは錯雜を其儘看過するとなきに在り、之を要するに言語は使用する前に明白に其意を解し、捉議は贊成する前に其主意を諒解すべき樣、勉むべし、斯の如きは即

ち吾等の習ふべき科程なりと、然り寔に斯の如き科程は總て吾等の習ひ得べき所なり

教育の初幕に於ては先づ以て、人は誰にても平等と謂ふを得べく、決して爵位も、富殖も、爲に實質上の利益を與ふるとなし、「サア、タブリユ、ヨンス」云へるあり、吾れは小百姓の身代にて自ら王公的の教育を爲したるなりと、學問上には別に王家の途といふものなきは既に久しき以前より唱道せらるゝ所、今日にては寧ろ何れの途も皆王家の途なりと言ふの、更に適切なるを覺ゆ、且つ問はん、教育の賜は如何に大なるか、教育は世界の歴史に光輝を與へ之を明煌々たる進歩の大道たらしむ、教育は吾等を世界の文學を翫味するに適せしむ、教育は吾等の爲めに造化の書籍を繙き、何れにてもあれ吾等の望む所に利益の源泉を加ふ

「セクスピヤ」の所謂る「彼は人なり其一切の品性を打算し來れば、再び彼の如き人を見ると難し」と云ふとは、望み得べからずとするも「ベイコン」の所謂る

「彼は其生涯、日々美を有す」と云ふとは、兎も角も期し難きにあらず、何となれば吾等は皆、心の中に不死不盡の望みを有すればなり

縱し敎育は必ず總ての場合に於て成功するものに非ずとするも、是れ敎育夫れ自らの過にあらず、畢竟敎育制度の宜しきに適せざるに因るのみ、即ち人は時として自然の好奇心を充たさん爲め、時として變化と快樂とを以て心を喜ばしめん爲め、時として裝飾と名聲との爲め、學問智識の望みを生ずと雖も、實に人生の幸慶と、利用の爲めに、道理の賜を考慮するものは稀なり、宛も猶ほ研究と、不休の精神を休ましむべき車輛、又は漂泊變化の心をして相當の希望を以て昇降せしめ得べき高廊、又は高慢なる心を其上に休ましむべき高塔、又は爭鬪の場合に敵を制するに適したる壘堡或は要害、又は賣買の爲めに利ある店舗を、智識の中に搜索しつゝある者の如くなれども、造化の光輝の爲め、又は人の財産救助の爲めに、豫かなる倉庫を其中に搜かすものなし」

第八章　圖書館

英國の一偉人たりし「ダルハム」の僧正「リチヤード、ダベリイ」(千三百四十五年に死す)今を去ること五百年以上の昔に、書籍の讃語を書きて云へるなり、「書は鞭撻、叱咤せず、衣服金錢の供養を要せず、人を敎ゆる敎師なり、若し汝にして彼に近かんか、彼は何時とても睡り居るとなし、若し汝、彼に質問する所あらんか、彼、何事をも包藏する所なし、若し汝、彼を誤解するも彼、決して詫つまじ若し汝、イカ程無學なりとも彼、更に之を笑ふとなし、左れば幾多の智識を藏する圖書館は萬有の富よりも貴く、凡そ我が得んとを希ふものにして之に匹敵する價値を有するもの他にあるなし、故に苟くも熱心に眞理、幸福、才智學術、更には信仰の途を趁はんとする儕輩は必ずや先づ書を愛するの人たらざるべからずと」

久しき昔に在りて僧正の斯言が至理なれば、今日に於て吾等は更に之に超

えて爲す所なかるべからず、先づ今日は僧正の時世より如何に世運の進歩發達し居るかを考へ觀よ、印刷業の起りし爲めの利益は姑らく措くも、第一書籍の價甚しく低廉になりしを見る、今は一瓶の麥酒、一二本の烟草の代を以て、人が一ヶ月間に讀了し得ぬ程の書籍を購ひ得べしと雖も、僧正の時世には之に反して書籍は甚だ高價なりき、尙又今日の書籍は小にして取扱ひ易きも僧正の時の書籍は、重もく且つ大にして讀むにも、携ふるにも甚だ不便なりき、又今日にては最も深奥なる學識に關する書籍にても、苦雖なるもの少なく、殊に最も賀すべきは僧正が手に入るゝことを得し程の書籍は、吾等總て之を求め得るのみならず、更に多くの趣味ある書籍を有すると是なり彼の古代の文學に關する著作の如きも、一旦は多く散逸に歸したりと雖も今日にては逐々と索め出されぬ、又僧正の時に在りて未だ小說のなかりしとは雖しも疑を容れざる所、詩に就て之を云ふも「セクスピヤ」や「ミルトン」や「スコット」や「バイロン」は皆僧正後の人なり、況んや近代發出せし多くの作家

に於てをや、之に次で吾等は船長「クック」の愉快にして奇異の事迹に富みたる航海記や、「ダアウイン」「ハムボルドット」の面白き著作や、其他數多の大旅行者、大探險家の記述を有す、學術に於ても亦化學と地質學の如き、共に僧正の後に始まり、其後逐日發明の進むに從ひ博物學、天文學、地理學等、種々なる面白き學術の起るに會せり

「ショッペンハウエル」は曾て、自分の學術は、別に收入の種とはならざれども爲めに多くの費用を省き得たるとに思ひ到れり、左れども吾等は國民として、學術の爲め、曾に種々なる方面に向て費用を省き得たるのみにあらず、又實に大に我收入に加ふる所ありしとを甘諾せざるべからず、學校、圖書館、又は博物館の爲めに費す金錢は之を費用と謂ふよりも寧ろ原資と謂ふべきなり、尤も吾等は學校や公立圖書館の自家囊理の節儉となるが故に之れを採用せんとするにあらず、唯其の我同胞民生の此世を明煌々たらしむる上に効あるを思ひて採用するものなり、凡そ貧民の爲めには之に勝さる樂み

は殆んど他に之れあるなし

次ぎの代に於て大讀書家たるものは蓋し我が職工、技手の輩なるべしとの說を吐き、予は一度ならず冷笑せられしとあり、然れども目今公立圖書館の續々として起るは予が此說を贊くる一證ならずや、若し茲に無料圖書館を設立するに當りて其可否に付、公共の投票を募らんか、僧侶、辯護士、醫師、商人の如きは唯之に投票するものゝ一小部分に過ぎざるを見ん、抑も公立圖書館は職工或は小店番の爲め其成立を見るに至りしものにて最も之を利用するは即ち此等の徒なり、奇態にも我が市町の勞働者の爲めには書籍の必要甚だ多し、是れ畢竟其生活の單純にして變化なきに由るなり、彼の未開野蕃の民と雖も更に多くの變化を、其生存の上に有するを見る、彼は先づ其獵りする獸類の性行を知り、其遷移する場所や、其食餌をアサル所に注意せざるべからず、彼は又何れの所に於て、如何にして漁りすべきやを知らざるべからず、夫れ等につれて毎月其業とする事も變れば其食物も亦變り、其外其

武器の準備や其家屋の構造をも慮からざるべからず、尙ほ今日に於てこそ容易なるとなれども、火を點する一些事も彼にとりては曾て勞力と熟練を要する一仕事なりしなり、更に農夫に至りては其手を下す仕事甚だ多し、彼は耕やし、種蒔き、耘り、收納し、或る季節には種植に勉め、他の季節には斧斤を手にして之に對し、又常に其羊や、豕や、乳牛に注意せざるべからず、耒耘を執るも、墻垣を繞らすも、秋穫を束ぬるも亦、人の見る如く容易き業にあらず、曾て或る外人が偶ま「ワーヅワース」(詩人、千八百五十八年に死す)の讀書室を見んとを求めし時、其下婢、「此は主人の室なれども主人は野外にて勉强するなり」と告げたりと云ふ話あり、之と同じく農夫は野外に於て多くのものを習ひ得、人の思ふよりも割合に色々の事を知り居るなり、尤も此等は何れも書籍上の學問にあらずして野外の學問なれども、夫れすらも缺げるは、尙ほ之れにも劣りたるものゝ生活は實に單純無變化の極にして、年々歲

店舗や製造所に於て働くものゝ

々、或る定りたる仕事、或は恐らく其仕事の一部分に身を委ね居るなり、素より此儕は皆不思議にも近き程の熟錬を得ざるにあらざれども、其範圍や甚だ狹し、故に苟くも此儕にして單に生きたる機械たらざる以上は通常、書籍に頼りて以て必要なる變化と趣味とを求めざるべからず、蓋し此儕の爲めには或る場合に於ては此外に之を求むる途なきなり、今日にては幸に、店舗を除く外、勞働時間短縮の傾あり、尚又餘り喜ぶべきとならねども、折々は工業の緩漫なる時もあり、去りながら清閑の時を以て怠惰の時と爲すは甚だ宜しからず、清閑は最大なる神意の一なれども怠惰は最大なる咎責の一なり、即ち一は幸福の源なれども他は困難の源なり、今若し一貧人にして數日間、業務なきとあらんか、彼は何事を爲すべきか、彼は如何に其時を使用すべきか、此時に於て彼れ若し圖書館に入ることを得られしなれば彼れ更に其時を失ふことなかるべし

兒童を教育する理由は、同しく之を成人にも適用するを得べし、今や全國到る處、良好なる小學校あり兒童の教育には最上力を致たし、之に讀書を教えて而して又之に讀書を愛せしめんとを試み居れり、是れ果して何の爲めぞや、畢竟學問の人の性行を改良し、其人を更に優等なる勞働者となし、其勞働者を更に善良なる人と爲し得べき見込あるが爲めのみ、凡そ教育は寸時も之を廢すべからず、圖書館の成人に於ける猶ほ學校同樣たり、昔し「アルフレッド」王が小兒たりし時、或る書籍を得んと望れしに、母后は「讀み得る樣になれば之を取らすべし」と告げ玉ひ、王は遂に讀み得て之を得られしとの話あり、吾等の兒童も讀書を習へり、何とて王と全じく書籍を得るの途なかるべき通常所謂る社會主義を喜ばざる人々にても、若し社會主義が其贊成者の豫期するが如き効果を生すべき者ならしむれば、必ずや之に黨せしなるべし吾等が社會主義ならざるは其の通常所謂る社會主義たるものが「最大多數の最大善事」を進むるに足らずとするを以てなり、然れども此の困難は之を書籍には適用すべからず、曾て一人の貧女、初めて海を見し時、喜んで「嗚呼大

なるかな、誰れにも十分なる斯の如きものを見るとの嬉しさよ」と云へりしとあり、實やこゝには誰れにも十分なる書籍のあるあり、而して最も良き書籍ほど最も廉價なり、抑も讀書は一の快樂にして富人たりとも、其富みたるが故に之に對して多く樂み得ると云ふべきにあらず、即ち外かの物には類ひ稀なる樂みなり、吾等紛々たる實業場裡に在るものは、誰にても常に我有するよりも更に多くを望まざるなし、然るに書籍に於ては吾等が眞實之を利用し得るよりも多く効益の存在するを見る、

教育は終生盡る時期なきものなり、抑も兒童の教育は單に文法語言の上に止らず、幷せて手と目とに關する或る習熟を含まざるべからずとは、吾等が今日之を實行し初めんとする所、之と同じく一方に於て成人したる男女の生涯は、之を擧げて金錢を得んが爲めの手仕事のみに委ぬべきにあらず、智識を得んが爲めと、其心を改良せんが爲め、或る時間を之に割與せさるべからず、更に進て之を言へば誰にても人智の〆高を增してはならぬと云ふの

理あるなく、假令ひ不運にして卑賤に生れたる人にても素より之を爲すに妨げなきなり、蓋し吾等は未だ勞役者の眞價を解得せさるが故に、一般に學術を以て雲上の事と認め、哲學者や賢人や、高貴なる機械類を購ひ得る人達には至極良きとなれども唯是は斯の如き人にのみ良き事なりと思ひ居るは全く間違なり、抑も我國家の進歩は誰れの力ぞや、疑ひもなく一部は之を勇猛なる陸軍と海軍とに歸し、一部は之を我殖賢君明相に歸し、一部は之を探險者に歸し、一部は之を學者と哲學民帝國に向て道を開きたる豪邁なる家に歸せざるべからず、吾等は總て此等の人々が成功せし事業を大滿足にて記憶すると同時に、又我英國の勞働者が、其強き右手を以て爲したるとの外に、又其頭腦を大利益に用ゐたるとを忘却すべからず

「ワット」は一個の機械師なりき、「ヘンリー、コルト」は瓦師の子なりき、然れども其の製造上に與へたる改良は國債の全額よりも多く英國の富を增したりと言はるゝにあらずや、鑄鋼の發明者なる「ハンツマン」は時計師なりき、「グロ

ムアトン」は機織なりき、「ウェヂウード」は陶器師なりき、「ブリンドレイ」「マシャツト」及「ネイルソン」は皆勞働者なりき、「ヂョーヂ、ステフェンソン」は一日二片の搾乳童として身を起し十八歳になる迄、もの讀むと能はざりき、其外「ダルトン」は機織の子、「ファラデイ」は鍛冶の子、「ニューコメン」も亦鍛冶の子、「アウークライト」は理髮師に身を起こし、「サァ、ハンフレイ、デヴィー」は藥屋の見習、「ベアミンガム」の大父と稱せられたる「ボールトン」は釘屋の子、「ワット」は大工の子なり、凡そ此等の人々、又は此等同樣の人々に對して、我全世界は大に負ふ所あり、吾等は我大將軍、大政治家同樣、此等の人々に就ては他に向て誇る所ありて可なるを覺ゆ

吾等は屢「文明國民」なる語を聞く、蓋し或る國民は他の國民より一段開明の域に進み居るべし、然れども未だ何れの國も、先づ此名を以て之を喚ぶも可なりと思ふ程に達せず、乃ち吾等は、我國を以て眞成なる開明國ならしめんとに勉めざるべからず、圖書館の設立の如き確に之が爲めの坦道に進む一

歩たるべし

戸主選擧法案の通過せし時「セルブルータ」卿は、吾等は我家主共を敎育せざるべからずと雖も、夫よりも更に重要なるは彼等をして、自ら敎育し得べき樣、爲し遣さゝるべからずと說けり

世には生れながらにして終身、苦役に服すべき筈に宣告せられ居るもの少なからず、去りながら此儕の生活が其爲め不幸、又は沒趣味ならざるべからずと謂ふべき理なし、其生涯に於ける樂みや僅にして、變化や少なしと思ふなれば、好書籍に接し得んこそ最も望ましきとなれ

我大學者の一人たる「サァ、ヨン、ハァセル」吾等に告けて曰く如何に世間の事情が變化するとも、之に拘らず常に我利益となり、終生我爲めに幸福と快樂の源となり、更には假令ひ物事が齟齬し、此世界が我爲めに面白からぬ樣になる時來るも、其苦難を防ぐ楯となるべき嗜好を得んと欲せば、夫れこそ讀書の嗜好なれ、若し人に此嗜好と、之を滿足せしむべき手段を與ふるなれ

は、苟くも之に最も惡しき書籍を選みて與えざる限りは、必ずや其人をして幸福の人たらしむることを得べし、即ち此人をして、イッの世、イカなる時たる を問はず大賢、奇才、君子、勇者を首め、曾て此人生を照らせし大德たちの上流社會に入るを得せしむればなり、又實に此人をして何れの國の歸化民ともなるを得せしめ、何れの時世の人ともなるを得せしむべく、結句此人の爲めに此世界を創造し得べければなりと

書籍は殆んど生ある物なり「ミルトン」曰く書中には生氣あり、而して其生氣や常に活動して之を讀めば左ながら其人に接するが如くなりと、大著者は原と長へに死すべきにあらず「汝を高き所に上げたる、彼の光榮ある心を有する人は死せしにあらず、吾等が後に殘せし心の中に住むは、死したりと謂ふべきにあらず」

「ア、ピノ」に大圖書館を設置せし「ア、ピノ」公は皆其書籍に眞紅色の表紙を付け銀を以て裝ふを例とせり

書籍は過ぎ逝きし歲月の間に堆積したる寶なり「ラム」(英國の文學者千八百三十五年に死す)常に云へり、晩餐に向てよりも、寧ろ新書に向て感謝の意を表する方の理由多きを見ると

若し吾等にして飲酒の爲め、如何に多くの金錢を費やしつゝあるかを顧みれば、誰とても書を購ふ爲めの費澤に對して吾等を咎むるものなからん、若し之を吾等の酒藏に比すれば圖書館は如何に吾等の爲めに費少なきものなるやを知らん、多くの人は一瓶の酒價を投ずれば求め得べき良書に對しても常に永く其購求を躊躇す、吾等が「パブリック、ハウス」の事を話すと同時に、直に其酒店たるに思ひ到るは寧ろ悲しむべきにあらずや、然れども喜ぶべきは近來諸方の「パブリック、ハウス」も亦麥酒を供する代りに書を供するの氣風を生し來れり、

第九章　讀書

書籍の人類に於けるや猶ほ記錄の個人に於けるが如し、其中には我種族の歷史を始め、吾等が爲せし發明や、年々歲々、堆積したる智識と經驗とを藏し、又吾等の爲めに造化の奇異と美妙とを描き、困難の場合には吾等を助け、悲痛憂苦の場合には吾等を慰め、幽鬱の時を愉快なる時に變じ、意思を吾等の心中に蓄ゑ善き幸なる思想を吾等の心中に充たし、遂に吾等を抽て非凡超然の境に到らしむ

王にして每夕、乞食たりしとを夢み、乞食にして每夕、王となり宮中に住みしとを夢みしと云ふ二人に關する東洋の話あり、王の果して乞食に勝れるや否や、是れ予の確言する能はざる所、想像の却て現實よりも更に活然たるとあり、併し夫れは兎も角、若し吾等にして書を讀まんか、望に任せて王となり宮中に住むを得べきのみならず、尙ほ之にも勝さるは身を化して山の頂きや海の涯りに遊び、憂れもせず、不便も感ぜず、費用も要せず、此世界の最も美しき所を訪ひ得べきなり

「ブレッチャア」(英國の詩人、千六百五十八年に死す)曰く

希くは自ら心に任せて樂ましめよ、我最上の伴侶たる書籍を藏め置く所は、我爲めには光輝ある廣間なり、此廣間に於て吾れは時々、刻々、古への賢人學者と相話し、時としては又帝王を相手に取りて其言ふ所を輕重し、其勝利(若し不正當に得しものなれば)を酷評し、又我心中に於て彼等が不似合なる肖像を破滅す、抑も不確かなる虛誇を求めん爲め此不斷の樂地を離るゝとを得べきか、否な、君は富を積むに營々たれ、吾れは智識を增すに汲々たらん

書籍は屋、之を友朋に比較せらる、去りながら我生ある伴侶には死と云ふ避くべからざるとあり屋、最上最明の友を奪ひ去る、之に反して書籍に於ては歲月之を淘汰し、殘るは至醇なるものゝみとなる

此世界に於て得らるべき有らゆるのものを得たりし人にして、尙且つ其純潔なる幸福は多く書籍に在りと謂ふもの少なからず「アスカム」(英國の碩學

千五百六十八年に死す)が其名著たる學校教員中に「セイン、グレイ」夫人の所を最後に訪問したる時の面白き話を載せたり、曰く折しも夫人は曲窓の下に「プラットー」が、ものせし「メクラテス」の臨終記を讀み居り、其父や母は園中に獵りし、獵犬は猛り吠ゑて其聲、窓に達す、彼れ即ち驚て夫人に向ひ、何故此遊に伴はざるやと尋ねしに、夫人徐ろに曰く園中に於ける人々の樂みは畢竟、吾が「プラットー」の書中に見る樂みの蔭たるのみと

「マツコレイ」は富あり、名譽あり、爵位あり、勢力あり、而して尙ほ其自傳中に於て、終生の樂時は書籍に歸すと吾等に告られぬ、又其少女に與ゑたる可憐なる書中に述べて曰く麗はしき玉章、有り難く候、父は常々御身を幸ならしめんと心懸け居り候、御身が書物を好まるゝは父の何よりも嬉しく思ふ所に候、御身も父が今の歳ほどになられなば、必ず書物の、菓子よりも、手遊びものよりも、又此世界の見ものよりも、遙かに善きものなるとを知り玉はん、若し誰にもあれ、父を世界始まりて以來の、大王となし、御殿や、御庭や、ヲイシキタ

御膳や、美酒や、馬車や、奇麗なる衣服や、數多の召使を遣す程に、其代りに書物を讀むなと謂ふ人あれば、父は大王は御斷り申上げ、寧ろ屋根うらの小き室にても書物を澤山積み、貧乏に暮らし可申、讀書を愛せぬ王は眞平にて候と」

實に書籍は吾等に付與するに奇々怪々なる思想上の一大宮殿を以てす、「ウイン、ボール、リッチタア」云へるあり、帝位よりも、知惠の山の上よりの方、前途の望、廣大なりと、或る途に於て、書籍は吾等に與ふるに、現實よりも更に明白なる思想を以てすると猶ほ反照の屢實物よりも美なるとあるが如し、「ヲヨヲチ、マクドナルド」(蘇國近世の詩人)曰く總じて鏡は魔ものなり、通常平凡の室内も之を鏡に映つして見るときは詩中の一室の如くに見ゆるなりと

若し或る書籍が吾等の爲めに面白からぬとても是れ必しも書籍の過ちと謂ふべきにあらず、讀書するにも自ら工夫を要す、等閑に讀み去りては其益甚だ少なし、常に讀過したるとを現實にする樣、試みざるべからず、雖しも自ら讀み書きは出來ると思ひ居れども、眞に能く書く人は甚だ少なく、又眞に

能く讀む人も少なきなり、沒趣味、機械的に眼を行上に馳せ、葉數を醜ゑすを以て足れりとすべきにあらず、其記述したる狀況を實在にし、且つ其中に畢げられたる人を「想像上の繪畫室」に描き出す樣、勉めさるべからず、「アスカン」曰く學問は一年間に於て二十年間の經驗よりも多く敎ゆ、而して經驗の、人を賢ならしむるより寧ろ却て悲境に陷らしむること多きに反して、學問は人を安全に敎ゆ、經驗に依りて賢者となりし人は實に多くの危險に際會せし人なり、不幸なる船長とは即ち數度の難船に依りて老練となりたるものなり、惘然なる商人とは富みたる人にも、賢しこき人にもあらず、唯、數度の破産を經たる者なり、凡そ經驗を以て購ふ才智は甚だ不廉なり、若し經驗のみを以てすれば長く徘徊する間に唯、一條の問道を見出すとも亦、中々の難儀なり、素より經驗に依りて賢者たるとを證し難きにあらず、其人は又必ず才人たるべれ共、かの本道より外へ、シカモ夜中に早く奔りたる急走者の如く其身の何れより來りしかを知らざるべし、學ばずして經驗のみに依り幸福

の人となり、又は賢こき人となりし者は其數、寔に寥々たり、學問することなく、唯長き經驗に依り僅ばかりの才智と、幸福とを集め得たる少數者の前半生を注視せよ、其の老人たると、壯者たるとを問はず、如何に彼等が屢不幸に際せしか、如何に彼等が屢危難を免れしか(尙且つ二十人に一人は冒險の爲めに死す)之を思へは我子には斯の如き經驗の方法を以て、才智と幸福とを得せしむべきや否、思ひ半に過くるものあらんと

書籍を選擇するは猶ほ友朋を選擇するが如く容易ならぬとなり、吾等は讀みたるものに就き、爲したる事同樣責任あり、「ミルトン」の貴き語を以てせば「好書は未來永々の爲めに防腐して蓄積したる雄心の貴重なる生血なりと」

「ラスキン」は其「女子敎育」の中の一章に能くも言ふたり曰く卑猥なる新刊書の出づるや否や、未だ其印刷の濕ひの乾きもせぬ間に、直ぐに貸本屋より之を借り來りて膝の上に積み上げるが如きとなからしめ度ものなりと

敢て利益の爲めとは謂はず、縱令ひ樂みの爲めにても書中より最大なる分

量を吸取せんとするには、常に誤樂よりも寧ろ善良の心を以て之を讀まさるべからず、輕くして面白き書籍の價値あると、猶ほ砂糖の食料中の重要品たる如く、殊に兒童の爲めに然りと雖も、去りながら吾等は之にて生活する譯には行かざるなり

尙又時には書にして書にあらざるものあり、之を讀むは畢竟時間を徒費するに過ぎず、又之を讀めば人心を腐敗せしむる惡書あり、若し是が人なれば將さに之を街上に蹴仆さんとする如きものあり、此生に於ける誘惑と危難に對して自ら警戒を要する場合ありと雖も、要するに人を弊惡に親ましむるものは既に夫れ自ら弊惡たるなり

然れども幸に、讀めば必ず益ある書籍常に多し、所謂必要なる書物とは必ずしも人の職業上に益あるのみの謂ひにあらず、無論其爲めにも有益なるべしと雖も之を以て其最上なる要件となすべきにあらず、抑も最上の書籍は吾等を脫俗超然、此世界の困難も心配も、總て忘れ去らるべき境に昇らしむ

るものを謂ふなり

讀書妙境に入りたる時、之を邪魔するは甚だ酷なり、之に就き「ハマアトン」(美術批評家、千八百九十四年に死す)抗議を試みて曰く或る讀者が其書の著者に十分心醉せしと假定せよ、而して其著者は先以て吾等とは全く異りたる時世と文化に屬するものと假定せよ、例せば汝は今「プラットー」が著たる「ソクラテス」の辯護を讀み書中の狀景、圖畫の如く歷々と腦中に現出するものと假定せよ、五百人より成る法廷、純然たる希臘の建築、面白がりし雅典の公衆、惡むべき「メリタス」、妬み深き讐敵、友情に富み悲哀に沈みたる友朋(其名は不朽に傳えて貴むべし)が相集りたる中央に於て、貧民仝樣、夏冬の差別なしに着る安き地質の平服を着け、容貌魁奇、目前の禍にも平然として動かざると、物の譬へ樣もなきが如き一人顯れ來り、確かなる聲を以て「死するは名譽なり」と云ふを聞くと假定せよ、是れ汝が「ソクラテス」の「アリタニユーム」に於て自ら辯護せんとする狀を敘したる絕大なる文字を讀み始めんとするも

のなり、若し之を讀み終る迄邪魔せらるゝとなからんか、汝は即ち才能上の働きの報酬とも謂ふべき貴重なる快樂の、貴重なる時間を有し得るものなりと

誰にても、暫らくも快愉改善の心を發するとなくして善き面白き書籍を讀み得まじ、啻に其時のみならず記憶は終生吾等と共に存するものなり、而して光彩あり幸福なる思想の貯藏は、何時にても入用の節之を引出し得べきなり

「ブレット、ハアト」(桑港に於て造幣局の書記たりし人、詩を善くす)は極西に於ける鑛夫屯在所の狀景を歌て曰く

あら〳〵しくも鳴り響く屯所の火は、せち辛き競爭に銷沈衰弱したる、粗野なる面色と形容の上に赤き健康らしき色を映つしぬ、既にして一人は起き上がり其僅かばかりの什品を入れたる包みの中より、厚き書物を取出しければ、多くの者共は、今迄消閑の慰みにせし骨牌を投ちて新しき話

を聽かんものと、火の光りも滅えん計りに、われ後くれじと彫となりて集り來りぬ彼は高らかに讀み出しぬ、是れなん「リッツル、ネル」(少女、ネル)が賭博好きの盲翁を賭場に導きゆく事を叙したる「リッケンス」の名作)の話なりけり、恐らく小兒らしき推想に過ぎざれども、讀むものは、其中の最少年、なり、讀みゆくに連れ松柏も亦、寂として聲なく林樹も猶ほ謹聽するに似たり、其中屯所の人々は皆吾れを忘れて英國の牧野に於ける「ネル」と、共に徘徊するの思を生じぬ

英國の文學は英人の先天的に享有する所なり、吾等は既に多くの大詩人大哲學者、大學術家を產出し、今も尙ほ產出しつゝあり、何れの民種と雖も吾等の如く光彩ありて純潔貴重なる文學に誇る能はじ、吾等の文學は我商業よりも更に富み、我武力よりも更に力あるなり寔に是れ我國の眞成なる自負と名譽なり、豈謝する所なくして可ならんや

第十章　愛國心

若し曾て人の誇りて働くべき國ありとせば是れ即ち吾等の國なり「ヂヽ英國よ、汝が內部の大なるとを知らんと欲せば、猶ほ宛も雄大の心を有する小軀の如くなり」

其廣袤を言はゞ洋上の一點のみ、然れども渺々たる洋海に被る船舶の過半は英國の旗を翻し居れり

地理上の位置、吾れに利あると言ふ迄もなし、又其氣候や温和にして人に佳なり、而して一葦の銀線は數多の戰に吾等を助けたり「セクスピヤ」歌て曰く

此の帝王の島、此の陛下の地、此の尙武の國、此の第二の「エデン」、此の半極樂國、此の敵の侵掠に備へて造化の建てたる壘堡、此の幸ひなる民種、此の小世界、此の銀海上に置かれたる寶石、而して此の海は幸福少き地よりの猜忌に對し、屋を防く壁の如く、又濠の如き用を爲す

合衆國に於ける一雄辯家、該國の事に就き述て曰く南に於ては赤道、東に於ては大西洋、北に於ては北極光、西に於ては落日を以て境と爲すと、吾等は更に我帝國內にては決して太陽の沒するなしと確言するとを得るなり、英人は嶮峭の地に於て壘堡の設も要せず、又望樓の要もなし、其境は山なす波濤の上に在り、其家は深き海に浮めり」

米國の或る政治家語りて曰く英國の旗は何れの海にも、何れの港にも飜り、其兵士の晨に打つ大鼓の響は此地球の回轉するに從ひ、常に世界中に斷ゆる時なしと

然れども吾等の顧みて更に大に滿足するは、我兵士の到處、敵として顏出しせず、友朋として、保護者として顏出しすると是なり、我義勇兵の定語は「防くものなり挑むものにあらず」と言ふに在り、此語は同じく之を我陸海軍一般に適用するを得べし

此大帝國は漸を逐ふて成長せしなり、吾等は之を我祖先の勇氣と勉强とに

歸す、左れば、若し吾等にして、假令ひ如何なる事の起り來るにもせよ、更に此の金甌無缺の國土を傷くることなく、幷せて之を改良し、之を鞏固にして以て子孫に傳ふへき義務あるとを思はざるなれば、是れ洵に其分を盡くさゝるものたり

我歴史に於ても素より悔恨すべき事多し、然れども之を他國に比すれば比較的血を流すと少かりき

實戰は姑く措き、何れの國か又斯の如き永き歴史を有しながら、斯の如く僅少なる罪惡を以て汚されたるものかある、吾等は虐殺を知らず、恐怖の時世(ヂロンリスト)の沒落より(ロベスピイル)の亡滅に至る佛國革命の時代を云ふを知らず、又(シヽリヤン、ヴエスパアス)(千二百八十二年)(シヽリイ)島に於ける佛人の虐殺を云ふを知らず

戰ふ時、吾等は敵に向て大に寛仁の行爲を示せり、奈破翁との大戰爭終り、佛國の勢力地に落ち、聯合軍が巴里を占領せし時、吾等は佛國の領圖と其殖民

地とに手を着けず之を其儘に殘こし置き(唯殖民地に就ては奴隷賣買を廢すべしと云ふ單一なる條件にて)而して吾等自らは主もに此戰爭のみにて九億萬磅の國債を作りながら、佛國には國債を負はさしむるとなき約款に同意せり、熟ら此約款を顧みれば我政治家は寧ろ適當と稱するを得ざるほど、寛大なる處置に出たり、斯る時に佛人中に瓦土樓を佛國の戰利地として要求せしものありしと云ふを聞けば焉んぞ一驚するなきを得んや、要するに此時の平和約定は吾等英人に對してより却て佛國に對して大に利あるものなりき

予は今佛國殖民地、復舊のことを述べたり、然れども是れ唯奴隷の賣買を磨滅するに就ての我勞苦と犧牲の一小部分のみ、我等は葡萄牙に三十万磅、西班牙に四十萬磅を付與して以て兩國を誘ふて此賣買を止めしめたり、吾等は半世紀以上の間、シカモ幾億萬の國債を負ふたる時に於て、尚又其勢力と繁榮との今の吾等には遠く及ばさりし時に於て、阿非利加の西海岸に一艦隊

を遊戯せしめたり、其費用の年額は、時の大藏大臣「グラッドストン」氏の豫算に據れば七十万磅なりき、其外貴重なる幾多の人命をも犧牲に供せり、吾等は又西印度人幷に「モリチウス」に二千万磅を付與して奴隷を解放せしめたり、此忌むべき賣買を禁壓せんが爲め吾等の爲したる貴重なる事業は、算し來れば我國にとりては無慮壹億萬磅左右を費やしたるものなり

他の諸國に在りては其歳入の大部分を殖民地幷に附庸國より徴收せり、雅典人は年々其聯合諸州より巨額の金錢を徴用し、之を其歳入の重要項目となせり、羅馬人に在りては屬州は帝國の費途を支拂ふべきものたりと云ふを以て課税の主もなる原則となせり、故に其「シ、リィ」を制服するや、田野の産額、十分の一と、輸出輸入價格の五分とを取れり、降りて近世に至ても他の諸國、例せば西班牙、葡萄牙、和蘭の如き皆其殖民地より巨額の歳入を得たり

英國の所行は大に之に異なれり、其殖民地より歳入を得るとは偖て置き、却て其利便を進めんが爲め巨額の金錢を費せり、予が知る所にては千八百五十九年以前に在りて、此母國が其殖民地の爲め果して幾多の金錢を費やせしか、之を證する公文なきが如しと雖も、是年より千八百六十九年に至る迄の間に費やせし所は四千百万磅以上に昇れり、蓋し其前々に於ても毎年四百万磅を越えたるに相違なかるべし

而して右の報告中には兵器、兵士の被服、兵營、病院、其他の需用品費を含有せず、又新兵募集費、本陣の費用又は細々しき失費等をも算入し居らざれば、今若し是等の諸費額を合するときは、母國の實費は更に巨額なりしを知るに足らん

地中海に於ける軍事費は素より之を殖民地の費用と謂ふべきにあらず、又「マルタ」並に「ヂブラルタア」の如き駐兵地が、其地に關する費途を支拂ひ得べしと期するを得ざるも無論なりと雖も、一面より見れば吾等が此の要害を占有するものは、畢竟印度並に東洲との交通を保護せんとする主意に外な

らず、左れば何故に此交通を維持するの實務を擧げて吾等自ら之を負荷せざるべからざる歟、何故に其費途の幾部分は印度並に濠洲殖民地に於て負荷せざる歟、宜しく一問を發すべき點なり、更に進て之を言へば前に述べたる費用は、唯母國の國外に於て就役する軍隊のみに關するものなれども、國内に於ける軍隊と雖も亦殖民の目的の爲め必用あるときは之を利用(先づ自國の安全を保持する爲め適當なる備をなしたる後)するものなる以上は其經常費に對して幾分の醵出を受くると強ち無理と言ひ難かるべし

我國家の歳出中には、殖民地の爲めにする海軍の軍事費を明示せざるも、實際に於ては若し殖民地が獨立國なりせば、自ら負擔すべき筈なる海軍の軍事費一切を我國家に於て負擔す、即ち殖民地の爲めに吾等は海上の警察を掌どり、吾等の費途を以て其の沿岸を保護す、是れ殖民地の爲めには如何に大なる節約なるか、熟慮を俟ちて知るべきにあらず、見よ大英國と愛耳蘭に於ける三千五百万の人民は海軍の爲め一ヶ年二千三百万磅以上を負擔す、

然れども諸殖民地と印度に於ける三億の國民は殆んど之が爲めに何等をも負擔する所なし

更に印度の實例を見よ、印度が我帝國の通常費に對し更に直接の醵出を爲すなきは言ふ迄もなし、即ち他の殖民地全樣、自ら大なる利益を享有する母國の費途に對して何等負擔する所なきなり、英國の勞働者も、英國の納稅者も、其印度を有するが故に、一片たりとも直接の利益を受くるとなく、又實に一片たりとも國の歳入に貢獻すべき稅租を輕減せらるゝとなし

陸軍の費用に就ても亦、印度には實際、該地に於て就役する軍隊に對して必要なる費途の外、更に支出せしむる所なき樣、常に最大の注意をなせり、印度事務省が、陸軍省より要求する費途の中、印度政務官の見て以て全然必要と認むるもの以外の課額に對して、如何に手强き抵抗を試むるか、見るも面白き程なり(若し斯の如き眞面目なる問題にても面白しと謂ひ得べくんば)

又海軍に關しても印度は最も寛大なる待遇を享け居れり、其の我艦隊に依

りて大利益を受け居るは疑なき所にして、之れが爲め、左もなければ自ら負擔すべき巨万の費額を節約しながら、其醵出する所、一ヶ年僅に七万磅に過ぎず、其外燕瀛曳船、内海航船、水先料、港費等に凡そ五十万磅を費すのみ　吾等の正實なる盡力と希望は、印度人民の利益の爲めに印度を治めんとするに在り、素より吾等とても猶ほ内國に於けると同樣、偶ま彼地に於ても過を爲すと無きにあらざりしと雖も、吾等が印度を支配せし主義は寔に前述の如くなりき

思ふに印度人が是迄英人の統治に依りて利すること多かりしは夙に之を知了する所なるべし、「ドクトル、バンタア」の説によれば、「ヲリッサ」に於て土民の收入する割合は、秋收の六割に當り、極めて寛大なる土人政府にても尚ほ三割三分を取れりと、然るに吾等が印度政廳の費は僅に百分の三乃至七に過きず、乃ち若し印度人にして依然、土民の配下に殘りしなれは、其上納する稅租、今日の如く輕少ならず、性命財産、今日の如く安固ならざりしならんとは

誰しも疑を容れざる所、抑も印度が我英國の歳入上に一片たりとも貢献するなきは、少くとも確かなる事實なり、去迚吾等は印度に於て愛せられ居るべしとは主張する能はず、恐らく又シカあらんとを期するは過分の至りなりと思へども、吾等の政廳が常に尊崇せられ居るとは決して否認すべからざる事實なり

且又我統治の不人望ならさるとは、彼の暴動の間に明かに認められたりと思考す、縱令我國民が上下を擧りて勇敢なりしとも、若し我政廳にして貪慾不正の性質を帶ぶるものなりせば、即ち約言すれば、吾等にして若し印度人民の爲め信任尊敬せられ居らざりしなれば、吾等は必ず當時海中に掃ひ去られしならん、蓋し此の如き場合となれば我軍の勇猛なるも、我將校の老練なるも、其利用の途、甚だ少なかるべきなり、幸に印度の民は吾等に對して敢て反抗する所なく、此安危の際に於ける其擧動は優に吾等が信認を博し得たる證據として之を見るに足れり

ケヤビテン、ステワート」が此の暴動の時、險を冒かして「アクラ」より「デリイ」に馳せ行きし途すがら、土人共は最早英人の統治は終れるならんと思ひ、必ず之に引續き起るべき無政府の境と、困難の折に備えん爲め、其村落防禦の準備を爲し居るを見たりと云ふ

曾て「ティル」の政府に在りて外務大臣たりし有名なる佛人「バアセレミイ、セイント、ヒレイル」は、印度に於ける英國の德政に對する證言として、述て曰く英國の政治は總て人類と文明の友朋が其成功を歡迎する價値あり、抑も二億五千万の民生に對し、政治上と德義上との敎育を普及せしむるとは至難の業なりと雖も、英人は既に之を今世紀より始めたり、洵に感すべき至りなり、尤も之を完成する迄には幾多の勞力と幾多の歲月を要すべく、而して右は豫め之を推算するを得べきものにあらずと

他の民種が吾等の統治を評せし其意見は、香港幷に新嘉坡の如き地の歷史に徵すれば最も明かなり、香港に關しては「ウード」云ふあり、吾等は初め不毛

の小島を發見せり、其英領に歸せし時は僅に一簇の漁家散在するのみなりしが、忽ちにして英國の統治の下には更に歷制がましき租稅あるなく、常に正しき法律を以て支配せられ、又有利にして節約的の商業を營み得るのを知りて本土より渡來する數萬の支那人、こゝに群を爲すに至れりと、尙又一時は殆んど無人の島たりし新嘉坡に於ても全一の原因を以て、支那よりも、「マレイ」半島よりも、印度よりも、巨多の住民の移り來たるを見たり

又爪哇の例を見よ、「ヒイレン」哲學博士、千七百六十年「ブレメン」近傍に生る）曰く英國の占領に屬せし五ケ年の間、其統治は寔に適當にして寬仁なりき、此を以て其返されたる後は土人も、歐洲人も、皆再び和蘭領民に復歸する樣、身を慣らすに困難を感じたりと云ふ、即ち其の英國に屬せし短日月の間に於て、和蘭に屬せし全二世紀の間に於てより、更に多く此著名なる島上に光明を與えたりと

轉じて亞米利加に就ては「ミネソタ」の僧正「フィリップス」の面白き證言を引用

せん、僧正は英國と合衆國との双方の範圍内に於ける印度人(亞米利加の土人)に就ての關係を比較して曰く、界の此方には印度人との戰爭の爲め五億万弗を費したる一國民あり、此人民や太西洋と太平洋との間に於て、曾て印度人虐殺の場となりしとなき百哩の地をも有せず、其政府や二十年の間、年々印度人との戰なかりし年あらざりき、曾て印度人の一種族にも耶蘇教的の文明を與えしとなかりき、而して其百年紀を祝するに又血腥さき印度人との戰を以てせり、界の彼方には同じ「アングロ、サクソン」人あり、全じ無神人種あり、彼等は印度人との戰に一弗をも費さず、又曾て印度人の虐殺を見しとなし、是れ何故ぞ、加奈多に於ては印度人との約定中に是等の民種を喚ぶに「女皇陛下の印度人種の屬民」なる語を以てし、文明の之に近くと共に彼等は十分なる保護を受け、開化の爲めには助援を得、財産に就ては私權を得、法律に從ひ、法律に保護せられ、學校を有し、耶蘇教民は又之に送るに最良なる教師を以てせりと

人屢言ふ、愛耳蘭は苛刻なる取扱を受くと、然れども、是れ素より過れり、之に反して同國は其人口と、國庫に收納する租税とに比較して過當なる代議士を有せり、而して其租税や更に吾等に異ならず、却て吾等は愛耳蘭に於ては徴收するとなき地租、家税、鐵道税、財産税等、凡そ年額七十万磅以上を多く上納し居れり、即ち千八百年より今日に至る迄、英國人民は愛耳蘭に於ては徴收するとなき税金を納むると七億万磅と云ふ巨額に達せしなり、又今年に至る迄、愛耳蘭の農民は吾等よりも低き率を以て所得税を納め、又愛耳蘭の土地は英國よりも其地價を低廉にせり、而して其受くる所の助勢は英國又は蘇國よりも其割合更に大なり、其金錢の救助に至りても亦甚だ寛大なる取扱を蒙れり、例せば、彼の飢饉の時に八百万磅を受けしが如き是なり、酒精に對する税金は不當に愛耳蘭を苦むと云ふものあれども、麥酒の税は殆んど全く英國民之を拂ひ酒精に就ても亦、英蘇の國民は百分の九十二を拂ひ愛耳蘭は僅に百分の七、九より拂はざるなり、蓋し英人と蘇人の意思は正義

と、相當なる寛仁とを以て愛耳蘭を遇せんとするに在ると予の確保する所なり

平和も戰爭全樣に勝利なるものあるとは吾等の知了する所、吾等若し世界の人類發達史を繙けば、我祖先に就て双ながら共に誇るべき理由あるを見ん

英語は急速の進歩を以て蔓延し、世界に於ける人類の通用語たらんとする勢あり、然れども「ベイコン」が「ドクドル、ブレフエヤ」に「學問の進歩」を英語より羅甸に譯せんとを求め、之を書きたる語の世に通せざるは、讀者を限定する所以なり、乃ち羅甸に譯するは此書を再生せしむるものなり」と云ひしは未だ久しき昔のことにあらざりしなり

何れの國と雖も我國の如き瑰麗純潔にして高尚なる文學を以て誇り得べきものあらじ、是れ敢て予が英人たるの故を以て之に偏するものにあらず「セクスピヤ」が此世界の文學中に於て拔群無比たるは一般に異議なき所、其

外「チヨウサア」「ベイコン」「ミルトン」「スペンサア」等、亦何れも我國民の名譽たり

(近世の數大家は姑らく措き)過日以太利に於ける有名なる雜誌が、世界中の最良なる書籍に付、投票を募り數百の讀者は各其意見を發表せしが、其最高點を得し八本の中、聖書其一を占め、四以上は英書なりき

更に我商業上の政策に付之を述べん、總て他の諸國は勉めて外國貿易を制し、其殖民地と附屬地には、他國品に重稅を課して以て強て母國の產物を用ゐしめ居れり、米國の大經濟家「ウェルス」曰く英國を除き、外の諸國の商業政策は、商業は他の國々を損せしめて唯、一國を益するに在りと云ふ原理に基けりと、吾等は獨り我港灣を公開し、他國の貿易に何等の制限を加ふるとなし、彼れ又曰く此點は英國の特得なり、外の諸國民にして未だ全一政策を採りしものなしと、彼は進で此の例を布哇國や、曾て「ベネツエラ」と「ブリチツシユ、ギヤナ」との間に爭點となりし範圍に適用し、若し彼等にして英領となれば直に世界に向て全然公開せらるべしと雖も、外の諸國に屬せば總ての

外國貿易は重稅を課せられ、出來得る限り嫉妬的に擠排せらるべしと云へり、實に吾等の政策は適當にして寛大なると深く自から信じて疑を容れず發明上の歷史に於ては「ワット」の名は長へに蒸滊機關と聯想せられ「ステフエンソン」は滊鐵車「ファートストン」は電信機「アークライト」は紡績機械「ハアグリーブス」は「ゼニイ」紡績機械の一種「フチックス、タルボット」は寫眞と長へに聯想せらるべし

醫學上に於ても血液の循環は「ハアヴエイ」に依りて、發明せられ、魔睡法は「シムソン」の爲めに實用に供せられ、外科治療に於ける防腐法は「リスタア」に依りて施行せられたり、學術に於ても吾等は多くの大家を有せり「ベイコン」と「ニュートン」「ヤング」と「ダアウヰン」「デヴヰ」「ダルトン」「カヴエンリッシュ」「ファラデイ」「ハアセル」「ウヰリヤム、スミス」「ライエル」「マアチソン」其他を云へ

予は此の等の事實を、吾等の信任を加んが爲めに記述するものにあらず、何れ

も皆我先人に取りては大名譽にして、吾等亦之を稱揚するに憚からずと雖も、其代り吾等は之が爲めに一大責任を負ひ居るものなり

然れば吾等は總て「ミルトン」の祈禱の辭に贊同すべきか、其辭に曰く、ヲヽ神明よ、此英帝國を其周圍に散在する娘分なる諸島と共に、名譽ありて人の羨むが如き高さに建て上げ、斯く幸福の狀に吾等を停まらしむるものは、洵に神明の力にあらずして何ぞやと、去りながら吾等は此大なる賜に對して神明に謝するのみを以て足れりとすべからず、須らく之に値する樣に勉めざるべからず、記憶せよ、最深の力は最靜なるとを、又人と其行爲は物質に依りて支配せらるゝものにあらず、唯道德上の力に依りて支配せらるゝものなるとを、

「英國」は「人に各其義務を行ふ」と望むべき權利あり「吾れは總て汝の爲めに斯の如く盡せり、汝は吾が爲めに何を爲せし乎」とは其の吾等に向て語る所、寔に過去の全史を回顧すれば、我國は賢しこくして寛大なる精神に信任し

て、以て此國が曾て戰て得たりし勝利にも、更に劣るなき名譽なる方法にて、此國を統治したるものなりと云ふも過言にあらざるを信ず、英語を話す總ての人民が一大國民を形成する時節の來るを望むと、豈之を夢想と謂ふべけんや

恐らく予は餘り自國を誇り、自國に偏するものなりと思はれもせん、然れども事實の自ら明白なるものあるを如何せん、況んや彼の「モウリス」(英國の僧にして文學、哲學の大家、千八百七十一年に死す)が、いみじくも言はれし如く「自國を愛する念の強き人は、之を要するに他の國民に對して正路を踏むものなる」に於てをや、己れの國を愛するとは、其公民たる觀念を高め、個人又は家族の利害小なる範圍より吾等を拔て、之を國民生活の眞に廣く且つ雄大なる境に置くべし、此眞成なる帝國精神は之を虛榮と謂ふべきにあらず、我言語と文學との擴張に就き、海陸に於ける我人民と我商業の發達に就き、又斯くて吾等の頭上に落ち來りし大責任の深旨に就き、正當に之を誇りて可

なり

第十一章　公民

吾等は總て此國の政府の一部分なれば、其最も重要なる義務の一は、如何にせば此身を此大責任に適せしむるを得べきやを究むるに在り、右には深切心は言ふ迄もなく並せて勉强と、思考とを要す、抑も此帝國の廣大なるは既に夫れ自ら危險の原因たり、吾等の支配する中には數多の民種あり、而して其或るものは吾等自らとは大に其思想と、希望とを異にす、試みに印度を看よ、其人口は殆んど英國の人口に十倍し、而して種族と信仰を異にする數多の民種に分裂せり、其中、眞の「ヒンヅー」人は吾等と同じ一大民種に屬し、啻に言語の起源と、組織とを同ふするのみならず、時には同一の言語の存するを見る、例せば印度に於ける多くの地名が「アア」なる語を以て終り居れり、是即ち我「ボロー」(獨立市と云ふ意)なる語に當るものにして、彼我相同しく共に、通

常語尾となれり、然れども「ヒンヅー」は僅に印度住民の一種に過ぎず、彼等は其血緣に於て南方の「ドラヴヰリヤン」種、又は東方の「マレー、チヤイニイス」種等よりも、寧ろ吾等に最も近し、(素より歳月の久しきと、地理の相隔りたるとの故を以て、今は互に大なる差違を生じ居ると無論なり)、彼等は又宗教上に於ては回々教徒とは全く反對の位置に立つ、蓋し此回々教徒なるものは、若し吾等が印度を去るなれば、必ず再び國内の勢力を占むべきものたり

尤も印度は其最大なるものに相違なしと雖も、畢竟吾等が大責任の一たるに過ぎず、此全世界の上に於て吾等は常に他の數多の大國民と相接し居れり、左れば双方とも謀術や、熟慮や、耐忍を要する問題は間斷なく發生するが故に、政治家は如何なる場合には之に讓歩し、如何なる場合には強硬の態度を執るべきかを知らざるべからず

人類の歴史は吾等に示すに幾多の大帝國の興廢を以てせり、埃及、「アッシリヤ」、「比耳斯亞、羅馬は何れも一たび興りて遂に亡びぬ、最も近代に於ても「ヒスパニヤ」や「ベニス」は吾等の今爲すか如く船舶、殖民及び商業を以て一時非常に繁昌せり、若し吾等にして其覆轍を踏まざらんとを欲せば其過誤を避けざるべからず、時に曰く

千年辛ふして一國を作るべし、一時間能く之を塵土となすに足る

此外交政畧に關しては、他の國民と平和を保つと我義務たると同時に我利益たり、不幸にして一の國民は、他の國民を認めて敵となすとありと雖も、更に其實相を照らし出せば吾等は何れも均しく人類たれば、宜しく友誼を以て交るべきものたるを見ん、或る「ウエールス」の說教者は曾て此事を、頗る面白き譬諭にて證せり、彼れ曰く吾れ一日、出でゝ歩行し居りし時、偶ま向ふの山に妖怪然たる者の居るを認めぬ、近て之を見しに人なり、尙ほ更に近て之を見れば我兄弟なりきと

他の國民と雖も同じく人なり、又實に同胞なり、其利害は吾等と多くの途に

於て互に相關係する所あり、彼等苦めば吾等も亦苦み、彼等惠を受くれば吾等も亦之に浴するなり、而して英國の利害の最大なるものは此世界の平和と、繁昌とに在り、戰爭の花々しき有樣は人の想像を迷すと多く、其赫々たる戰の壯觀と、形勢とに就き曾て「何れの兵士も皆其糧嚢中に大將の卸を携ゑ居れり」との話を聞きしとはあれども、其爲め人類の上に蒙らせたる無限の悲痛を實證するものなきを如何せん、

戰爭の爲めに起る殺戮痛苦は想ふも恐ろしき程なり、即ち是れ仲裁法贊成者の敵なき論據なり、實に今日の狀況は人類の本性に對して大恥辱とも謂ふべし、野蕃人種に在りては武力に訴ゑて其紛爭を決すると多少恕すべき所なきにあらずと雖も、苟くも開明の民にして尙ほ之に賴るとは、啻に我德に反するのみならず、幷せて又我常識に反するとなり、今日にては平和の時と雖も全歐洲に於て三百五十万の常備兵あり、戰時となれば其數增して一千万以上となるべく、又目下計劃中の方法にして成れば其數更に增して

二千万以上となるべし、其表面上の費用は年額二億万磅以上と唱ふれとも大陸にては大抵徵兵法に依るを以て實費は更に之よりも大ならん、今若し此等三百五十万の壯丁を必要の途に使用し、其勞力の價を、僅に一ヶ年一人に付五十磅と假定するも、其額壹億七千五百万磅に上るべし、即ち歐洲に於て軍事の爲めに捐る金額は一ヶ年三億七千五百萬磅に達するものなり、素より之には金錢上の問題より更に深く、更に大なる考慮を要すべきものありと雖も金錢は兎も角、人の勞働と、人の性命とを代表するものたり、此今日の海陸軍の組織に對して誰れか愼重なる豫言なくして看過するを得んや寔に斯の如き狀にて過ぎゆけば、假令ひ之れか爲め延ひて戰爭を起すことなきにもせよ、遂には資力限りの狀となりて衰亡すべきや必せり

歐洲に於ける重もなる國は今や益深く負債の境に向て走れり、過去二十年間に於て以太利の國債は四億八千三百萬磅より五億千六百萬磅に上り、墺太利は三億四千萬磅より五億八千萬磅に上り、魯西亞は三億四千萬磅より

七億五千萬磅に上り、佛蘭西は五億萬磅より十三億萬磅に上ぼれり、千八百七十年に於ける世界各國の國債を合算すれば其額四十億萬磅に達す、殆んど信すべからざる程、恐ろしき巨額ならずや、然るに今日は果して如何、其數増して六十億萬磅以上に出て尚ほ増加し居れり

殊に此巨大、恐るべき負債の大部分は價値ある財産とはならず、漫に無用の目的を充たす爲めなりしに於てをや、即ち此巨額の金は全く濫費せられたるなり、尚ほ國交の點より之を見れば更に悲むべきとなる、戰爭の爲め、又は其準備の爲めに費されたるなり、實際に於て吾等は今日決して眞成の平和を樂み得るものにあらず、幸に戰爭、即ち血を流すことこそなけれ、依然として恐るべき苦痛の下に吟呻するものなれば、取りも直さず戰時の狀況に在るものなり、吾等の自國に於ても亦國家歳入の三分の一は未來の戰爭に對する準備に之を費やし、他の三分の一は又、過去の戰爭の爲めに支出し、僅に殘り三分の一のみ政府の經常費として使用せらるる實狀なり、吾等の賭し

居る利害は甚だ大なり、而して今日にては國民間の利害は極めて錯雜を重ね、何れの戰爭も實際に在りては內國戰爭と相異なる所あるなし

予は「如何なる價にても平和を望む」と云ふ者にあらざれども、去迚又「殆んど如何なる價にても平和を望む」ものなりと自白して恥る所なし、尤も仲裁法に付すると能はざる或る重大なる問題も、時に之れなきにあらざるべしと雖も、之に就き最大なる智識を有する「ラッセル」伯の言はれけるは、過去百年間には、初めより干戈に訴えずして好決着を見るとの出來ざりしと思はるゝ戰爭あらざりしと

予が最後に「ガムベッタ」氏に面會し此事に付話せし時、氏は例の活潑なる語調を以て語りて曰く若し現今の如き費用の割合連續する時は、佛蘭西人は總て兵營の前に乞食となるの日到來すべしと、然るに其費用の割合は爾來曾に連續せしのみならず實に増加せり

此に於て乎、歐洲の狀勢焉んぞ恐慌の狀に陷らざるなきを得んや、見よ魯西